

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第43輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

# 池田寺遺跡

— 発掘調査報告書 —

1989

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第43輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

いけ だ でら  
池田寺遺跡  
— 発掘調査報告書 —

1989

大阪府教育委員会  
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



調査区周辺



34-0S 出土土器

## 序 文

和泉市域は、今、話題の吉野ヶ里遺跡と決して遜色のない池上曾根弥生大集落の成立以来、泉州の先進地として発展し、奈良時代には和泉国の国府が設置される等、常に中心的立場を占めてきています。そして、今回調査を行なった池田寺遺跡をはじめ、信太山丘陵縁辺には、数多くの著名な集落や寺院が成立しています。

池田寺遺跡は、廃「池田」寺跡と消長を共にしたことが既往の調査によつて判明していますが、その廃「池田」寺跡は、「和泉名所図会」によると、開基は僧行基で、大同年中（806～810年）に弘法大師によって真言宗の道場となつたとされ、その後、南北朝の戦火にあい、この時、かろうじて一坊のみ焼け残つたのが現在の明王院で、明徳年中（1390～1394年）に再興されたとなっています。また、池田氏の墳寺であるとも記されています。

調査の結果は、寺院の創建が7世紀中葉に遡ることが明らかにされ、開基者への疑問、寺院と建立氏族並びに関連集落の消長等の既往の調査を補完する貴重な資料を得ることが出来ました。

本発掘調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局、同岸和田工事事務所、和泉市教育委員会、その他地元関係者の皆様と調査を担当された財團法人大阪府埋蔵文化財協会の皆様に深く感謝いたします。

平成元年六月

大阪府教育委員会  
文化財保護課長 川瀬 誠

## 序 文

池田寺遺跡は、既往の調査によって廃「池田」寺の伽藍を中心に7世紀初頭から9世紀前葉と、14世紀の集落跡が、東西、南北各々数百メートルの範囲に拡がっていることが確認されています。そして、廃「池田」寺が、池田首によって7世紀中葉に創建され平安時代には衰退するものの、現在の「明王院」に法灯が継承されていることや、「池田」下町の地名で現在にまで呼称されてきたことは大変意味あることと思われます。

今回の調査は、当該遺跡の南東隅部に当たり、調査の結果については本報告書に詳しく記述しているところですが、既往の調査結果を補完すると共に、新たに古墳時代の集落の存在の推測と、奈良時代の良好な土器の一括資料を得たことや、平安時代前期の集落を確認することが出来たことが特筆されます。

本報告書が、池田寺遺跡のみならず、地域の古代史解明の端緒として大いに利用されることを願って止みません。

最後に、調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました日本道路公団大阪建設局、同岸和田工事事務所をはじめとする関係者各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいている近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会各位に対し、深謝申し上げます。

平成元年六月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
理事長 仁賀奈祐吉

# 例　　言

1. 本書は、近畿自動車道和歌山線建設に伴う、大阪府和泉市池田下、室堂に所在する池田寺遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本調査は、大阪府教育委員会と財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。

3. 現地調査は、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当し、昭和62年12月22日から昭和63年8月31日まで実施した。引続き平成元年6月30日まで整理作業を行った。各年度の担当者は、以下の通りである。

昭和62年度　　調査課第6班　技師　岡本武司、岡戸哲紀

昭和63年度　　調査課第5班　技師　岡本武司、桜井久之

4. 調査の実施に当たっては、日本道路公団岸和田工事事務所、和泉市教育委員会、ならびに地元関係諸氏の格別のご配慮を得た。記して謝意を表したい。

5. 調査および報告書の作成に当たっては、小笠原好彦（滋賀大学）、栄原永遠男（大阪市立大学）、堀田啓一（権原考古学研究所）、水野正好（奈良大学）、植木久（財団法人大阪市文化財協会）、仮屋喜一郎（泉南市教育委員会）、乾哲也、白石耕治（和泉丘陵内遺跡調査会）、灰掛薰（和泉市教育委員会）、広瀬和雄（大阪府教育委員会）各氏のご指導、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。

6. 本調査では、土壤・花粉・珪藻化石分析、及び火山灰分析を川崎地質株式会社に、木製品の保存処理を財団法人元興寺文化財研究所にそれぞれ委託し、実施した。

7. 遺構写真撮影は各調査担当者、遺物写真撮影は小倉勝が担当した。執筆は第Ⅰ章を岡本、第Ⅱ章を桜井、第Ⅲ章を岡本、桜井、第Ⅳ・Ⅴ章を岡本が担当し、編集は岡本が行った。なお、木製品は調査課第5班技師武内雅人、石製品は同石田成年が執筆した。

## 凡 例

1. 本書に掲載した地形図、遺構実測図などに付した方位北は、特に示さない限り座標北を示す。「T. N.」と示した場合は、真北を示す。真北は本調査区付近では、座標北より約 $0^{\circ}18'5''$ 西に振る。
2. 本書に掲載した遺構実測図などに付した座標軸は、すべて第VI系国土座標に基づく。X、Yそれぞれの座標値は「km」単位で標記し、単位記号を省略した。
3. 本書で用いた遺構面などの高さの標記は、すべて東京湾標準潮位（T. P.）を基準としており、本遺跡付近では、すべて+値を計測する。本書ではこの「T. P. +」を省略して用いる。単位はすべて「m」である。
4. 本書に使用している地区割は、本協会が第VI系国土座標を基準に独自に設定したものである。また便宜的に他の地区割も併用する。詳細は本文中に記す。
5. 現地調査及び本書で用いた遺構の呼称方法は、すべて本協会の規定に基づく。遺構番号は、遺構の種類にかかわらず通し番号とし、遺構種類の略号は、その後に付けて呼称した。但し本書中において遺構種類の略号を省略しているものがあるが、これらはすべてOPである。遺構種類の略号は以下の通りである。

OB	掘立柱建物	OL	池・沼	OO	土坑	OP	ピット
OS	溝	OW	井戸	OX	その他・不明		
6. 本書で用いた土層及び土器の色調については、本協会規程に基づき、日本色研事業株式会社「新版 標準土色帖 5版」（1976）による。
7. 本書中の遺物番号は、すべて通し番号であり、本文、挿図、写真図版、出土遺物観察表のいずれのものとも一致する。

# 本文目次

序文	i
序文	iii
例言	v
凡例	vi
本文目次	vii
挿図目次	viii
表目次	xi
図版目次	xii
第Ⅰ章 経過 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 既往の調査 .....	1
第3節 調査・整理の方法 .....	5
1. 調査の方法 .....	5
2. 整理の方法 .....	7
第Ⅱ章 位置と環境 .....	10
第1節 地理的環境 .....	10
第2節 歴史的環境 .....	12
第Ⅲ章 調査成果 .....	16
第1節 基本層序と包含層出土遺物 .....	16
1. 微地形 .....	16
2. 基本層序 .....	16
3. 包含層出土遺物 .....	20
第2節 遺構と遺物 .....	29
1. 古墳時代以前 .....	29
a. 土坑 .....	29
2. 奈良時代 .....	32
a. ピット群 .....	32

b . 溝 .....	33
c . 土坑 .....	46
d . 落込み .....	56
3 . 平安時代 .....	56
a . 掘立柱建物 .....	56
b . ピット群 .....	63
c . 井戸 .....	64
d . 溝 .....	73
e . 土坑 .....	74
f . 不明遺構 .....	77
4 . 鎌倉・室町時代 .....	78
a . 溝 .....	78
b . 石列 .....	81
c . 土坑 .....	82
5 . 江戸時代以降 .....	84
6 . その他の出土遺物 .....	85
第IV章 遺構・遺物の検討 .....	100
1 . 包含層について .....	100
2 . 遺構について .....	105
3 . 出土遺物について .....	106
第V章 まとめ .....	110

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 .....	2
第2図 1978年～1980年大阪府教育委員会調査区平面図 .....	3・4
第3図 調査区地区割模式図 .....	6
第4図 須恵器蓋の形態 .....	8

第5図	須恵器杯の形態	9
第6図	和泉市位置図	10
第7図	池田寺遺跡周辺地質図	11
第8図	池田寺遺跡周辺遺跡分布図	13
第9図	調査区微地形図	17
第10図	基本層序柱状図1	18
第11図	基本層序柱状図2	19
第12図	第2層、第3a層、第3b層 出土土器	21
第13図	第4層 出土土器1	23
第14図	第4層 出土土器2	24
第15図	第5層 出土土器	25
第16図	第6a層 出土土器1	27
第17図	第6a層 出土土器2	28
第18図	包含層出土車輪文タタキ目の須恵器	28
第19図	第7層、13-OO 出土土器	29
第20図	12・13-OO 平・断面図	30
第21図	21・23-OO 平・断面図	31
第22図	47-OO 平・断面図	32
第23図	34-OS 遺物出土状況 平・断面図	35・36
第24図	34-OS 出土土器1	37
第25図	34-OS 出土土器2	38
第26図	34-OS 出土土器3	39
第27図	34-OS 出土土器4	40
第28図	34-OS 出土土器5	41
第29図	34-OS 出土遺物構成比グラフ（個体数）	42
第30図	42・290・344～346・348・351・356・358・359・370・451・452・494・589 595・608・614・616・641-OS 断面図	45
第31図	289・352・357・360・361・371-OO 平・断面図	48
第32図	347・354・393・397-OO 断面図	49
第33図	383・390・420・449・450・455-OO 平・断面図	50

第34図	456・457・460・463・464・486～490—OO	平・断面図	52	
第35図	491・498・509・539・548・564—OO	平・断面図	53	
第36図	654・655—OO	平・断面図	54	
第37図	561・562・611・617・634・637・658—OO	平・断面図	55	
第38図	341—OB	平・断面図	57	
第39図	342—OB	平・断面図	58	
第40図	621—OB	平・断面図	59	
第41図	622—OB	平・断面図	60	
第42図	656—OB	平・断面図	61	
第43図	掘立柱建物の柱間及び方向模式図（単位cm）		62	
第44図	621・622—OB、その他のピット	出土土器	64	
第45図	267—OW	平・立面図	65	
第46図	267—OW	断面図	66	
第47図	267—OW	出土土器 1	68	
第48図	267—OW	出土土器 2	69	
第49図	267—OW	出土鉄製品（鎌）	70	
第50図	267—OW	出土木製品 1	71	
第51図	267—OW	出土木製品 2（井筒材）	72	
第52図	52・55・57・61—OS	断面図	74	
第53図	52・55—OS	出土土器	74	
第54図	63～65・83・103・105—OO	平・断面図	75	
第55図	119・137・142—OO	平・断面図	76	
第56図	142—OO	出土土器	77	
第57図	133—OX	出土土器	78	
第58図	30・32・33—OS	断面図	79	
第59図	60・136・139—OS	断面図	80	
第60図	7・54—OS	断面図	81	
第61図	7・54・56—OS	出土土器	82	
第62図	9—OO	平・断面図	82	
第63図	10・11・29—OO	平・断面図、31—OS	断面図	83

第64図	5・53-00 平・断面図	84
第65図	1-OL範囲推定図（左）と明治18年測量の地図（右）	85
第66図	その他の出土土器、鉄製品	85
第67図	出土瓦	86
第68図	出土石製品	87
第69図	I区全体図	93・94
第70図	III区第1遺構面全体図	95・96
第71図	III区第2遺構面全体図	97・98
第72図	II区全体図	99
第73図	包含層出土遺物構成比グラフ	101
第74図	第4層出土遺物分布図	102
第75図	第5層出土遺物分布図	104
第76図	第6a層出土遺物分布図	104
第77図	第7層出土遺物分布図	105
第78図	須恵器蓋・杯構成比グラフ	108
第79図	金属製容器模倣形態の土器	109
第80図	遺構模式図	112

## 表 目 次

ピット法量表	88
第1表 包含層出土遺物数量表	101
第2表 須恵器蓋・杯各形態数量表	107
出土遺物観察表	113

## 図版目次

卷頭図版 上 調査区周辺

下 34-OS出土土器

図版1 池田寺遺跡全景

図版2 全景（I区・III'区）

図版3 全景（II区）

図版4 全景（III'区）

図版5 全景（III区第1遺構面）

図版6 全景（III区第2遺構面）

図版7 土層（I～III区西壁、II区下層、1-OL東肩部）

図版8 土坑（15～17・19・20・22-OO）

図版9 土坑（12・13・21・23・47-OO）

図版10 溝（34-OS）

図版11 溝（34-OS）

図版12 溝（34-OS）

図版13 溝（34-OS）

図版14 溝（42・359-OS、362・658-OO）

図版15 溝（344～346-OS）

図版16 溝（348・349・351・355・356-OS、357-OO）

図版17 溝（370・451・452・494-OS）

図版18 溝（589・595・608・641-OS）

図版19 土坑（289・347・352・360・371・637-OO、290・638-OS）

図版20 土坑（360・361・363・383・390・393-OO、358・638-OS）

図版21 土坑（397・420・449・450-OO）

図版22 土坑（455～457・460・463-OO）

図版23 土坑（464・486～490-OO）

図版24 土坑（491・498・509・539・548-OO）

図版25 土坑（561・562・564・611-OO）

- 図版26 土坑（617・634・654・655-OO、614・616-OS）
- 図版27 落込み（2-OL）
- 図版28 掘立柱建物（341-OB）
- 図版29 掘立柱建物（342-OB）
- 図版30 掘立柱建物（621-OB）
- 図版31 掘立柱建物（622-OB）
- 図版32 掘立柱建物（656-OB）
- 図版33 掘立柱建物・ピット群（342・622・664-OB、III区第2遺構面）
- 図版34 ピット群（III区第1遺構面）
- 図版35 井戸（267-OW）
- 図版36 井戸（267-OW）
- 図版37 井戸（267-OW）
- 図版38 溝（52・55・57・61-OS）
- 図版39 土坑（63～65・83-OO）
- 図版40 土坑（91・103・105・117-OO）
- 図版41 土坑（119・137・142-OO）
- 図版42 不明遺構（133-OX）
- 図版43 溝（30～33-OS）
- 図版44 溝（54・56・59・60・136・139-OS）
- 図版45 石列（6・7・54-OS）
- 図版46 土坑（5・53-OO）
- 図版47 土坑（9～11・29-OO）
- 図版48 その他（畦畔、包含層須恵器甕出土状況、足跡）
- 図版49 池・溝・土坑（1-OL、3・4・24・25・28-OS、5・26・27・48-OO）
- 図版50 出土遺物（第2層、第3a層、第3b層）
- 図版51 出土遺物（第3b層、第4層）
- 図版52 出土遺物（第4層）
- 図版53 出土遺物（第4層、第5層）
- 図版54 出土遺物（第6a層）
- 図版55 出土遺物（第6a層）

- 図版56 出土遺物（第6a層）
- 図版57 出土遺物（13-OO、第7層）
- 図版58 出土遺物（34-OS）
- 図版59 出土遺物（34-OS）
- 図版60 出土遺物（34-OS）
- 図版61 出土遺物（34-OS）
- 図版62 出土遺物（34-OS）
- 図版63 出土遺物（34-OS）
- 図版64 出土遺物（34-OS）
- 図版65 出土遺物（621・622-OB、III区第2遺構面ピット、第1遺構面ピット）
- 図版66 出土遺物（267-OW）
- 図版67 出土遺物（267-OW）
- 図版68 出土遺物（267-OW）
- 図版69 出土遺物（267-OW）
- 図版70 出土遺物（267-OW）
- 図版71 出土遺物（267-OW）
- 図版72 出土遺物（267-OW）
- 図版73 出土遺物（267-OW）
- 図版74 出土遺物（267-OW）
- 図版75 出土遺物（52・55-OS、142-OO）
- 図版76 出土遺物（133-OX、その他）
- 図版77 出土遺物（その他、7・54・56-OS）
- 図版78 出土遺物（瓦）
- 図版79 出土遺物（製塙土器、サヌカイト）
- 図版80 出土遺物（石製品）

# 第Ⅰ章 経 過

## 第1節 調査に至る経過

池田寺遺跡は、古くから飛鳥時代の瓦が散布することで知られた池田寺跡を中心とする周知の遺跡で、現在も池田寺跡は、「明王院」としてその名を残している。1978年～1980年には、明王院北方で大阪府教育委員会によって大規模な発掘調査が実施され、飛鳥時代から室町時代に至る大規模な集落址などが確認された。<sup>注1</sup>

しかしながら、近年、関西国際空港建設着工と共に同関連事業である近畿自動車道和歌山線の建設が促進され、同路線が本遺跡内の池田下、室堂地内を通過することになった。このため大阪府教育委員会は、本遺跡内において、同路線が通過する部分 4,813 m<sup>2</sup>について全面的に発掘調査を行う必要を認めた。これを受け財団法人大阪府埋蔵文化財協会は大阪府教育委員会の指導のもとに現地調査を担当することになり、1987年12月10日付けをもって日本道路公団との間に池田寺遺跡発掘調査の委託契約を締結した。

現地における発掘調査は、1987年12月22日に着手し、1988年8月31日に終了した。出土遺物の整理及び発掘調査報告書の作成は、1988年9月1日から行い、1989年6月30日に、本報告書の刊行をもって終了した。

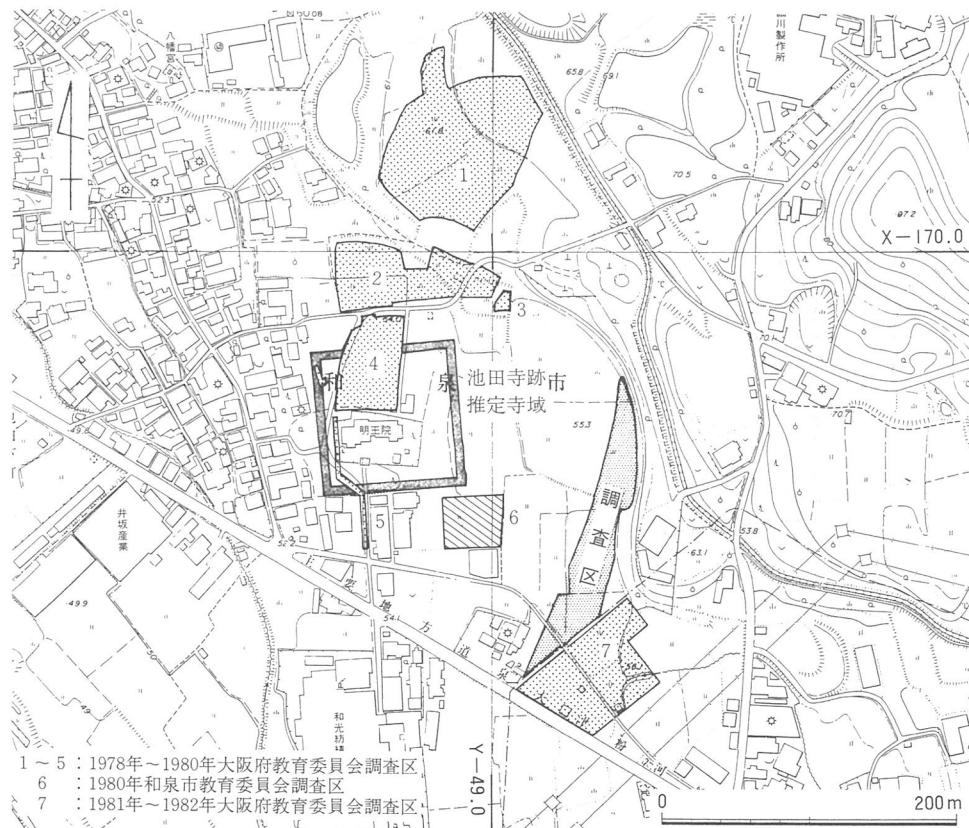
## 第2節 既往の調査（第1・2図）

池田寺遺跡は、先述したように池田寺跡を中心とする遺跡である。池田寺については、現在も「明王院」としてその名を残しており、真言宗の寺院として人々の信仰を集めている。この名は「和泉名所図会」にも見ることができ、これによると、池田寺の開基は僧行基で、大同年中（806～810年）に弘法大師によって真言宗の道場となったとされている。その後、南朝元年（1332年？）に南北朝の戦火にあい、この時、かろうじて一坊のみ焼け残ったのが、現在の明王院で、明徳年中（1390～1394年）に再興されたとなっている。また池田氏の墳寺であるとも記されている。

池田寺についての学術的な最初の調査は、1944年に発行された石田茂作氏による「飛鳥時代寺院址の研究」を待たなくてはならない。氏は、当時伝承のみで古瓦が散布するだけ

の池田寺跡について、その古瓦の散布状況と周辺の地割り、古道との関係から池田寺を法起寺式伽藍配置であったのではないかと推測された。また数種類の軒丸瓦や軒平瓦なども採取されており、寺院の建立が飛鳥時代末期を下るものではないことを明らかにされた。

本格的な発掘調査は、石田茂作氏の研究から30数余年経た1978年～1980年に大阪府教育委員会によって、マンション建設及び浄水場建設に伴う発掘調査が実施されたのが最初である。<sup>注4</sup> 調査地は、明王院のすぐ北側で、池田寺跡の推定寺域内の北西部と寺域外の北側一帯の約17,000m<sup>2</sup>である。今回の調査区から見れば北西方向にあたる。この調査では、81棟の掘立柱建物と瓦窯、大溝、古墳などが検出された。これによって、池田寺遺跡が7世紀初頭から9世紀前葉と14世紀の集落址であることが確認され、古代寺院に先行し、またそれに伴う集落として注目された。またこの集落の中に灌溉用と考えられる大溝が検出されたことから古代における段丘開発と集落、そして寺院との関わりが論じられることとなつ<sup>注5</sup>。一方、この調査では、池田寺創建当初の伽藍などは検出できなかったが、出土した瓦



第1図 調査区位置図



第2図 1978～1980年 大阪府教育委員会調査区平面図

の研究などから寺の創建が7世紀中葉で、平安時代には衰退していたことがつきとめられた。また、創建当初の平瓦に「池田」または「池田堂」とヘラ描きされたものが出土しており、建立氏族がこの地の郷名氏族である「池田首」であることを裏付ける結果となった。

次いで1980年には、和泉市教育委員会によって、自家用倉庫建築に伴う発掘調査が実施注7された。調査地は明王院の南東約50mの地点の約650m<sup>2</sup>で、今回の調査区の西方約60mの地点である。この調査では、掘立柱建物2棟、溝、土坑などが検出された。掘立柱建物は鎌倉時代以降のもので、明王院の東南方向にも中世の集落が広がることを示唆した。また溝は6世紀末から7世紀初頭のもので寺院創建以前の遺構として注目できる。

1981年～1982年には、再び大阪府教育委員会によって発掘調査が実施されている。注8これは泉州山手線建設に伴う発掘調査で、調査地は池田寺遺跡の遺跡指定範囲の南東部にあたり、今回の調査区の南部とは隣接する位置である。この調査では、近世の削平のため、僅かに残った中世の遺構と近世の遺構しか検出できなかったが、中世の遺構の広がり方からこの時期の遺構はさらに南東方向に延びるものと推測された。

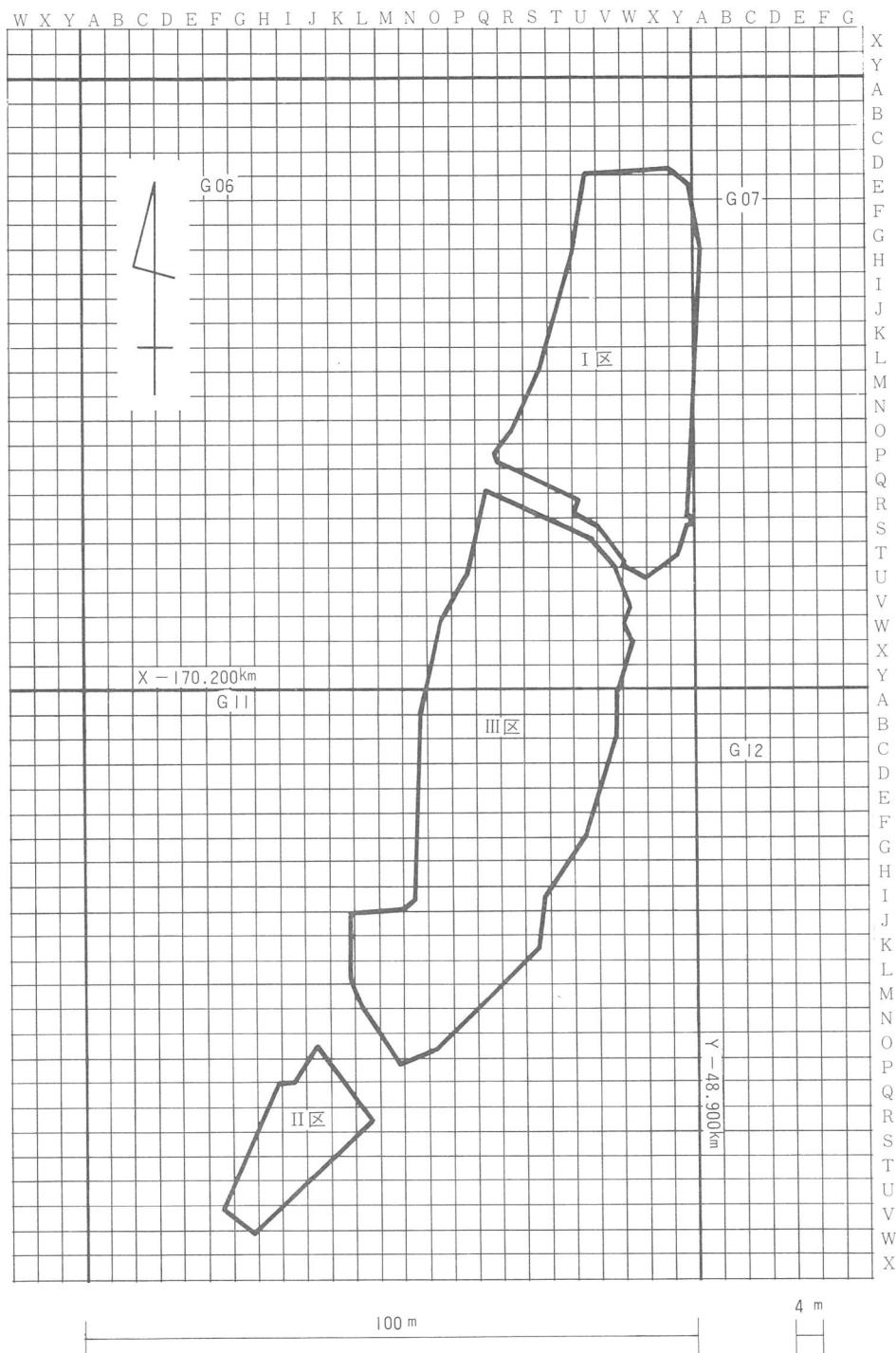
以上の三回の発掘調査から、池田寺遺跡の北部地域については大規模な集落が、寺院創建以前から一時衰退するものの中世に至るまで営まれていたことがわかった。しかしながら未だ池田寺の伽藍などその実態については不明な点が多く、また遺跡北部以外の地域についても、中世の遺構が認められるのみでそれ以前の様相については、ほとんど具体的に把握されていない。今回の調査区は、遺跡の東部から南東部に位置しており、既往の調査の空白を埋め、池田寺遺跡の性格をより一層具体化させるものと期待された。結果、多大な成果をあげることができた。

### 第3節 調査・整理の方法

#### 1. 調査の方法（第3図）

本協会職員は、固有職員と近隣の各地方自治体からの派遣職員とから複合構成されている。こういった環境の中で円滑な発掘調査及び遺物整理作業を行うためにその作業の標準化を図ることが必要となった。そのため本協会は、独自の発掘調査規程を設けており、今回の発掘調査においてもすべてこれに基づき行った。調査区の地区割りについても本協会発掘調査規程に基づくが、若干の説明を加えたい。

地区割りは、大阪府発行新版（昭和59年建設省国土地理院承認）の2,500分の1の地形



第3図 調査区地区割模式図

図を基準とする。地区名はこの地図の表題に続けて500m四方の地区名、100m四方の地区名、4m四方の地区名を並べて呼称する。従って今回の調査区の地区名は、「大D-4-12-G06または11」である。4m四方の地区名については、第3図を参照してもらいたいが、X軸に平行するアルファベットを先に読むことになる。ただし通常は、2,500分の1の地図の表題は冠して呼称しない。なお現地調査において調査区が里道や市道によって三ヶ所に大きく分断されるため、これを便宜上I～III区と仮称した。またIII区は、発掘調査の工程上、その北端部を先行して調査したため、この先行した部分を便宜上III'区とした。現地調査ではこの仮称地区名と正規の地区名を併用しており、本報告書の中でも必要に応じてこの仮称地区名を使用している。

## 2. 整理の方法

**基本的な分類・集計** 現地調査終了後の出土遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測などの整理作業についてもすべて本協会発掘調査規程に基づき行ったが、出土遺物の分類、集計については、本遺跡の出土遺物の概観を把握した上で、独自に以下の基準に基づき出土遺物分類集計表を作成し行った。このデータは、包含層や遺構の理解に役立て、本報告書の本文中においてもこのデータ値を使用している。

出土遺物は、主に須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、須恵系土器、土師系土器、国産陶磁器、輸入陶磁器に分類し、これらを更に杯、皿、壺、甕などの各器種に分類した。黒色土器はA類とB類に分類した。瓦器の中には、一般に「瓦質土器」といわれる器面に炭素を吸着させた釜、甕なども含めた。須恵系土器とは、11世紀以降に見られる須恵器のような還元炎焼成された土器のことと、一般に「東播系」と呼ばれる鉢などがこれに相当する。また土師系土器とは、鎌倉時代以降に見られる土師器のような酸化炎焼成された土器のことと、釜や小皿などがあり、一般に「湊焼き」と称せられる甕などもこれに相当する。なおここで使用したこれらの名称及び分類基準は、本報告書中において便宜的に使用するものであり、他のものに対し何等異論を唱えるものではない。

**須恵器・土師器の分類（第4・5図）** 今回の調査において包含層及び遺構から出土した須恵器と土師器は、本遺跡を考える上で主要な遺物である。量的にも多く、様々な器種、形態が見られることから、細分類することが可能と思われる。今回、行った分類作業は、<sup>註9</sup>飛鳥・藤原宮跡、または平城宮跡の発掘調査の整理分類に負うところが多く、分類されたそれぞれの形態の名称などはこれらを引用している。ただし出土量の多い須恵器の蓋と杯

については若干、これらの整理分類を参照して設定したものもあるため以下に説明を加えたい。

蓋はA、B、C、G、H、F類の六形態に分類できる。

A類 口縁部が外反した後、端部が下方に突出する、いわゆる「Z字状口縁」と呼ばれる形態を有する。天井部は平坦かあるいは中央が若干窪み気味になるものが多い。調整は天井部に回転ナデ調整を施すものと回転ヘラケズリ調整<sup>注10</sup>を施すものとが認められる。

B類 口縁部がA類のように外反せず、端部に至るもので、端部は下方に突出する。天井部は平坦なものと中央が若干窪み気味なものがある他、最頂部から口縁部まで緩やかなカーブを描くものがある。調整は天井部に回転ナデ調整を施すものと回転ヘラケズリ調整を施すものとがある。

C類 口縁部の形態は、B類に似ているが、端部が下方に突出せず、やや丸めの面をもつて終る。天井部はいずれも最頂部から口縁部まで緩やかなカーブを描く。調整は、天井部に回転ナデ調整を施すものと回転ヘラケズリ調整を施すものとが認められる。

F類 口縁部や天井部の形態は、A類と全く同じであるが、宝珠状のツマミではなく、輪状のツマミが付く。調整は、天井部に回転ヘラケズリ調整を施す。杯Fに伴う蓋と考えられ、金属製容器類の模倣形態と考えられる。

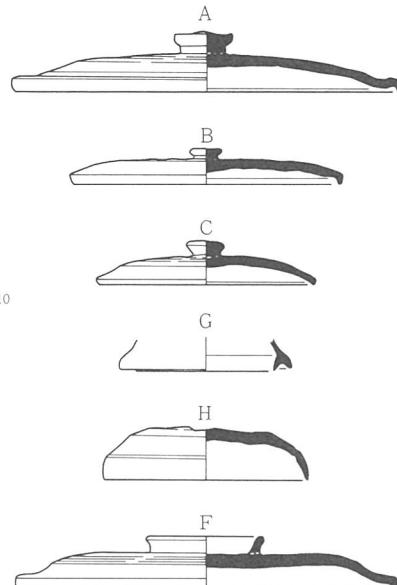
G類 口縁部に返りをもつものである。天井部まで残存するものはなかった。最頂部には宝珠状ツマミが付くものと思われる。

H類 若干丸みをおびた天井部から内弯して口縁部に至り、端部は丸く終る。天井部の調整は粗く、ツマミは付かない。杯Hに伴うものと考えられる。

杯はA、B、G、H、F類の五形態に分類できる。

A類 高台の付かない平らな底部から斜め上方に向かってまっすぐにのびる口縁部をもつ。端部は丸く終る。

B類 A類に高台が付いたものである。高台は、底部と口縁部との境目に近い所に貼付け



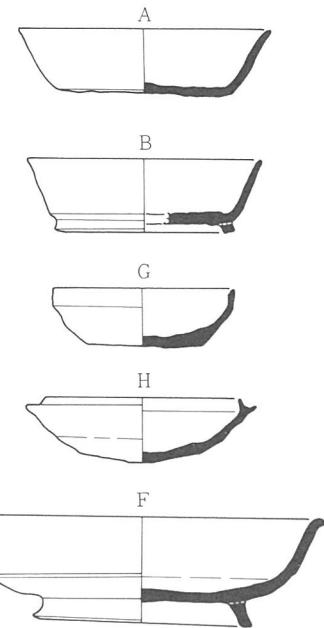
第4図 須恵器蓋の形態

られたもので、高さは5mm前後とそれほど高くない。

G類 高台の付かない平底の底部をもつが、口縁部は、内弯しながら斜め上方に立ち上がり、A類とは明らかに形態を異にする。大きさもA類よりも小形である。

H類 丸底の底部から斜め上方にのびる口縁部をもち、端部は内傾し、受け部を有する。

F類 平底に高く外方にふんばる高台が付くもので、口縁部は内弯しながら斜め上方に立ち上がり、端部は外弯して丸く終る。蓋Fと対になるものと思われ、金属製容器類を模倣した形態と考えられる。



第5図 須恵器杯の形態

(注)

1. 大阪府教育委員会 「池田寺遺跡発掘調査現地説明会資料I」 1979
- 大阪府教育委員会 「池田寺遺跡発掘調査現地説明会資料II」 1979
- 広瀬和雄 「池田寺遺跡における7、8世紀の集落構成」 『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第2回）資料』 1980
2. 秋里籬鳴編 「和泉名所図会」 1796
3. 石田茂作 「飛鳥時代寺院址の研究」 1944
4. 注1に同じ
5. 和泉市教育委員会 「和泉市の文化財」 1984  
広瀬和雄氏のご教示による。
6. 小笠原好彦 「古代寺院に先行する掘立柱建物集落」 『考古学研究』 111号 1981  
広瀬和雄 「古代の開発」 『考古学研究』 118号 1983
7. 広瀬和雄 「中世への胎動」 『岩波講座 日本考古学6 変化と画期』 1986
8. 和泉市教育委員会 「池田寺跡」 『府中遺跡群発掘調査概要』 1981
9. 大阪府教育委員会 「池田寺跡、須恵器窯跡発掘調査概要」 『泉北丘陵内遺跡発掘調査概要』 1982
- 奈良国立文化財研究所 「平城宮跡発掘調査報告II」 1962
- 奈良国立文化財研究所 「平城宮跡発掘調査報告VII」 1976
- 西弘海 「土器様式の成立とその背景」 1986
- 小山雅人 「飛鳥・白鳳時代の土器編年」 『京都府埋蔵文化財情報』 第29号 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
10. ここでいう回転ヘラケズリ調整とは、器壁面に緻密に施された回転ヘラケズリによる調整手法で、一部のものは、回転ヘラミガキ調整と区別し難いものも認められ、成形時のそれとは明らかに区別される。依って本書においては、以後、成形時のものと区別する為、「回転ヘラケズリ調整」と明記する。

## 第II章 位置と環境

### 第1節 地理的環境（第6・7図）

池田寺遺跡は、和泉山脈に源を発する槇尾川によって開析された河岸段丘上に位置する。槇尾川は、南東から北西方向に向かって流れ、その右岸に信太山丘陵、左岸に和泉丘陵を形成している。本遺跡は、その信太山丘陵の南端近くにあり、槇尾川を挟んで、東西に連なる和泉丘陵を眺望することができる。

信太山丘陵や和泉丘陵は、新生代の第三紀（鮮新世）末から、第四紀（更新世＝洪積世）のはじめにかけて形成された大阪層群を基盤とし、その上部に、砂・礫およびシルトから成る高位段丘堆積層が存在する。<sup>注1</sup> 和泉丘陵側では、その北西部の頂上付近に高位段丘面が残るにすぎないが、信太山丘陵では広範囲にその分布が認められ、その段丘崖には基盤となる大阪層群が露出している。

信太山丘陵は、光明池の西岸付近を軸として、堺市大森～草部～和泉市上町～黒鳥町を結ぶ扇形を呈している。北に向かって開いた

この扇形は、南北約7km、東西約3kmの広さをもち、標高は北辺で30m～40m、南端近くで約90mである。本遺跡のある南西側の一辺は、主として槇尾川の浸食作用によってできた段丘斜面が直線的に連なっているが、扇形の弧の部分・南東側の辺の部分は、小規模な開析谷の発達が著しく、樹枝状に入り組んだ複雑な地形を呈している。こうした地形を利用して、多数の溜池が造られているが、その周辺部では宅地造成化が進行し、ニュータウンの建設が進められてきている。

丘陵部の縁辺には中位段丘面が広がっている。本遺跡のほとんどは、この段丘上に位置する。この段丘は直径2cm～15cm程度の砂岩

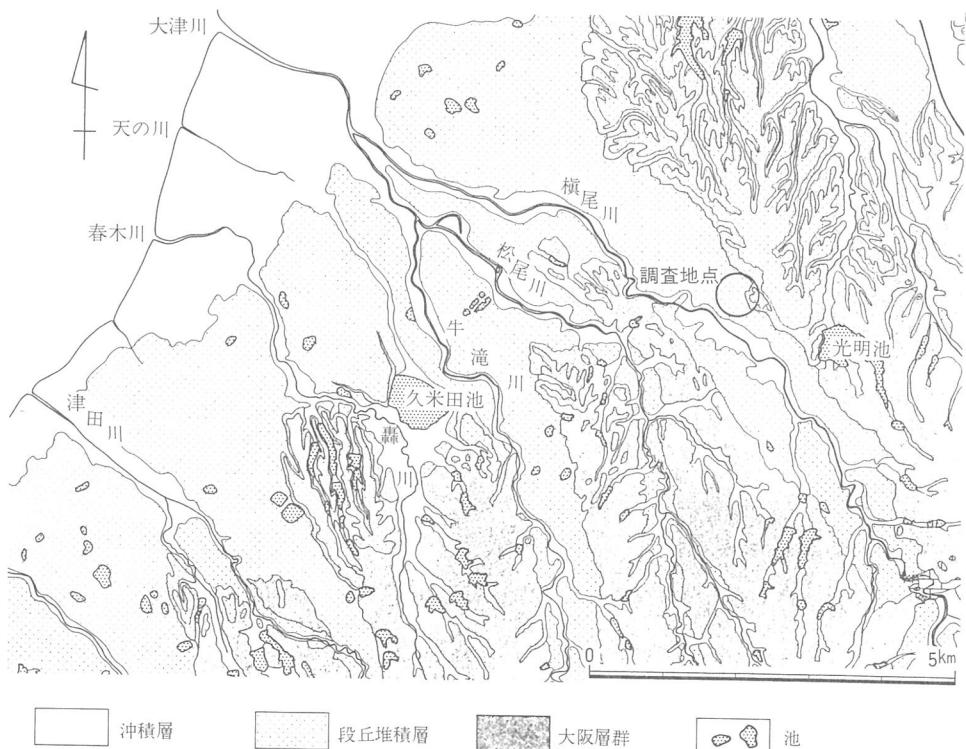


第6図 和泉市位置図

や花崗岩を中心とした円礫から構成されているが、表面は1m前後の表土層で覆われている。本遺跡と横尾川を挟んで対岸に位置する和泉市万町北遺跡も中位段丘上に営まれたものである。現在、この段丘面は水田として利用されているところが多く、集落もその縁辺部に連なるように位置している。

中位段丘につづく低位段丘の分布は、横尾川中、上流域では連続性に乏しいものとなっている。低位段丘が広い分布をみせるのは、和泉市一条院町以西で、和泉市府中町に位置する和泉国府跡はこの段丘上にある。

以上述べてきたように、本遺跡は、なだらかな丘陵を背にした幅の広い中位段丘上にその主要部分を置いているようである。しかしながら今回の調査区における最終遺構面は、そのほとんどが沖積地状の土層を基盤としており、埋積谷の存在を推測させる。段丘上は、横尾川河床からの比高差が大きく、段丘上の開発には丘陵の開析谷に集まる水の利用が当然考えられてきたであろう。現在は、昭和16（1941）年に完成した光明池からの用水によって段丘上はくまなく灌漑されている。



第7図 池田寺遺跡周辺地質図

## 第2節 歴史的環境（第8図）

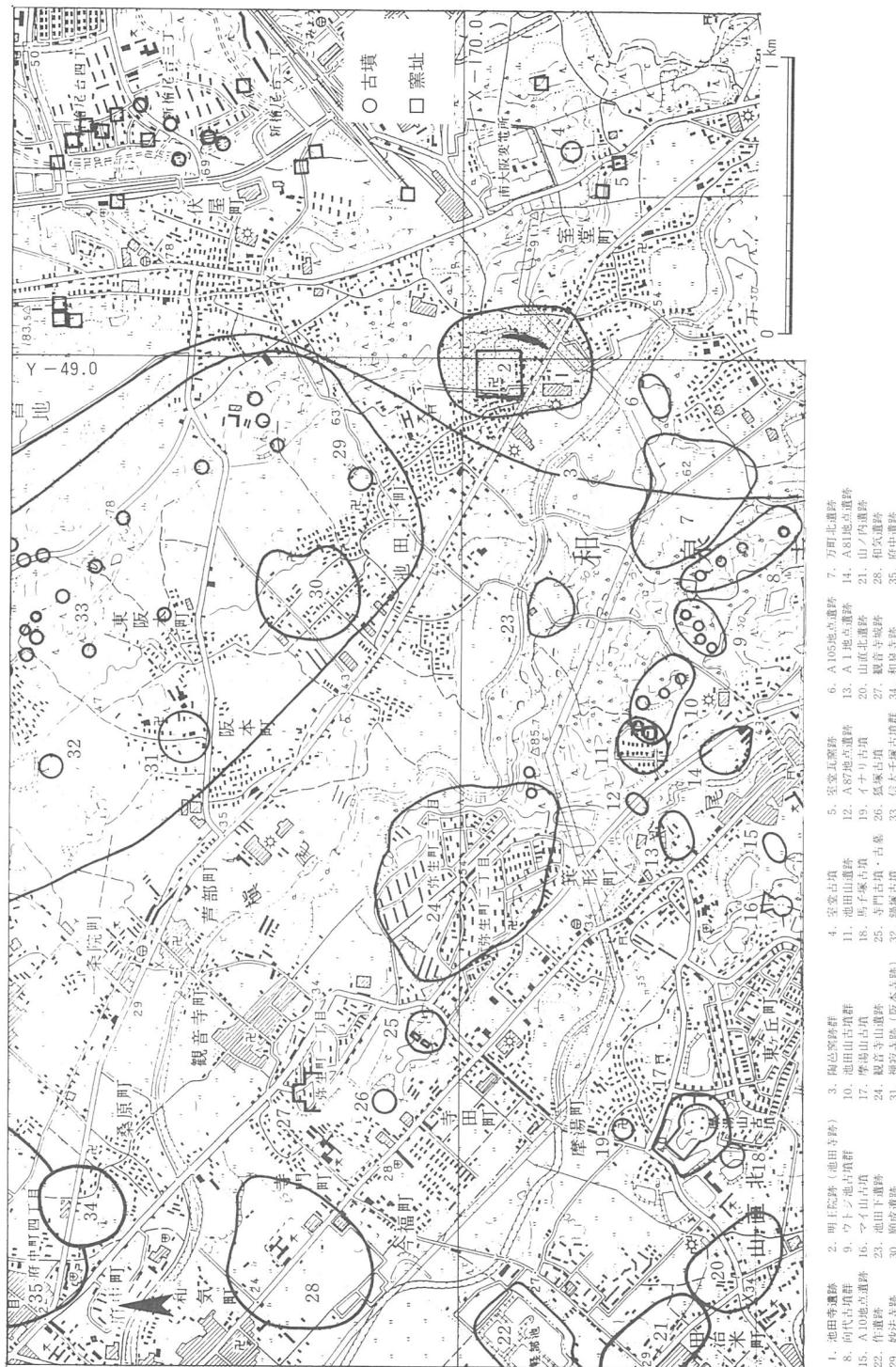
池田寺遺跡は、律令体制下の和泉国和泉郡池田郷にある。和泉国という旧国名は、大和、山城、摂津、河内とならんで、五畿内の一つに数えられている。和泉国内には、北から、大鳥、和泉、日根の3郡があり、その和泉郡には、信太、上泉、下泉、輕部、坂本、池田、<sup>注3</sup>山直、八木、掃守、木島の10の郷が存在していた。ここでは、池田郷のある大津川流域を中心に、その歴史的環境を見て行くことにしよう。

大津川は、和泉山脈から流れ出る、槇尾・松尾・牛滝の三河川を集めて大阪湾に注いでいる。その下流域において、先土器時代の遺物の出土が知られている。伯太北遺跡出土の<sup>注4</sup>国府型ナイフ形石器がそれである。また、小形のナイフ形石器や舟底形石器を出土した高石市大園遺跡では、3つの石器ブロックが検出されている。<sup>注5</sup>

縄文時代草創期のものとされる有舌尖頭器は、伯太北遺跡や池田下遺跡に近い散布地A<sup>注6</sup>91地点などから出土している。縄文時代中期末～後期の遺跡としては、槇尾川上流の仏並遺跡が著名である。<sup>注7</sup>本遺跡とは槇尾川を挟んで対岸に位置する万町北遺跡、池田下遺跡で<sup>注8</sup>も後期の土器が数多く出土している。<sup>注9</sup>晩期終末の遺跡としては虫取遺跡などがあげられる。<sup>注10</sup>

虫取遺跡は、弥生時代前期の遺跡でもあるが、その北に位置する池上・曾根遺跡もその頃から集落が営まれている。池上・曾根遺跡は、中期になると集落の周りに環濠を巡らすこの地の拠点的な集落となる。しかし中期後半には新たな可耕地を求めて、周辺に小規模な集落が枝分れしていった。<sup>注11</sup>その一つが万町北遺跡で、中位段丘上に竪穴住居址や周溝墓などが見つかっている。<sup>注12</sup>後期には高地性集落の典型例とされる觀音寺山遺跡が、槇尾川と松尾川に挟まれた和泉丘陵の突端部に出現している。<sup>注13</sup>弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡は、低位段丘上や沖積地にも多く存在する。<sup>注14</sup>槇尾川右岸では府中遺跡・七ノ坪遺跡<sup>注15</sup>などがあり、左岸に和氣遺跡がある。<sup>注16</sup>

觀音寺山遺跡とは松尾川を挟んで対称的なところに、泉州の古墳を語る際に避けて通ることのできない摩湯山古墳<sup>注17</sup>がある。<sup>注18</sup>墳丘長200m余りの前方後円墳である。その時期は、前期末～中期初頭に位置づけられる。摩湯山古墳の周辺には、馬子塚古墳、イナリ古墳といった中・小規模の古墳も見られる。中期に入ると、和泉郡という範囲では古墳の規模は縮小傾向にあるが、かろうじて首長墓の系譜は辿ることができる。この頃から大園遺跡<sup>注19</sup>は、すべて掘立柱建物で構成される集落が現われてくる。また、現在の光明池周辺では中村浩氏による陶邑編年I型式に属する須恵器の窯址が見られるようになる。<sup>注20</sup>後期の群集墳



第8図 池田寺遺跡周辺遺跡分布図

には、信太山古墳群・向代古墳群・ウトジ池古墳群・池田山古墳群がある。信太山古墳群<sup>注21</sup>は、信太山丘陵の南西部一帯に広がっており、狐塚古墳、鍋塚古墳のような盟主的なものもある。向代・ウトジ池・池田山の各古墳群は、万町北遺跡の背後の丘陵上に位置し、横穴式石室を内部主体とする円墳を中心としたものであるが、松尾川を挟んでその南には、<sup>注22</sup>前方後円墳のマイ山古墳がある。先述した万町北遺跡は、6世紀～7世紀の集落遺跡としても注目される。本遺跡から、横尾川を遡ること約4kmのところに黒石1号墳がある。この古墳は、泉州では屈指の規模の横穴式石室をもつことで知られる。石材に大形の花崗岩を用いており、この地域では異質な存在と言える。石室の形態から6世紀後葉に築造されたものと考えられている。

黒石1号墳が造られた直後から本遺跡の集落の形成が進む。そして7世紀中葉、池田寺が建立され、時を同じくして、和泉寺・坂本寺・安楽寺が横尾川流域に造営される。それらは2km～4kmの間隔で存在しており、古代寺院のあり方としては、極めて接近している。池田寺は池田首、坂本寺は坂本臣といった氏族によって建てられた寺院と思われるが、寺院を建立し、それを運営して行く経済力がどこから得られたものかは重要な問題である。

和泉寺は府中遺跡の南東の一角にあり、付近に残る水田畦畔の方向から、2町四方の寺域<sup>注23</sup>を有していたことが窺えるが、詳しい実態は不明である。坂本寺（禪寂寺）は、発掘調査<sup>注24</sup>が行なわれ、塔・回廊・中門址の一部が明らかになり、法隆寺式の伽藍配置をとることがわかっている。坂本寺の北側には信太山古墳群が広がり、両者を同一氏族の所産と考える意見もある。池田寺は、1978年～1980年の調査で、寺域北限を画する溝が検出されているが、寺院中枢部分の詳細はわかっていない。<sup>注25</sup>安楽寺についても不明な点が多いが、この寺は承和6（839）年に和泉国分寺になっている。安楽寺は、池田寺からさらに4kmも横尾川を遡行した地にあり、狭隘な段丘上に位置する。こうした地に寺院が営まれ、やがて国分寺となっていく背景には、横尾川沿いの道が、和泉国府に通ずる古代の主要道であったことがその理由の一つに考えられよう。

和泉国は、主要河川が南東から北西方向に向って流れているため、正方位に対して斜行する条里が行われた。また、丘陵部に挟まれた谷部では、小規模な条里が施行されていた。この地域の条里地割の問題に関しては、かつて藤永正明氏が論述している。<sup>注26</sup>氏によれば、主条里は横尾川右岸の池田下付近を東限としている。また万町北遺跡周辺では主条里と異なる小規模条里が見られるという。和泉国府はこの主条里に乗っているが、和泉寺・坂本寺・池田寺周辺には正方位をとる独自の地割が敷かれている。そうした正方位を意識した

地割は、今回の池田寺遺跡の調査地でも確認することができた。周辺の主条里に対して、こうした寺院周辺の小規模条里がどの範囲まで及んでいたのか、また、そうした条里を周辺にも及ぼす意味がどこにあったのかは今後の課題であろう。

奈良時代から平安時代にかけての集落は、万町北遺跡にも見られる。その第2次調査では、木枠組井戸が検出され、中から木簡が出土している。<sup>注29</sup> 鎌倉時代の集落としては、和気遺跡の環濠を伴う屋敷地の検出例がよく知られる。<sup>注30</sup>

(注)

1. 市原実 「近畿の丘陵」『アーバンクボタ』23 久保田鉄工株式会社 1984
2. 和泉丘陵遺跡分布状況調査会 「和泉丘陵遺跡分布調査報告書」 1977
3. 竹内理三編 「角川日本地名大辞典 大阪府」 1983
4. 大阪府教育委員会 「大園遺跡発掘調査概要VII」 1982
5. 注4と同じ
6. 注4と同じ
7. 注2と同じ
8. 効大阪府埋蔵文化財協会 「仏並遺跡」 1986
9. 和泉丘陵内遺跡調査会 「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要V」 1986
10. 和泉丘陵内遺跡調査会 「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要VI」 1987
11. 和泉市教育委員会 「和泉市の文化財」 1984
12. 大阪府教育委員会 「池上・曾根遺跡発掘調査概要XI」 1983
13. 和泉丘陵内遺跡調査会 「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要III」 1984
14. 注11と同じ
15. 注11と同じ
16. 大阪府教育委員会 「七ノ坪遺跡発掘調査概要III」 1984
17. 和氣遺跡調査会 「和氣」 1979
18. 大阪府 「大阪府史」 第1巻 1978
19. 注4と同じ
20. 中村浩 「和泉陶邑窯の研究」 1981
21. 泉大津高校地歴部 「和泉信太千塚の記録」 1963
22. 注2と同じ
23. 注2と同じ
24. 和泉考古学研究会 「和泉黒石1号墳石室実測調査報告書」 1983
25. 和泉市教育委員会 「府中遺跡群発掘調査概要III」 1983
26. 大阪府教育委員会 「禅寂寺(坂本寺)跡調査概要」 1966
27. 注11と同じ
28. 注4と同じ
29. 和泉丘陵内遺跡調査会 「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要IV」 1985
30. 注17と同じ

## 第III章 調査成果

### 第1節 基本層序と包含層出土遺物

#### 1. 微地形（第9・10図）

第II章第1節において述べたように、今回の調査区のほとんどは、比較的平坦な地形上に位置する。I区およびIII区の一部では、東接する丘陵の裾部が調査区内に及んでおり、若干ながら西に傾斜する地形となる。しかし楨尾川の流れと直交する南北方向の傾斜を捉えた調査区西壁断面では、その傾斜はわずかなものである。最終遺構面の標高からそれを窺うことにしよう。西壁断面を通じて最も標高が高くなるのは、I区の南端で54.3mである。逆に標高が最も低くなるのは、II区の中央部で52.7mである。両者の差は、直線距離で約180mであったが、その比高差はわずか1.6mでしかない。

調査区のI区～III区の区分は、既存の里道などに制約されて設定したものであった。しかし第9・10図を見て分かるように、各調査区境界の標高の変化は、やや顕著なものがある。おそらく現在見られる里道などは、ある程度本来の地形に制約を受けて設けられており、開発以前の地形を幾分かは反映しているものと思われる。

なおI区においては、近世に行なわれたと思われる池の構築によって、人工的にその微地形が改変されていることが窺われる。

#### 2. 基本層序（第10・11図：図版7・48）

本調査区の最終遺構面に至るまでの堆積土層は大別して八層に分かれる。その内第1層～第7層までについては出土遺物を確認した。第8層についても遺物包含層の可能性があるが、今回の調査においては出土遺物は認められなかった。それ以下の土層は礫と粘土が互層になっており、段丘層か否かはともかく、本書においては地山層と称する。

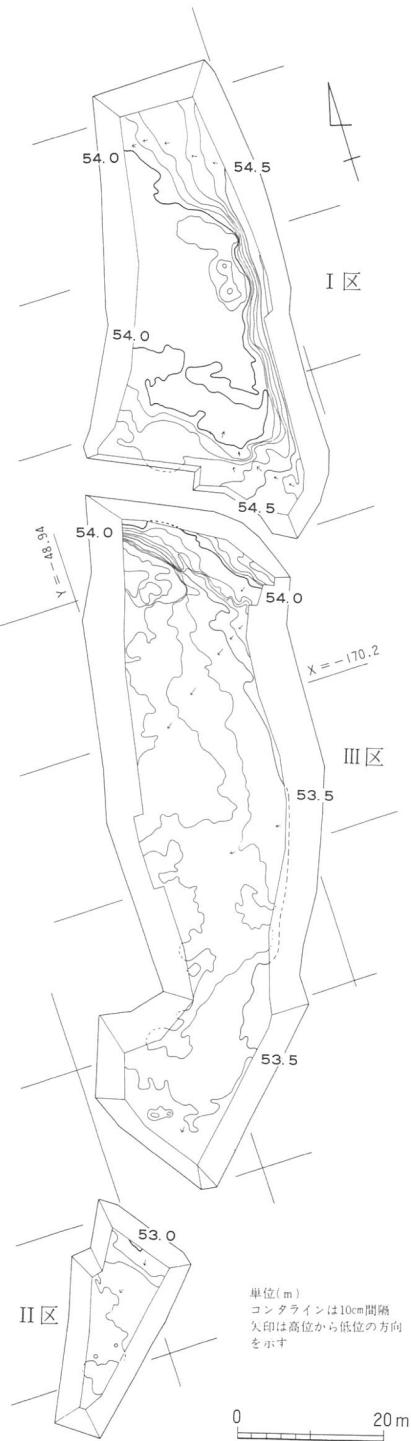
第1層 現代耕土層である。暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト層の第1a層と黄褐色粘質シルト層の第1b層に細分される。後者は床土である。本層の上には、50cm～2mに及ぶ盛土層が成されている。

第2層 近、現代の盛土層である。灰オリーブ色粘質シルト層で、1-O.Lを埋立てた時の整地層である。

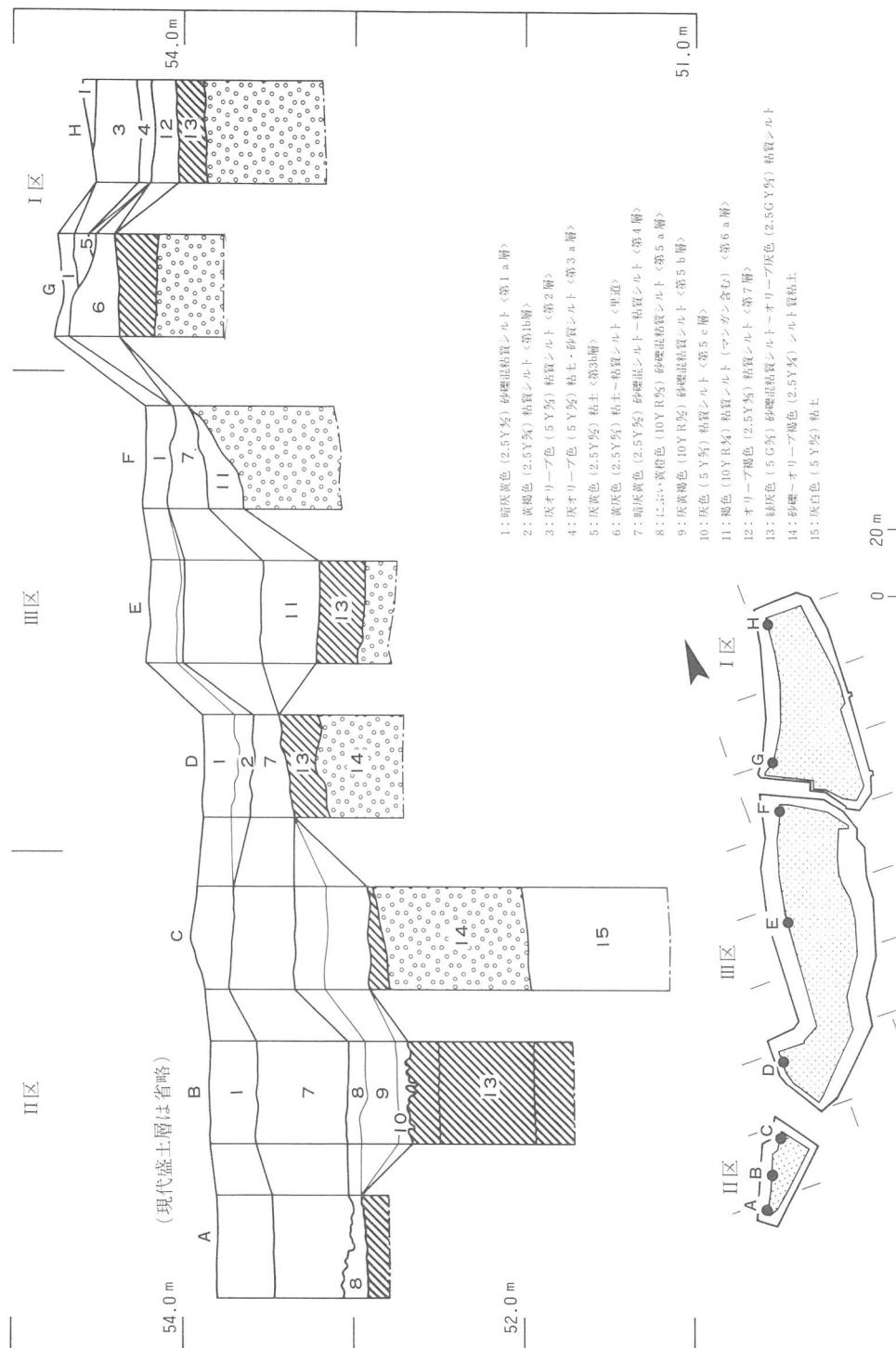
第3層 1-OLの埋土である。灰オリーブ色粘土～砂質シルト層の第3a層と灰黄色粘土層の第3b層がある。遺構を述べる項で詳しく解説するが、この第3b層は1-OLの規模を縮小した時の人工的な整地土層と思われ、1-OLの南端部分にのみ存在する。1-OLの南岸部は、黄灰色粘土～粘質シルト層を主にした土層によって形成される。1-OLの堤として盛土され、里道として使用されていたのであろう。

第4層 近世遺物包含層で、暗灰黄色砂礫混シルト～粘質シルト層である。II区およびIII区に分布する。層厚は10cm～40cmである。本層内を四層に細分することが可能である。第4層上面の遺構としては、竹・円礫等を埋め込んだ暗渠が見られる。その状況は、本調査区の東側で行なわれた大阪府教育委員会の調査においても検出されている。III区では本層の最下部に層厚2cm～5cmの褐色(10YR 4/6)シルト層が分布する。

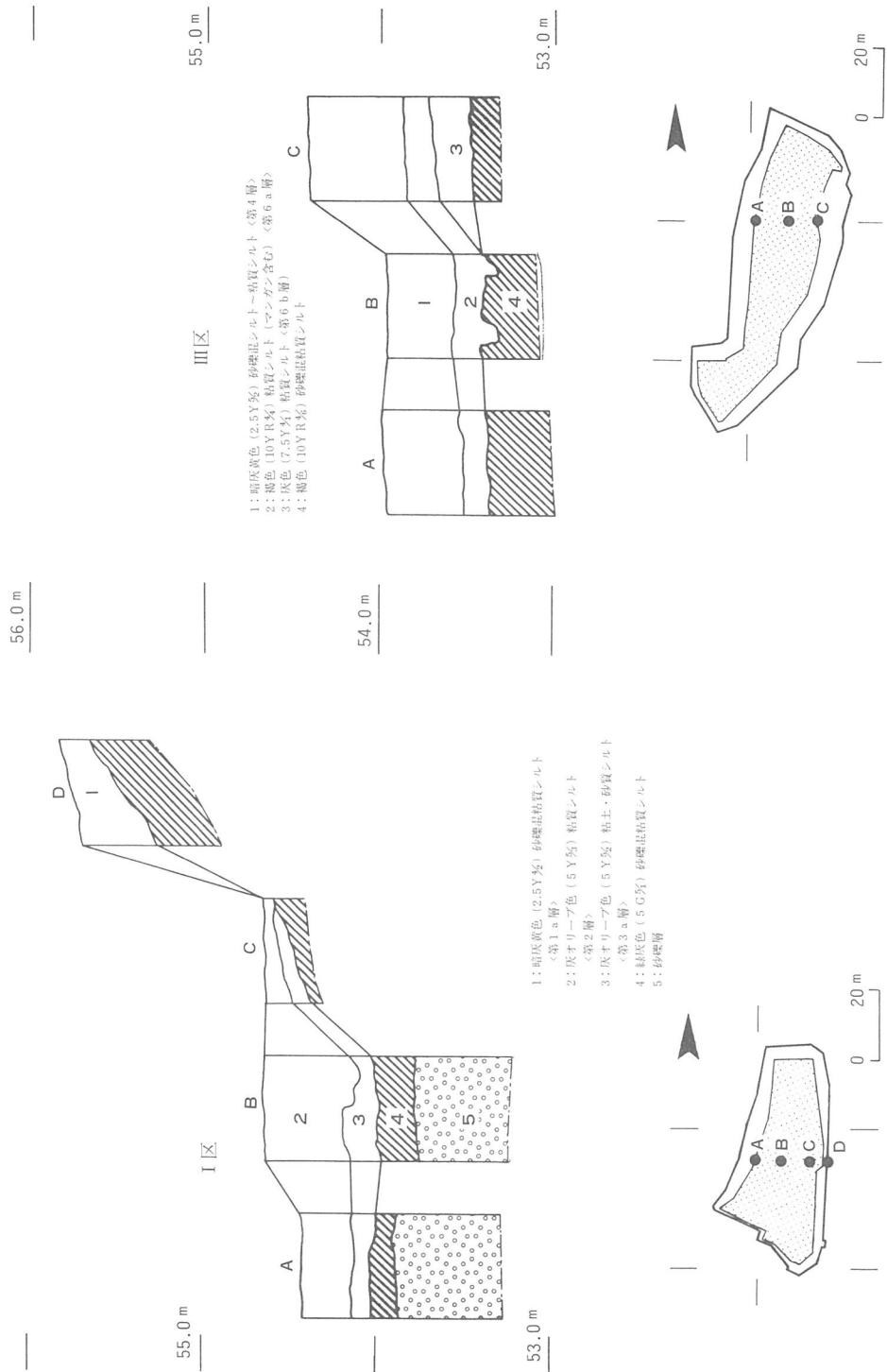
第5層 鎌倉・室町時代遺物包含層と考えている。II区にのみ存在する。II区の南端では15cm程度の層厚しかないが、中央部では40cm近い厚さがあり、三層に細分することができる。第5a層は、にぶい黄橙色砂礫混粘質シルト層、第5b層は灰黄褐色砂礫混粘質シルト層、



第9図 調査区微地形図



第10図 基本層序柱状図



第II図 基本層序柱状図2

第5c層は灰白色粘質シルト層である。II区の中央部は皿状の凹みとなっており、第5層はこの凹みの埋土とも受け取れる。第5a層上面がII区の第1遺構面、第5c層直下の地山上面が第2遺構面である。地山上面は踏み込みのため凹凸が著しい。

第6層 奈良時代～平安時代の遺物包含層である。III区にのみ見られる。マンガン粒を多く含む褐色粘質シルト層の第6a層と灰色粘質シルト層の第6b層に分かれる。第6a層の厚さは15cm～30cm、第6b層は厚いところで20cm余りである。第6a層の上面が第1遺構面、第6b層を掘削した後検出したのが第2遺構面である。

第7層 6世紀末～7世紀初頭頃の遺物を包含する土層である。オリーブ褐色粘質シルト層である。I区北辺に薄く分布する。本層を除去した地山上面で数基の土坑が検出されている。

第8層 にぶい黄色(7.5Y 6/3)粘質シルト層である。遺物の出土が認められなかつたため、時期の決め手がない。I区北東部の狭い範囲に広がる。層厚は、東側の丘陵斜面に近いほうで厚くなり、最高30cmである。

地山層 地山の状況は地区ごと大きく異なっている。I区では上方に緑灰色砂礫混じり粘質シルト層があり、その下方には最大15cmの礫を含む砂礫層がある。III区では拳大の礫を含んだ褐色(10YR 4/6)粘質シルト層があり、その下に最大13cmの礫を含んだオリーブ褐色(2.5Y 4/4)細砂層がある。II区においては、南北方向に地山の断割りを行なった。そこではまず上方の20cm～30cmがオリーブ灰色粘質シルト層で、土壤分析の結果、火山灰ガラスが顕著に含まれていることがわかった。その下に水成層と思われるオリーブ褐色シルト質粘土層があるが、この上面からは多数の乾痕が入り込んでいる。確認できたそれ以下の地層はみな水成層で、最大20cmの礫や粘土ブロックを含む層や、砂礫をほとんど含まない灰白色粘土層が見られた。珪藻化石分析の結果、この粘土層中には海性の珪藻化石が多く含まれており海成層である。

### 3. 包含層出土遺物

前項において第1層～第7層までから遺物が出土していることを述べたが、ここで各層位ごとにそれについて述べて行くことにする。各遺物の出土地点、細部の特徴等については出土遺物観察表を参照されたい。

第2層・第3a層・第3b層出土遺物（第12・68図：図版50・51・80）

第2層・第3a層の出土遺物のうち最も数量の多いのは須恵器である。第2層では土師系の土器がそれに次いで多いが、第3層では9割近くを須恵器が占めている。第3b層では須恵器より瓦器類の比率が高くなっている。

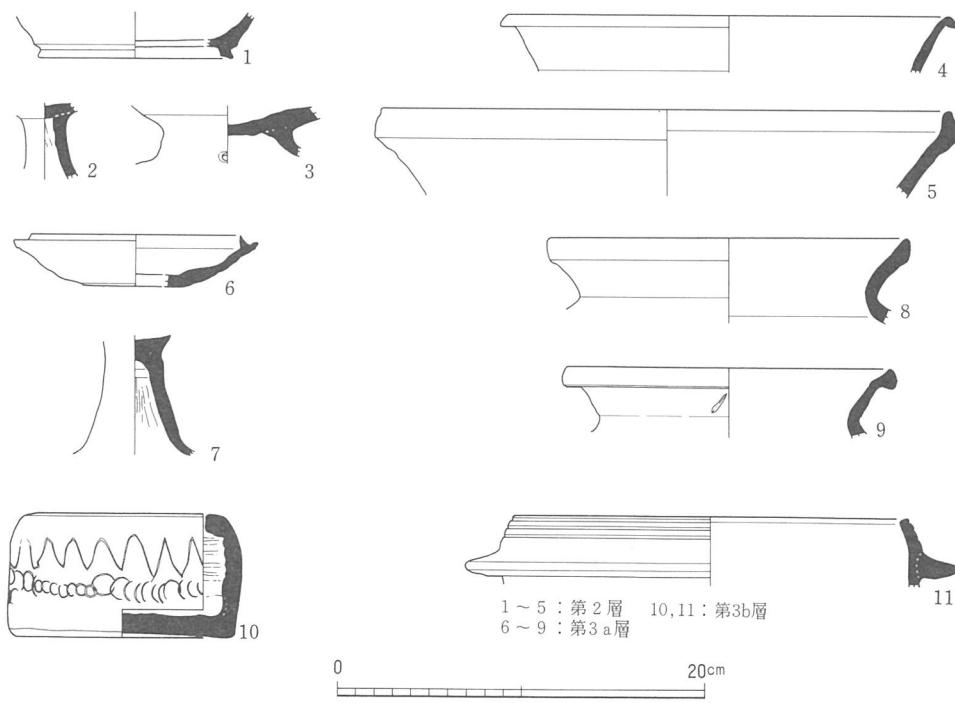
○須惠器・土師器

第2層からは1～4のような須恵器が出土している。1は杯B類、2は高杯である。3は恐らく台付壺の底部から脚部にかけての破片と思われるが、直径5mmの円形の透孔が三方に穿たれている。4については壺あるいは器台の口縁部と思われる。

第3a層の出土遺物には古墳時代まで遡る可能性のある須恵器杯H類（6）、甕（8・9）や土師器高杯（7）がある。須恵器杯については第3a層直下にある第7層の遺物が攬紮されたものである可能性が考えられる。9の頸部には左下がりのヘラ記号が見られる。

○須惠系土器・瓦器

第3a層から須恵系土器の鉢（5）が出土している。東播系のものである。第3b層出土の瓦器の火舍（10）は外面に線刻文様がある。体部中央に大小二種類の竹管状の工具を用いて円形文を連ね、その上部に鋸歯状の文様を刻んでいる。11の瓦器釜も同層から出土し



第12図 第2層、第3a層、第3b層 出土土器

たもので、内傾気味の口縁部に三条の凹線を巡らしている。

#### ○石製品

I 区から五個体分の一石五輪塔が出土している。そのうち293・326～328は第2層から、294は第3b層から出土している。293・294は比較的、遺存状況の良いものであるが、両者とも空輪、風輪を欠く。一辺13.5cm～15.0cmの方柱状の石材を加工したものである。粒度の粗い和泉砂岩を素材とする。梵字の彫り込みなど、文字資料は認められない。

### 第4層出土遺物（第13・14・18・67図：図版52・53・78・79）

本層からの出土遺物は6300片あまりに達し、とび抜けて量が多い。その内訳は須恵器3600片、土師器1580片、瓦器460片というような状況である。この包含層は国産の陶磁器を含み、室町時代から江戸時代にわたって形成されたものと思われるが、古墳、奈良、平安時代の遺物の比重が高いものとなっている。

#### ○須恵器

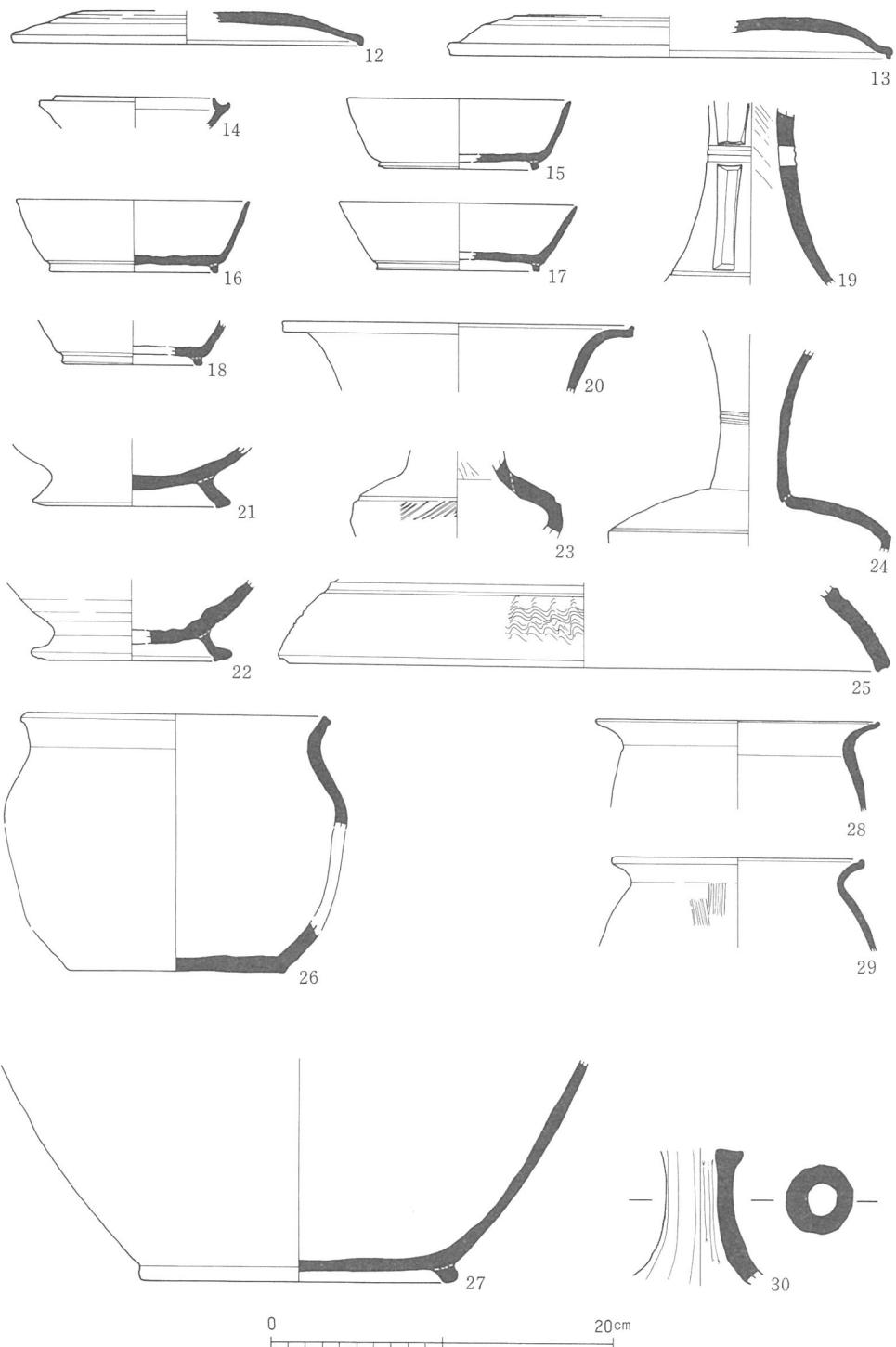
主要な器種には蓋（12・13）、杯（14～18）、高杯（19）、壺（20～24）、器台（25）、鉢（26・27）がある。蓋は口径20cm以上の大形で、天井部はふくらんでいる。12はB類、13はA類である。14は口縁部に受部を持つH類であり、15～18はB類である。高杯（19）は長脚二段透しを持つ。20は広口壺の口縁部である。21・22には、「八」の字状に大きく張り出す高台が付く。23は体部に左下がりの線刻を連続させるが、従来の櫛描き列点文を略した表現と思われる。24は肩部を境に、上部と下部を別々に成形した後に接合している。25の脚部には幅2cmの工具を用いて、上下二段に波状文が施されている。甕（98）の体部内面にはいわゆる車輪文のタタキ目が施される。

#### ○土師器

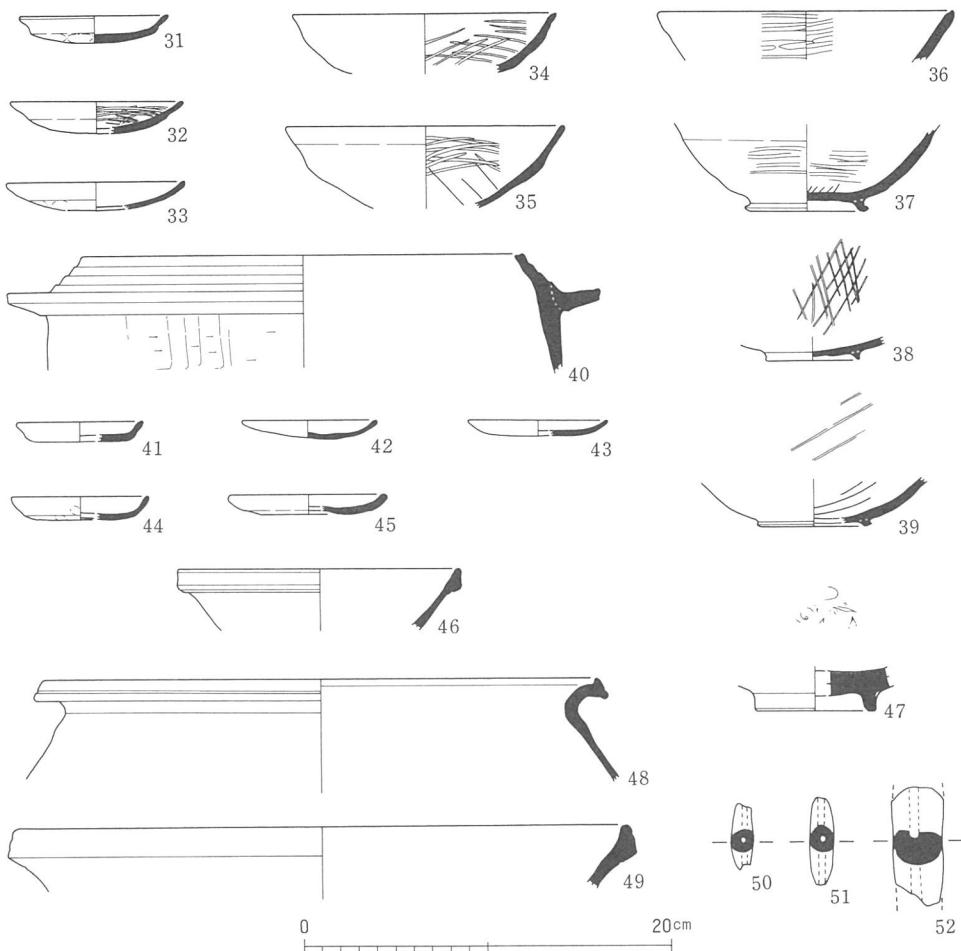
甕（28・29）、高杯（30）がある。28は外面の摩耗が著しいが、29は外面のハケ調整が観察される。外面はナデ調整され、器壁はやや薄めである。30の脚部は14面くらいに面取りされている。

#### ○土師系土器・須恵系土器

土師系土器には皿（41～45）、甕（48）がある。皿は直径7cm～8cmで、45は底部中央が内側に凹んでいる。48は口縁部の端部を上下につまみ出した形態をとるものである。胎土に結晶片岩を含み、紀伊産のものと思われる。須恵系土器には鉢（49）がある。東播系のものである。



第13図 第4層 出土土器 I



第14図 第4層 出土土器2

○ 黒色土器・瓦器

黒色土器は椀(34)のみである。内面だけに炭素を吸着させたA類のものである。内面には暗文が見られる。瓦器は皿(31~33)、椀(35~39)、釜(40)がある。32は内面に緻密な暗文が見られる。他の皿には暗文はほとんど認められない。35~39にはいくらかの形態差が認められる。36は口縁部の内側に凹線を有し、内外面の暗文を極めて密に施している。また器壁も比較的厚い。37も内外面に暗文があり、その高台は比較的直径が大きく、高さもあり、外方にふんばり気味に付く。その一方で35・38・39は器壁も薄く、外面に暗文は見られない。見込みの暗文は、38が乱れた格子状になり、35・39が平行線となっている。40は口縁部が直線的に内傾するもので、外面には三段に段が付く。体部外面はヨコ方向にヘラケズリされる。

### ○ その他の陶磁器

46・47はともに輸入陶磁器である。46は白磁碗で、口縁部を玉縁状にする。47は龍泉窯系の青磁碗である。高台は断面四角形を呈する。釉色はオリーブ灰色で、露胎部分にはふい橙色となる。

### ○ 土錘・製塩土器・サヌカイト

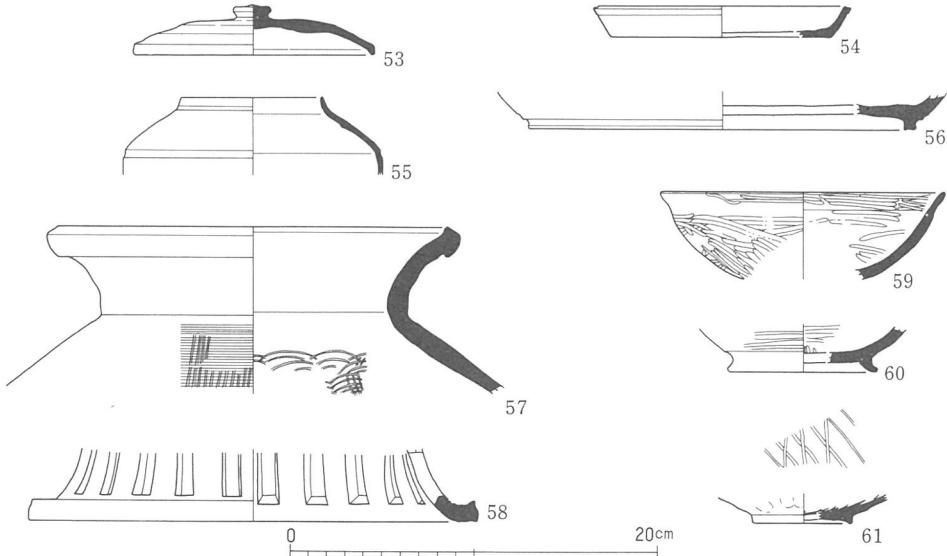
土錘（50～52）はみな土師質で、大小二種類がある。50・51はほぼ完形だが、52は両端を欠損する。301～303・309は製塩土器の破片である。316～319のようなサヌカイトの剝片も見られた。

### ○ 瓦

285は池田寺創建頃の軒丸瓦である。中房や外縁部分を欠き、全周の四分の1にも満たない破片である。内区文は単弁蓮華文で、八弁で構成されていたと思われる。弁上に弁子はない。蓮弁の周縁は輪郭を凸線で強調している。弁区の外側には外縁部とを画する一圏線がある。289は巴文軒丸瓦と思われる。外区の珠文と外縁だけが残る。珠文の間隔はやや密であり、外縁は約1.0cmの高さがある。須恵器に似た焼成ぐあいである。

### 第5層出土遺物（第15図：図版53）

本層はII区にのみ分布する層位だが、総計518片の遺物が出土している。多い順に述べ



第15図 第5層 出土土器

ると、須恵器370片、土師質の土器60片、瓦器50片余りという状況であった。

○須恵器

蓋（53）・皿（54・56）・短頸壺（55）・甕（57）・硯（58）などがある。53はC類のものである。58は円面硯である。55は6世紀末～7世紀初頭頃まで遡るものと思われるが、その他は奈良時代以降のものが多い。

○黒色土器・瓦器

59・60は黒色土器B類の椀、61は瓦器椀である。59は内外面とも緻密な暗文がある。60も内外に暗文が施されるが、見込み部分は平行線の暗文となっている。61の高台は断面三角形で、退化した形態である。見込みの暗文は斜格子状である。

第6a層出土遺物（第16・17・18図：図版54・55・56・79）

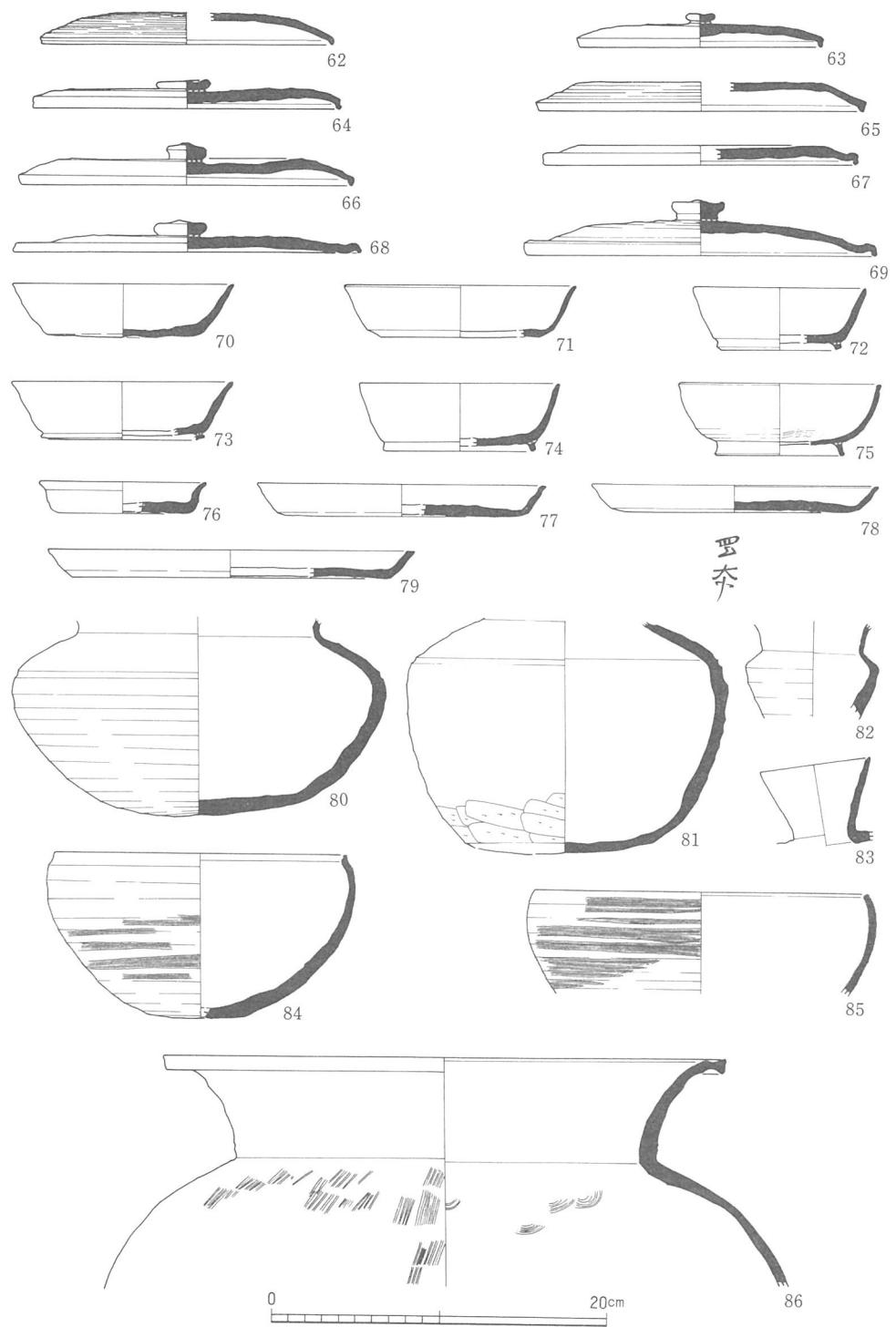
本層はIII区に広く分布している。遺物総数は約1740片であり、そのうち須恵器が1030片、土師器が690片ほど出土している。

○須恵器

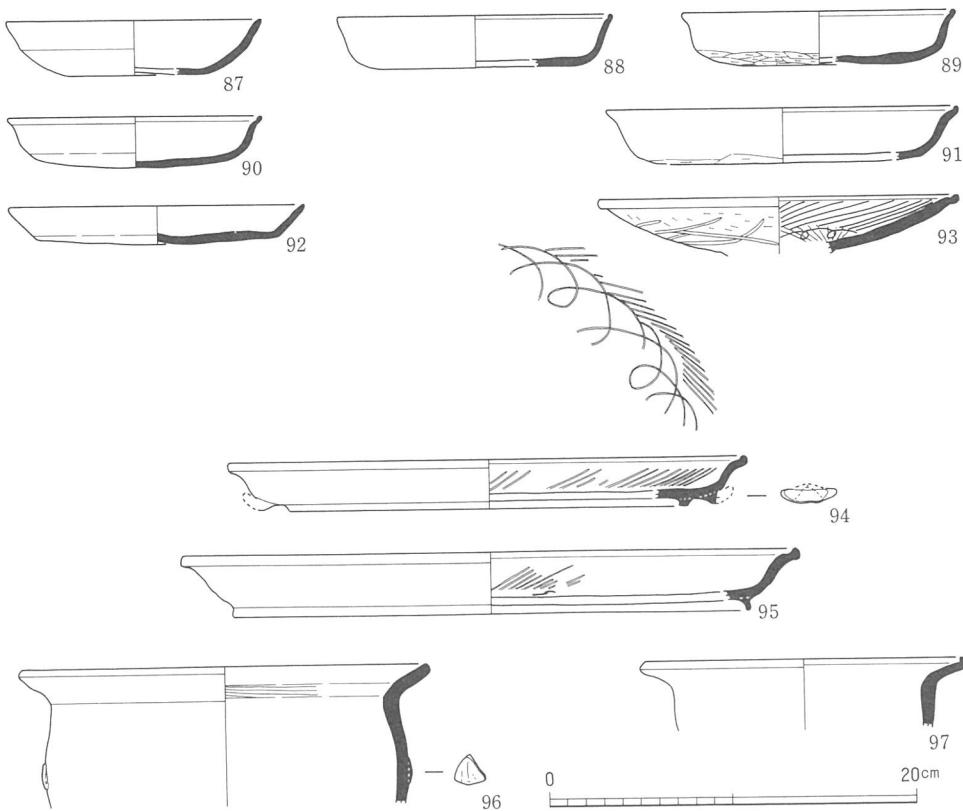
蓋（62～69）、杯（70～75）、皿（76～79）、壺（80～82）、平瓶（83）、鉢（84・85）、甕（86）が主なものである。蓋はツマミの付くものがほとんどである。A類（67～69）、B類（63～66）、C類（62）がある。杯にはA類（70・71）とB類（72～74）が認められる。なお金属製容器を模倣したと思われる椀状の形態を呈するもの（75）もある。皿には口径の規格の異なる三種類が見られる。最も直径の小さい76は口縁部が外反し、やや尖り気味になるA類である。他はC類であるが、78の底部外面には「罫本」（「岡本」）という墨書が見られる。壺（80～82）はそれぞれ形態が異なっている。80は短頸壺で肩部が大きく張り、回転ヘラケズリ調整が肩部まで及んでいる。81は広口壺と思われるが、体部下方には手持ちヘラケズリが行なわれる。82は小形の広口壺である。鉢はいずれも鉄鉢形をするA類で、口縁部の形態の異なる二種類が認められる。84は口縁に強い回転ナデ調整が行なわれ、端部は上方につまみ上げられた形になる。85は端部に内傾する面を持つ。なお99のような車輪文のタタキ目をもつ甕の破片もある。

○土師器

主な器種として、杯（87～91）、皿（92・94・95）、高杯（93）、甕（96・97）がある。杯の調整法には、a手法（87・90）のものとb手法（89・91）のものがある。皿（94・95）は高台が付くB類で、94には把手も付けられている。高杯（93）は脚部を欠くが、杯部内



第16図 第6a層 出土土器 I

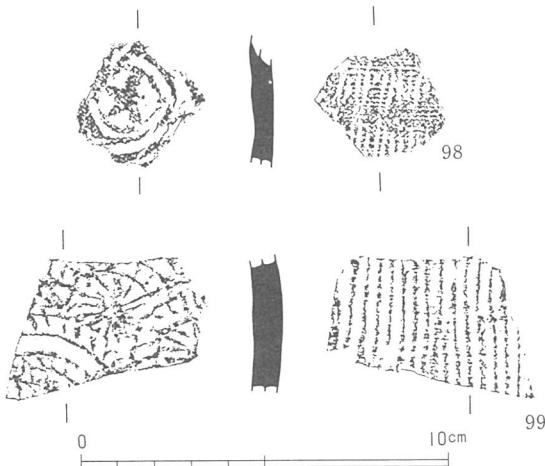


第17図 第6a層 出土土器2

面に右上がりの暗文、左上がりの暗文を二段に施し、さらに輪状の暗文を施している。外面もヘラケズリ調整の後に暗文を施している。甕(96・97)は、外面の摩耗が著しいが、体部のハケ調整がかすかに残る。96は体部に退化した把手が装飾的に付けられている。B類である。97は体部上半しか遺存しないが、C類のものと思われる。

#### ○製塩土器・サヌカイト

以上の他に、製塩土器と(304~307)とサヌカイトの剥片(320・321)が出土している。製塩土器はいずれも小片で図示するまでには至らなかった。



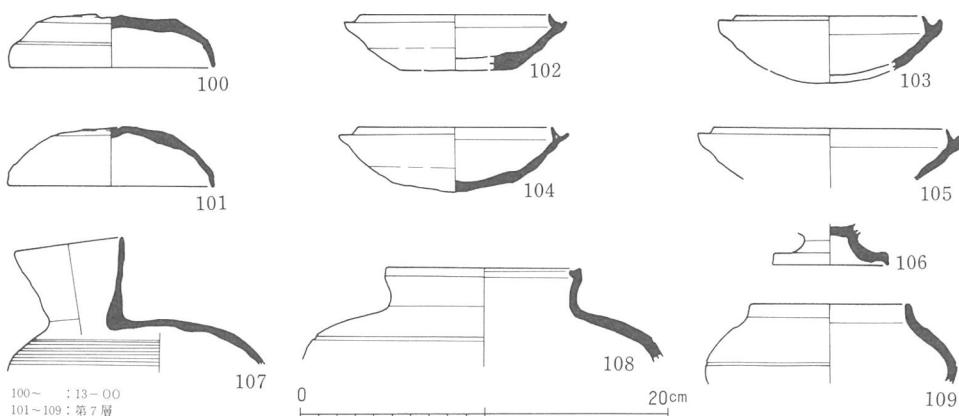
第18図 包含層出土車輪文タタキ目の須恵器

### 第7層出土遺物（第19図：図版57）

この層はI区北辺に見られるだけで、そのため遺物総数も312片と少ないが、やはり須恵器が多く220片ほど出土し、次いで土師器が90片近く出土した。図示し得たのは須恵器のみであった。

#### ○須恵器

蓋H類（101）、杯H類（102～105）、高杯（106）、平瓶（107）、壺（108・109）などがある。107の体部にはカキ目調整が行なわれる。108の口縁部は「S」字状の曲線を描いて立ち上がり、端部で内傾する平坦面をつくる。109は短頸壺である。



第19図 第7層、I3-00 出土土器

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 古墳時代以前

該当する遺構は土坑のみである。すべてI区において検出される。これらはその埋土の状態から二種類に分類することが可能である。

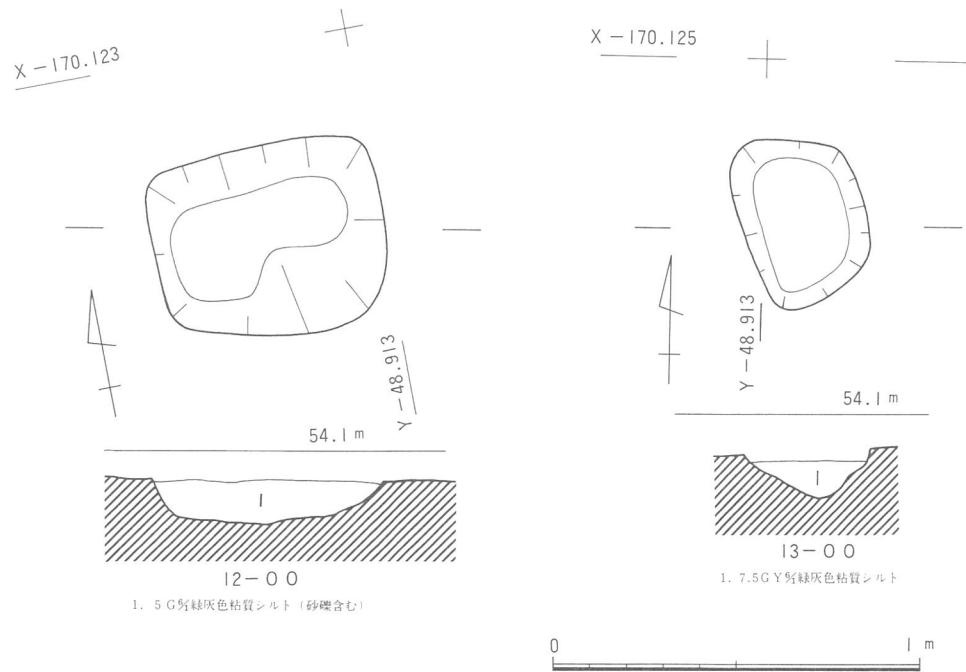
#### a. 土坑

12-00（第20図：図版9） G06FVに位置する。第7層を除去した後、地山面において検出した。東西に長い隅丸長方形を呈し、底面は浅く皿状に窪む。長軸約65cm、短軸約50cm、深さ約10cmである。埋土は、緑灰色粘質シルト層で、細砂と小礫を若干含んでいる。遺物の出土は認められないが、埋土から13-00と同時期と考える。

13-00 (第19・20図: 図版9・57) G 06 GVに位置する。第7層を除去した後、地山面において検出した。南北に長い隅丸四角形状を呈し、底面は浅く「V」字状に窪む。長軸約45cm、短軸約35cm、深さ約13cmである。埋土は、緑灰色粘質シルト層である。出土遺物は、須恵器の蓋が1点の他、杯片が3片認められた。蓋はH類のもので、土坑の北壁部分に天井部を接した状態で検出された。ほぼ完形に遺存する。杯はいずれもH類の口縁部である。古墳時代後期に属すると考えられる。

15-00 (第69図: 図版8) G 06 EW・FXに位置する。第8層を除去した後、地山面で検出した。遺構の全容は調査区外に延びるため不明であるが、北壁の土層観察から北東方向に延びる不整形な溝状のものと思われる。検出した部分は、長さ約3.2m、幅約60cmである。底面の凹凸は著しいが、おおよそ深さ20cmである。埋土は、にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土層である。遺物の出土は認められない。

16-00 (第69図: 図版8) G 06 FW・GW・GXに位置する。第8層を除去した後、地山面で検出した。北西から南東方向に長い不整形なもので、長さ約3.3m、幅1.1mである。底面の凹凸は著しいが、おおよそ深さ30cmである。埋土は黒褐色(10YR 2/2)弱粘質シルト層である。遺物の出土は認められない。



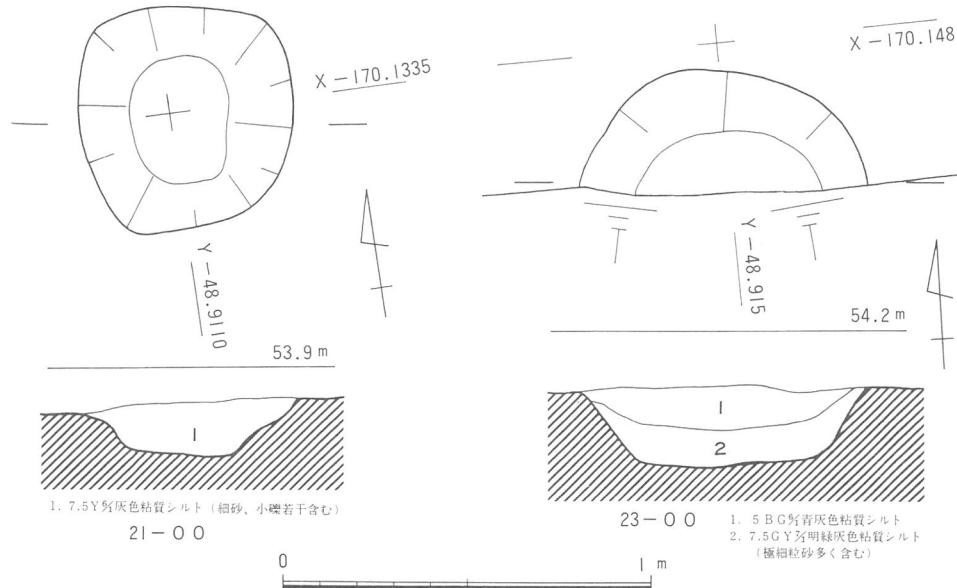
第20図 12・13-00 平・断面図

17-00 (第69図: 図版8) G06FXに位置する。第8層を除去した後、地山面で検出した。北西から南東方向の不整形な小溝状を呈している。長さ約1.4m、幅30cm~50cmである。底面の凹凸は著しいが、おおよそ深さ20cmである。埋土は、褐灰色(5YR 5/1)粘質シルト層で、粗砂、細砂が混じる。また鉄分、マンガン粒を含んでいる。遺物の出土は認められない。

19-00 (第69図: 図版8) G06GWに位置する。第8層を除去した後、地山面において検出した。北西から南東方向の不整形な小溝状を呈している。長さ約1.2m、幅約30cmである。底面の凹凸は著しいが、おおよそ深さ10cmである。埋土は、黒褐色(10YR 3/2)粘質シルト層である。遺物の出土は認められない。

20-00 (第69図: 図版8) G06HV・HW・IV・IWに位置する。1-OLの底面の地山面において検出した。北西から南東方向に長い不整形なものである。長さ約3.3m、幅約1.6mで、底面の凹凸は著しいが、おおよそ深さ20cmである。埋土は、暗灰黄色(2.5Y 4/2)弱粘質シルト層である。遺物の出土は認められない。

21-00 (第21図: 図版9) G06IWに位置する。1-OLの底面の地山面において検出した。ほぼ南北方向に沿う隅丸方形状を呈し、底面は平坦である。一辺約60cm、深さ約15cmで、埋土は、細砂、小礫を若干含む灰色粘質シルト層である。遺物の出土は認められなかつたが、埋土から13-00と同時期と考える。

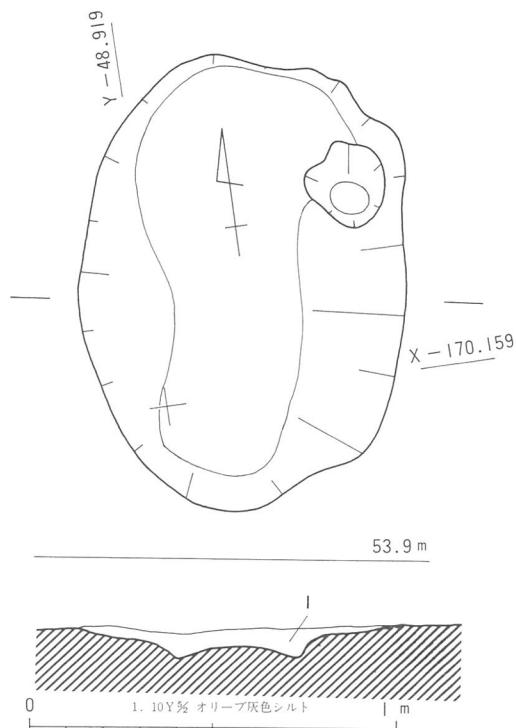


第21図 21・23-00 平・断面図

22-00 (第69図: 図版8) G06IV・IWに位置する。1-0Lの底面の地山面において検出した。円形に近い不整形なもので、底面は二段に落込み、中央部が最も深い。直径は、約2m、深さは、約50cmである。埋土は二層に分かれ、上層は、オリーブ灰色(2.5GY 5/1)粘質シルト層で、細砂及び小礫が混じる。下層は、灰色(10Y 6/1)粘質シルト層で、粗砂及び小礫が混じる。遺物の出土は認められない。

23-00 (第21図: 図版9) G06MVに位置する。1-0Lの底面の地山面において検出した。トレーナによって切られるためその全容は不明である。検出した部分は半円形を呈し、底面は平坦である。直径約75cm、深さ約20cmで、埋土は二層に分かれる。上層は、青灰色粘質シルト層、下層は、極細砂を多く含む明緑灰色粘質シルト層である。遺物の出土は認められなかったが、埋土から13-00と同時期と考える。

47-00 (第22図: 図版9) G06OUに位置する。1-0Lの底面の地山面において検出した。ほぼ南北方向に長い楕円形を呈する。直径約1.25m、短径約90cmで、底面には若干凹凸が認められるが、深さ約5cmである。埋土は、オリーブ灰色シルト層である。遺物の出土は認められなかったが、13-00と同時期と考える。



第22図 47-00 平・断面図

## 2. 奈良時代

明確に該当する遺構は34-0Sのみであるが、第2遺構面において検出された他の溝、ピット、土坑、落込みなども、34-0Sと同一面における検出遺構ということでここに述べる。

### a. ピット(OP)群 (第44図: ピット法量表: 図版33・65)

すべてIII区において検出される。ピットはIII区のほぼ全域に検出されるが、ピットが集

中する地点が数箇所認められる。その一は267-OW周辺、その二は622-OB周辺である。外形は円形、橢円形を呈するものが多く、隅丸方形をしたものもいくつか見られる。隅丸方形のものには柱痕跡の明瞭なものが多い。ピットの総数は約420を数えるが、そのほぼ半数に柱痕跡が確認された。掘方埋土の土色は黄褐色系のものが主で、土質は粘質シルト～シルトのものが大半を占める。出土遺物はわずかで図示し得たのは、275-OPから出土した須恵器の杯（185）と鉢（188）のみである。

#### b. 溝

34-OS（第23～29図：第2表：図版10～13・58～64・79） G06TT～VU付近に位置する。III区とIII'区とにまたがる。I区とIII区との間の微高地の南西斜面縁辺部に立地する南東から北西方向のものである。検出長は約9.5mで、南東端部は調査区外にのびる。幅は2.5m～3mで、北西に向かって若干広くなる。深さは20cm～40cmである。埋土はオリーブ灰色粘土層を主として、にぶい褐色シルト層、明黄褐色粘質シルト層、灰色粘土層などからなる。

出土遺物は、多数の須恵器と土師器の他、若干の瓦を認める。これらはほぼ全面に亘って散乱した状況で検出した。須恵器には蓋19点（110～123）、杯32点（124～144）、皿7点（145～151）、壺5点（159～161・163）、甕1点（162）、鉢7点（152～158）、盤2点（164・165）の他、高杯の小片2片などがあり、土師器には皿5点（166～168）、高杯1点（169）、甕15点（170～183）、鍋1点（184）の他、製塙土器40片（308・310～313）などがある。

須恵器の蓋は、A類（117・119・120・123）、B類（112～116・118・121）、C類（110・111）、F類（122）が認められる。A類はA II（119・120）、A III（117）が認められる。A IIは口径17.0cm～17.9cm、A IIIは口径14.0cmのものである。なお123は形態上A類に相当するが、口径30cmを越え、杯蓋よりは他の容器の蓋ではないかと思われる。B類はB I（121）、B III（112～116）、B IV（118）が認められる。B Iは口径22.8cm、B IIIは口径13.2cm～15.6cm、B IVは口径12.0cmである。C類はいずれも口径11.5cm前後のもので、C IVに類する。他の大きさのものは認められない。また数量的には他類に比べ若干少ない。このA～C類の内確認できたものはいずれも宝珠状のツマミが付く。調整法については、天井部に回転ヘラケズリ調整を施すものとそうでないものとが認められる。110、112などはヘラミガキ調整に近いほど緻密な回転ヘラケズリ調整を施している。数量的には回転ヘラケズ

り調整を施すものの方が多い。なお110に示す蓋C類には裏面に墨書が認められる。遺存状態は余り良くないが、「罝本」(「岡本」)の二文字が口縁部側から中心部に向かって書かれている。文字の意味については不明であるが、第6a層から出土した須恵器の皿(78)の底部にも同文字の墨書が認められる。F類は122のみ確認された。口径は20.4cmである。形態的には142に示す杯F類とセットになるものと思われる。

杯は、A類(125~127)、B類(128~141・144)、F類(142・143)、G類(124)が認められる。数量的にはB類が大勢を占めている。A類はA III(126・127)とA IV(125)が認められる。A IIIは口径13.5cm~14.1cm、A IVは口径12.6cmである。B類はB II(140・141・144)、B III(129~139)が認められる。なお口縁部を欠損し、底部のみ残存するものについてはその底径より推察した。B IIは口径17.3cm~18.5cmであるが、この内144は他のものに比べ器高が高い上、器壁も薄く仕上げられている。B IIIは口径12.6cm~14.8cmのものである。139は高台部が貼付け部分より欠損したものである。なお底部のみ残存する128はB IIIよりも底径が更に小さいためB IVに類するのではないかと思われる。F類は口径19.5cmである。B類より高い高台部を有することから底部のみ残存する143もF類とした。

皿は、C類(146・148・149)とB類(150・151)が認められる。C類には口径23.5cmのC I(149)と口径17.0cm~18.0cmのC II(146・148)とが認められる。145、147については口縁部まで残存しないため形態的にはC類に類するかどうかは不明である。B類は口径26.2cmの比較的大きなもの(150)を認める。151は底部のみ残存するものであるが、大きさなどから考えて皿であると思われる。

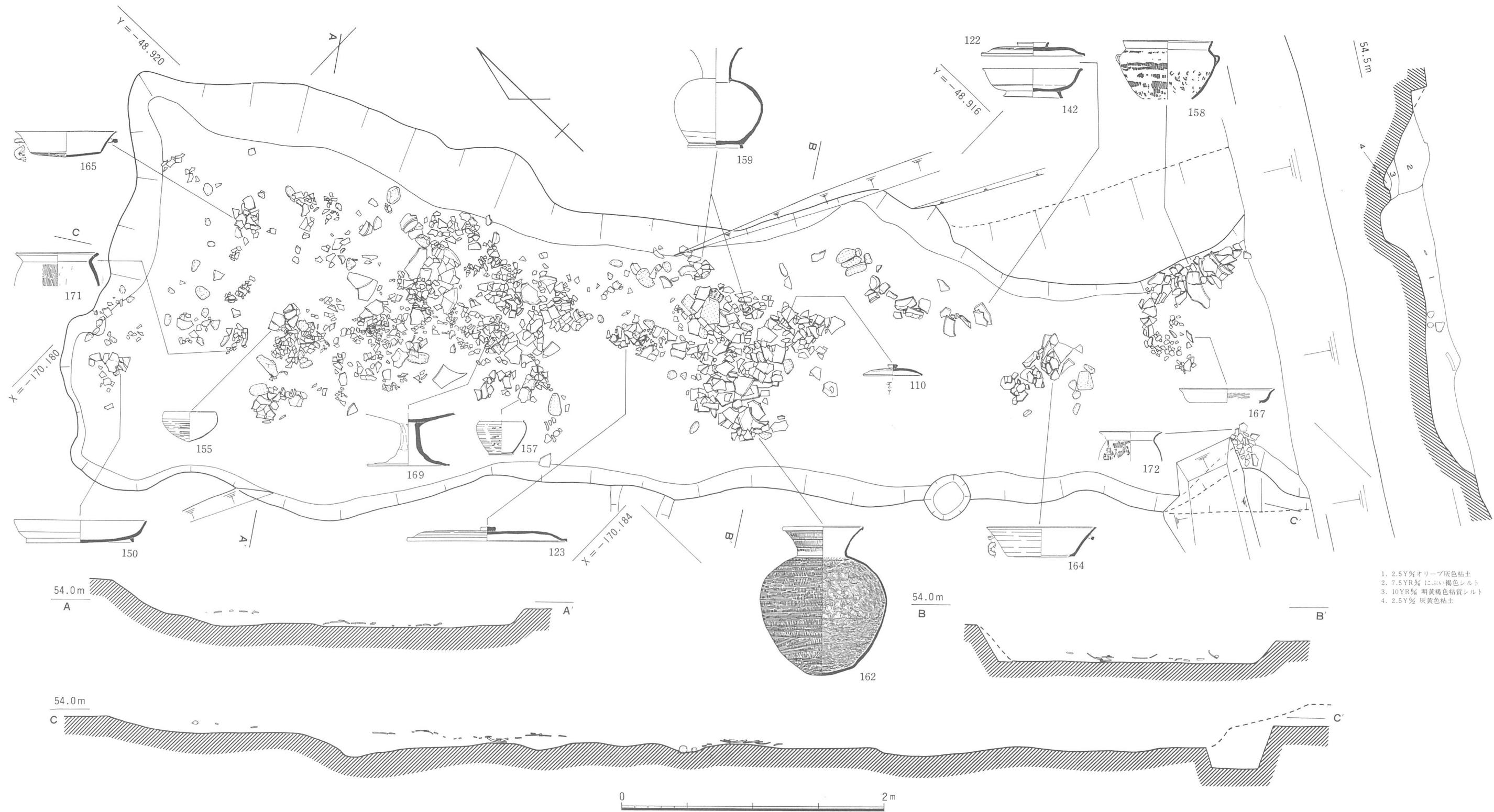
鉢は、三種類のものが認められた。D類(152~154)と鉄鉢と呼ばれるA類(155・156)、そして今回形態上から鉢に分類したが甕C類(157)、甕E類(158)に相当する体部にタタキ目を認める大形品である。

壺は、L類(159・160)を認める。161はL類に相当するかどうか不明である。163は口縁部を欠くが、L類とは形態上異なる上、体部の調整法も回転ヘラケズリ調整によって緻密に仕上げられており、別の形類に相当するものである。台付鉢である可能性もある。

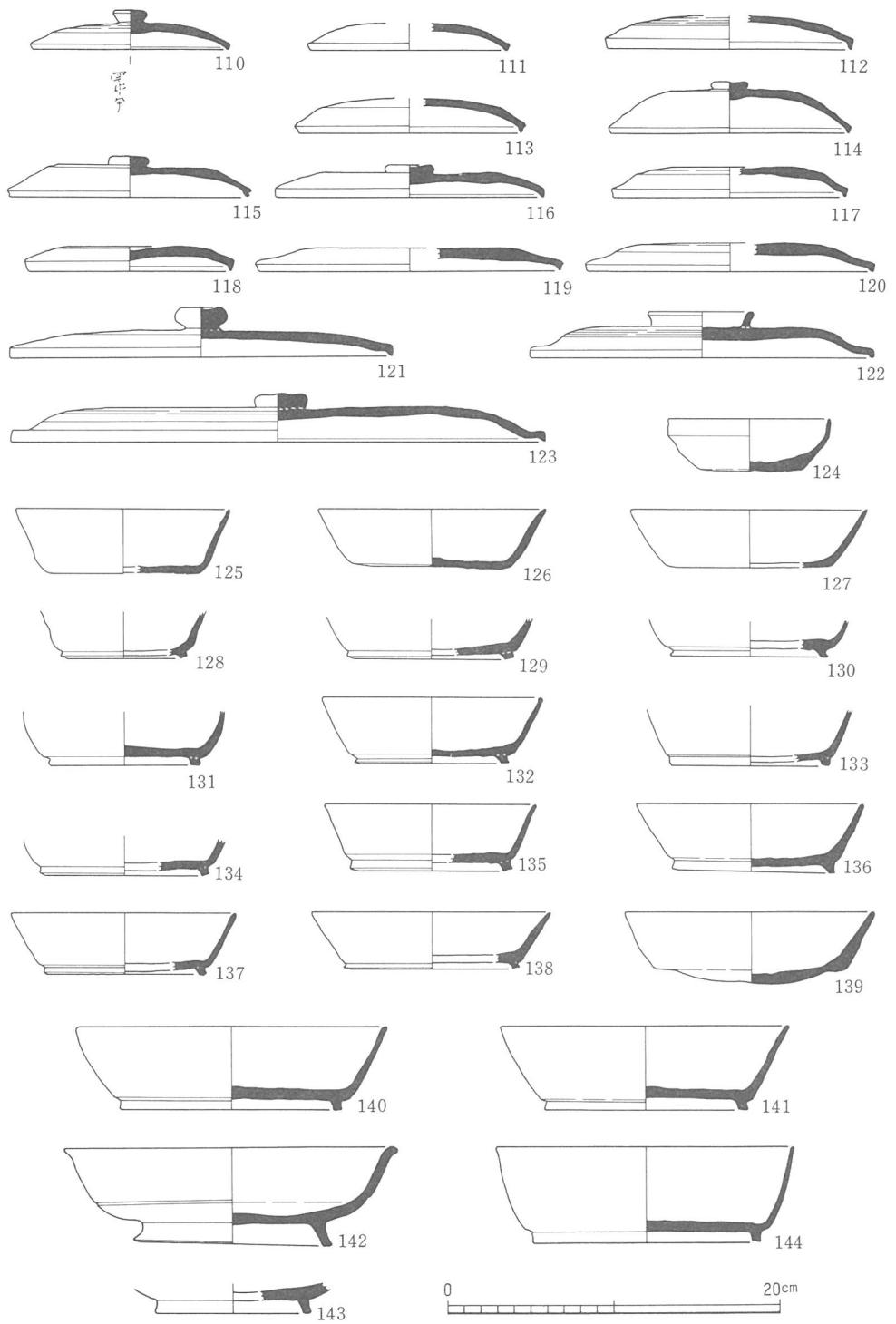
甕は、A類で器高59.8cm、最大胴部径51.0cmの大甕である。

盤は、いずれもA類で、把手が付く。

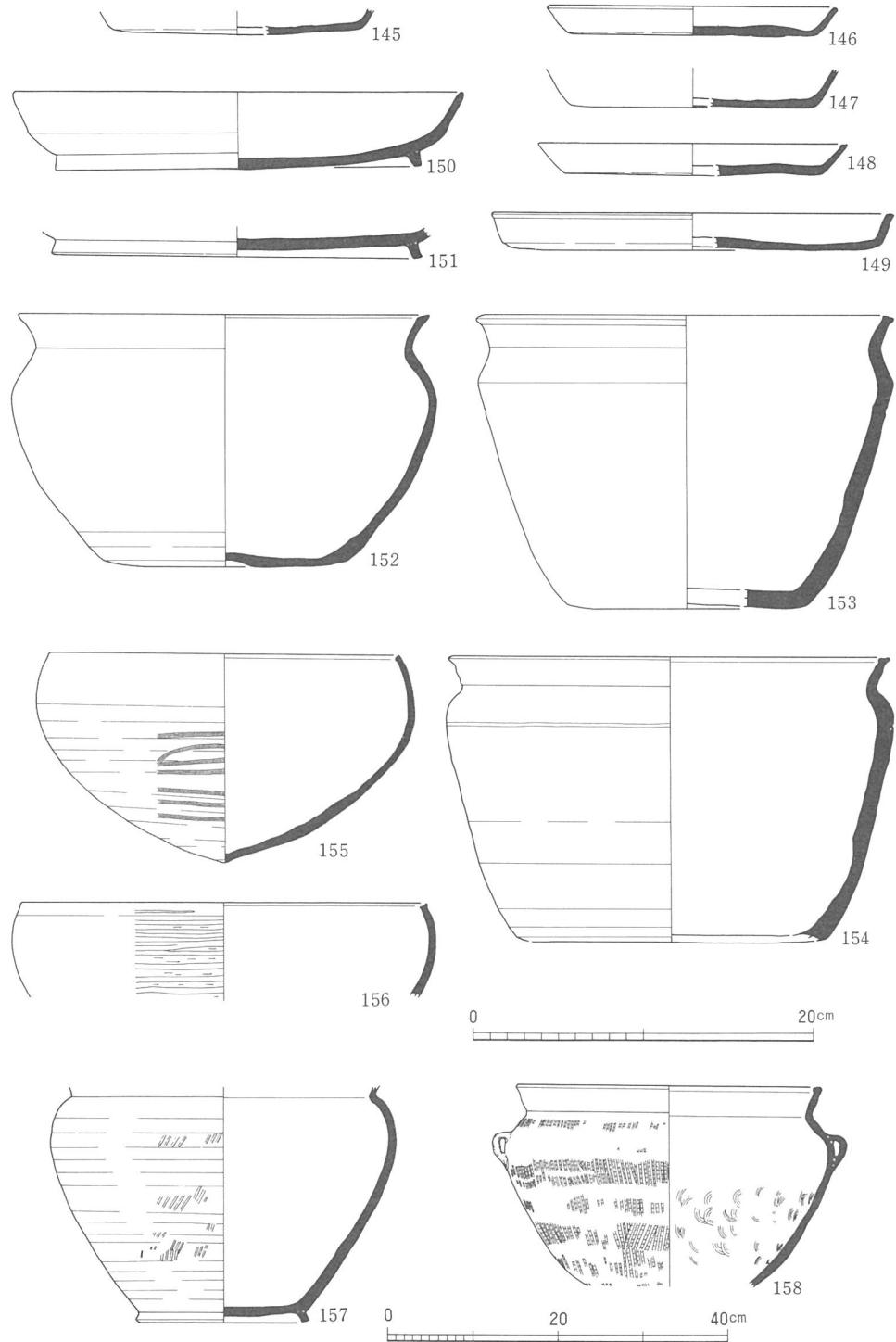
土師器の皿は、いずれもA類である。口径26.0cmのA I(168)と口径18.7cmのA II(167)そして口径15.0cmのA III(166)が認められる。口縁部の形態は、いずれもその上半が外反し、端部が肥厚するA形態である。調整は摩耗が著しく不明であるが、167の内面には斜放



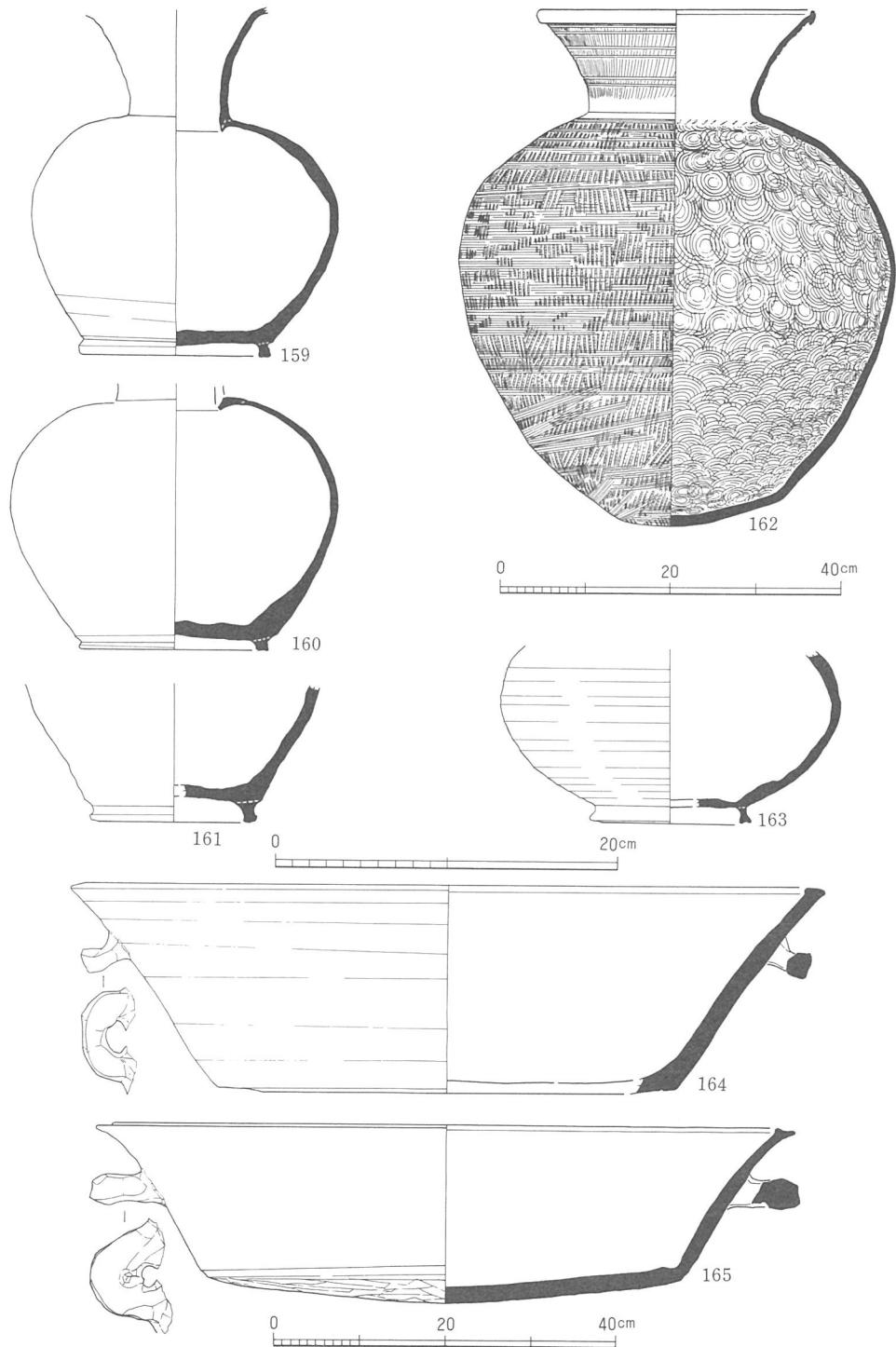
第23図 34-OS 遺物出土状況平・断面図



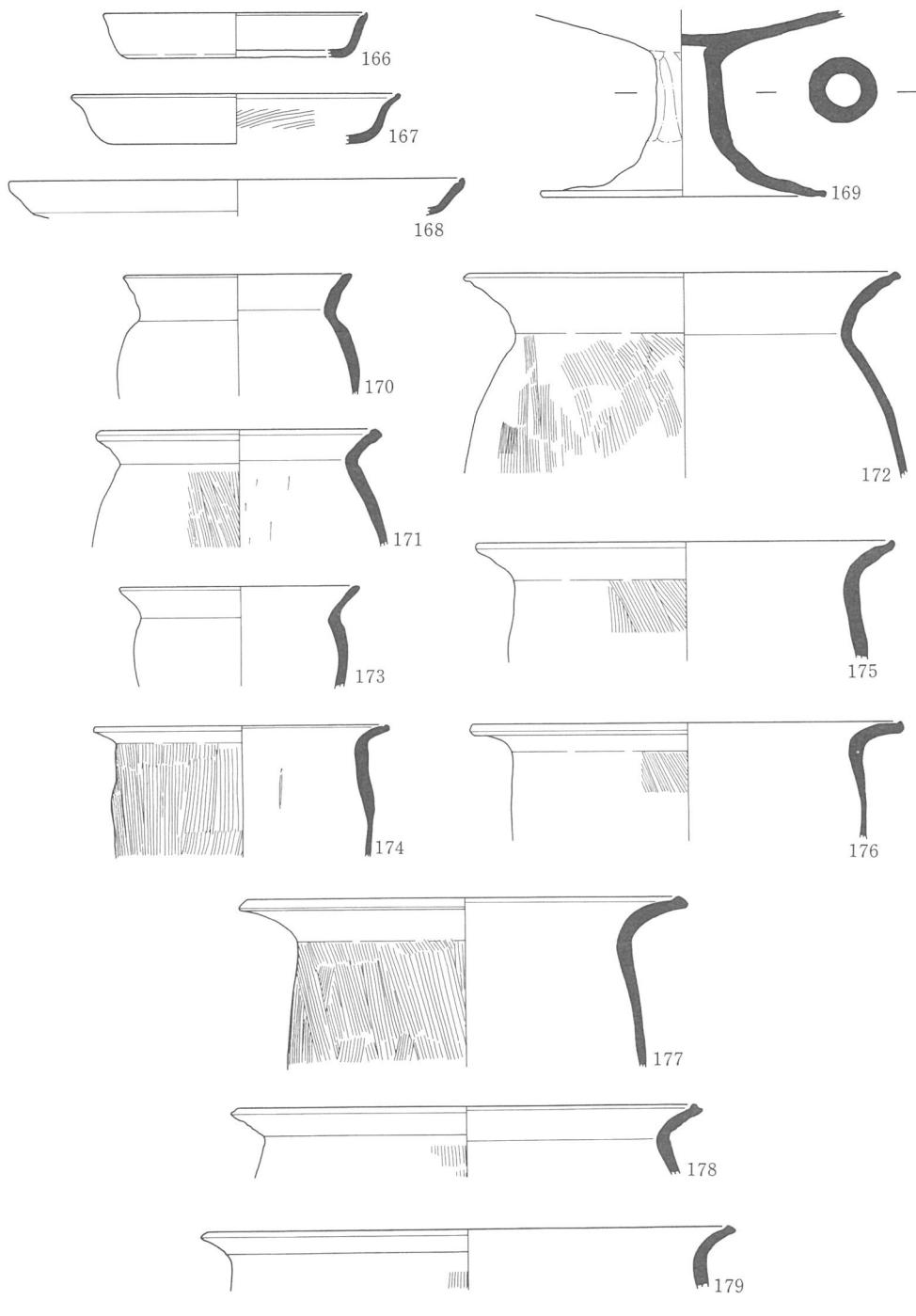
第24図 34-OS 出土土器 I



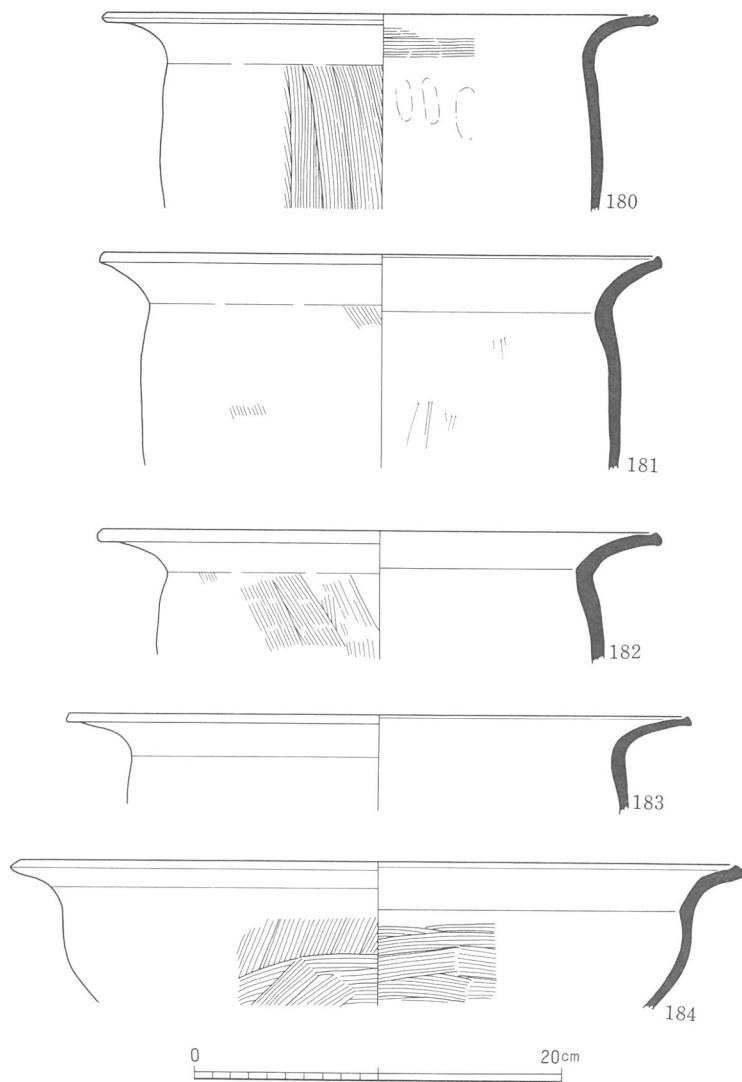
第25図 34—OS 出土土器2



第26図 34-O-S 出土土器 3



第27図 34-OS 出土土器 4



第28図 34-O S 出土土器5

射状暗文が認められる。

高杯は、A類とされるものである。全体に摩耗が著しく暗文、調整法などはほとんど不明である。脚部はヘラケズリによる面取りが認められるが、さほど顕著ではない。

甕はA類、B類、C類が認められる。A類は口径24.6cmのA II (172)、口径16.0cmのA IV (171)、口径13.0cmのA V (170)、C類は口径30.0cm~34.5cmのC I (179~183)、口径23.8cm~26.0cmのC II (175~178)、口径17.0cmのC IV (174)、口径13.8cmのC V (173)が認められる。B類は把手のみが確認される。



第29図 34—OS 出土遺物構成比グラフ（個体数）

鍋は184に示すもののみが確認された。A I類である。

以上のように本遺構からは、多くの土器資料を得ることができたが、遺構そのものの性格については不明と言わざるを得ない。しかしながらこれらの出土遺物は、一括性の高いものと考えられ、良好な資料と言える。これらのものは須恵器の出土量が多く、ほぼ7割以上を須恵器が占めている。また器種別に見た場合、須恵器では杯と蓋、土師器では甕が多く見られるが、須恵器鉢、甕、盤などの大型品や鉄鉢などの金属製容器類を模倣した土器を複数量含むことも特徴的と言える。こういった出土遺物の傾向は寺院的な色彩を反映しているものとも考えることができる。時期的には概ね平城宮土器IIIに相当する一群で、8世紀後半のものと思われる。

42—OS (第30図: 図版14) G06 TS~WU付近に位置する。III区とIII'区とにまたがる。I区とIII区との間にある微高地の南西斜面裾付近に立地する北西から南東方向のものである。検出長は約11m、幅30cm~1mである。深さは約20cmで、埋土は灰色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

290—OS (第30図: 図版19) G06 XRに位置する。「く」の字状を呈するが、両端を289—OO、291—OPに切られる。検出長約60cm、幅約35cm、深さ約10cmで、埋土は黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

344—OS (第30図: 図版15) G11IP~LL付近に位置する。北東から南西方向のものである。南西端部は調査区外にのびる。342—OBを構成するピットである160—OPの他、256・263—OPに切られる。検出長は約21m、幅は概ね60cm~1m、北東端部の特に広くなっている所で約2mである。深さは約20cmで、埋土は褐色系のシルト層である。出土遺物は認められない。

345-OS (第30図: 図版15) G11JOに位置する。北東から南西方向のもので、南西端部は344-OS、263-OPに切られる。検出長は約3m、幅約40cm、深さ約5cmである。埋土は褐色シルト層で、出土遺物は認められない。

346-OS (第30図: 図版15) G11JO~LN付近に位置する。JO・KOでは南北方向、LO・LNでは北東から南西方向のものである。352-00他、226・368・380-OPに切られる。検出長は約10m、幅40cm~1mで、深さは約10cmである。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

348-OS (第30図: 図版16) G11LNに位置する。北東から南西方向のものが、南西端部付近で北西方向にのびる。267-OWに北東端部を切られる他、178・366・367-OPに切られる。北東から南西方向の部分の検出長は約2.7m、幅50cm~1m、深さ約20cmである。北西方向にのびる部分では検出長約1.5m、幅約50cm、深さ約10cmである。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

349-OS (第71図: 図版16) G11LLに位置する。ほぼ東西方向のものであるが、その東端部は北方に向く。西端部は344-OSによって切られる。検出長は約2.5m、幅は約30cm、深さ約5cmである。埋土はにぶい黄褐色(10YR 5/4)粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

351-OS (第30図: 図版16) G11JP・KPに位置する。北東から南西方向のもので、南西端部は346-OS、352-OOに切られる。検出長は約7m、幅は70cm~2m、深さは約10cmである。埋土は黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

355-OS (第71図: 図版16) G11LNに位置する。東西方向のもので、東端部は348-OSに切られる。検出長は約1m、幅約30cm、深さ約10cmである。埋土は褐色(10YR 4/6)シルト層である。出土遺物は認められない。

356-OS (第30図: 図版16) G06YP・YQに位置する。東西方向のものが、その中程より北東方向に向くものである。西端部は調査区外にのびる。検出長は約3.5m、幅約40cm、深さ約15cmである。埋土は灰黄褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

358-OS (第30図: 図版20) G06WQ付近に位置する。北西から南東方向のもので、北西端部は調査区外にのびる。検出長約3m、幅80cm、深さ約5cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

359-OS (第30図: 図版14) G06VT付近に位置する。北東から南西方向のものであるが、北東端部は34-OSに、南西端部は42-OSに切られる。検出長は約2m、幅約50cm、

深さ約15cmである。埋土は浅黄色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

370-OS (第30図:図版17) G11ML・MMに位置する。ほぼ東西方向のものであるが、西端部は調査区外にのびる。150-OPに切られる。検出長は約3m、幅は約30cm、深さ約15cmである。埋土は黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

451-OS (第30図:図版17) G11AR・ASに位置する。東西方向のものである。検出長は約3.5m、幅は約50cm、深さは約10cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

452-OS (第30図:図版17) G11CQ付近に位置する。東西方向にのびる部分と南北方向にのびる部分とからなる「T」字状を呈する。検出長は東西方向で約4.5m、南北方向で約2mである。幅はいずれも約40cm、深さは約10cmである。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

494-OS (第30図:図版17) G11ER・EQに位置する。東西方向のものである。493-OPに切られる。検出長は約3.5m、幅は約50cm、深さは約15cmである。埋土は暗褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

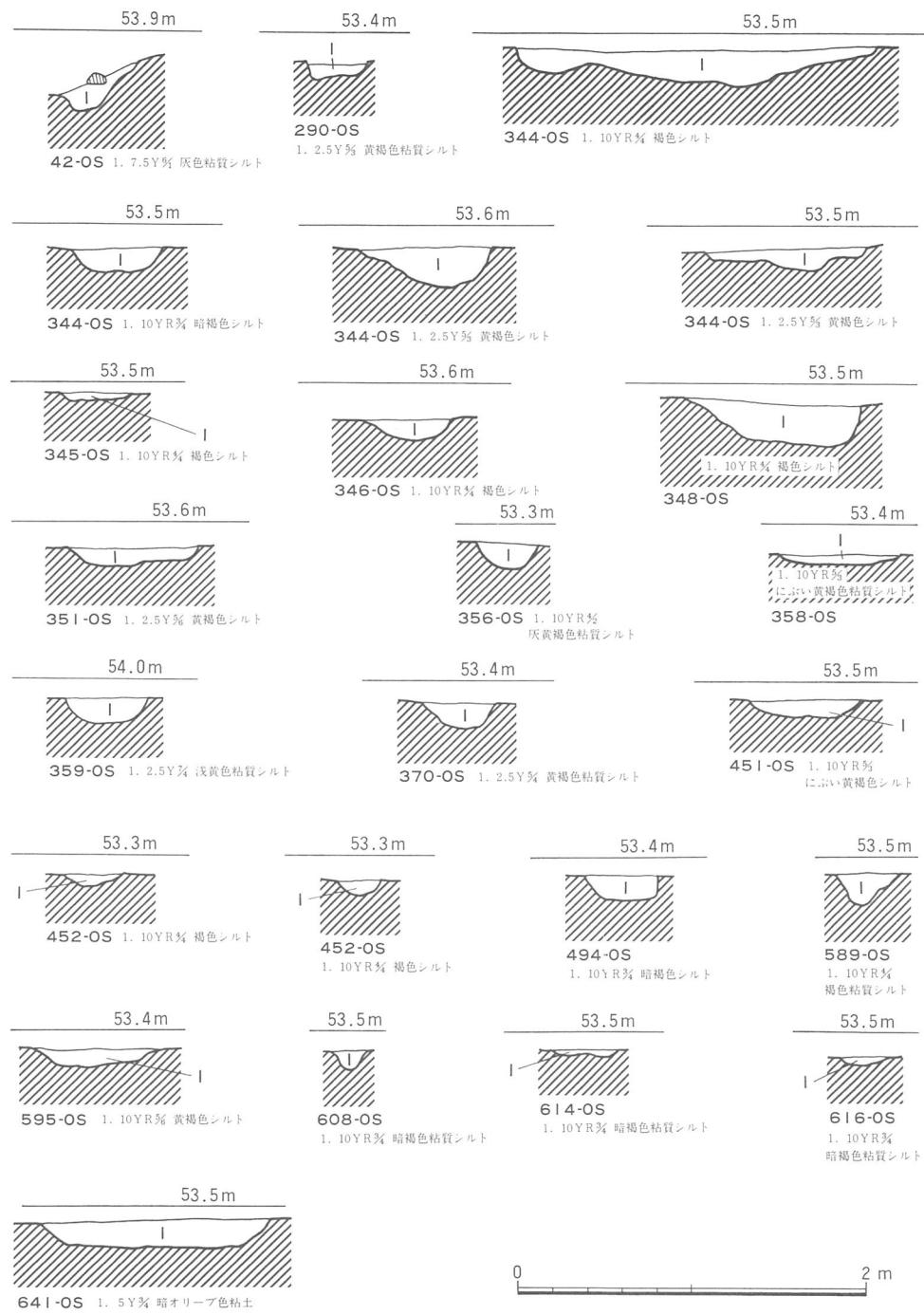
589-OS (第30図:図版18) G11GQ・GRに位置する。北西から南東方向のものであるが、北西端部は西方に向く。583・584・587・588・598-OPに切られる。検出長は約4m、幅は約40cm、深さは約20cmである。埋土は褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

595-OS (第30図:図版18) G11GR・GSに位置する。北西から南東方向のものが「く」の字状に屈曲して東方へ向くものであり、東端部は調査区外にのびる。検出長約2m、幅約50cm、深さ約10cmで、埋土は黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

608-OS (第30図:図版18) G11GPに位置する。北東から南西方向のもので、北東端部は607-OPに切られる。検出長約1m、幅約20cm、深さ約10cmである。埋土は暗褐色砂質シルト層である。出土遺物は認められない。

614-OS (第30図:図版26) G11HRに位置する。南北方向のもので、南端部は617-OOに切られる。検出長約70cm、幅約30cm、深さ約5cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

616-OS (第30図:図版26) G11HRに位置する。北西から南東方向のもので、南東端部は617-OPに切られる。検出長約80cm、幅約30cm、深さ約5cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。



第30図 42・290・344～346・348・351・356・358・359・370・451・452・494・589・595・608・614・616・641-OS 断面図

638-OS (第71図: 図版19・20) G06XQに位置する。南北方向のものが「く」の字状に屈曲して北西方向にのびる。363-OOに重複し、切られる。検出長は約2m、幅約50cm、深さ約20cmである。埋土は灰オリーブ色(5Y4/2)粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

641-OS (第30図: 図版18) G11BS~FSに位置する。南北方向のものである。南端部は調査区外にのびる。634-OO、425・433・466・506・627・549-OPに切られる。検出長は約18m、幅70cm~2m、深さ約15cmで、埋土は暗オリーブ色粘土層である。出土遺物は僅かに焼土塊が認められる。

#### c. 土坑

289-OO (第31図: 図版19) G06XRに位置する。方形に近い不整形なものである。長軸85cm、短軸60cmで深さは約25cmである。埋土はオリーブ褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

347-OO (第32図: 図版19) G11LO・MOに位置する。3m×1.3mの溝状のもので、深さは約20cm、埋土はオリーブ褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

352-OO (第31図: 図版19) G11LO・KOに位置する。隅丸方形を呈する。一辺95cmで、深さは約10cmである。埋土は暗褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

354-OO (第32図) G11JOに位置する。東部は344-OSに切られ、西部は調査区外にのびる。検出した部分は長軸約2.5m、幅約50cm、深さ約5cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

357-OO (第31図: 図版16) G06XP付近に位置する。溝状にのびる不整形なものである。長軸約2.8m、短軸約90cm、深さ約20cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

360-OO (第31図: 図版19・20) G06XR・XQに位置する。長方形を呈する。長辺約1.4m、短辺約1.1m、深さ約10cmである。埋土は黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

361-OO (第31図: 図版20) G06WRに位置する。隅丸方形を呈する。長軸約80cm、短軸約65cm、深さ約15cmで、埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

362-OO (第71図: 図版14) G06WU付近に位置する。一端は調査区外にのび、もう一端は42-OSに切られる。検出した部分の最大長は約2.7m、深さ10cm~20cmである。埋土

は浅黄色（2.5 Y 7/2）粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

363-OO（第71図：図版20） G06WRに位置する。概ね9m×7mの不整形なもので、360・361-OO、358-OSなどに切られる。埋土はオリーブ褐色（2.5 Y 4/4）粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

371-OO（第31図：図版19） G11KO付近に位置する。円形に近い不整形なものである。352-OO、346-OS、229-OPに切られる。直径約1.8m、深さ約35cm、埋土は黒褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

383-OO（第33図：図版20） G11KPに位置する。東部を351-OSに、南部をトレンチによって切られる。検出した部分の最大長は1.15m、深さは約10cmである。埋土は褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

390-OO（第33図：図版20） G11JPに位置する。概ね2.2m×1.7mの不整形なもので、深さ約30cmである。埋土は上層が灰黄褐色粘質シルト層、下層が褐色粘質シルト層である。出土遺物は僅かに須恵器片が1片認められる。

393-OO（第32図：図版20） G11JQ付近に位置する。方形に近い不整形なものである。東端部は調査区外にのびる。一辺約2m、深さは約10cmである。埋土は褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

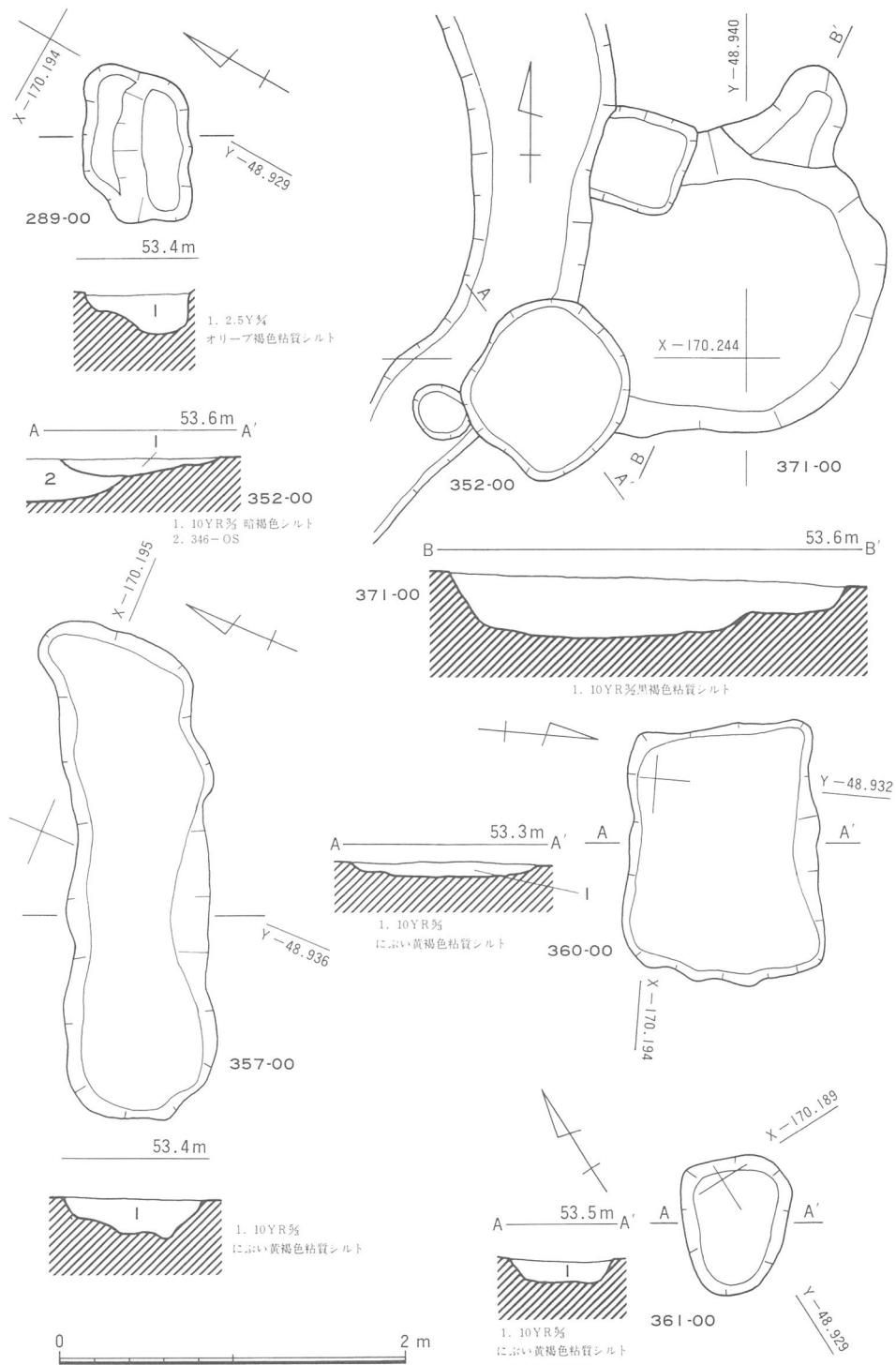
397-OO（第32図：図版21） G11IP付近に位置する。溝状にのびる不整形なもので、253・254-OPに切られる。長軸約4.2m、短軸約1.7m、深さ約5cmである。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

420-OO（第33図：図版21） G11ATに位置する。長楕円形に近い不整形なもので、長径90cm、短径50cm、深さは約20cmである。埋土はオリーブ褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

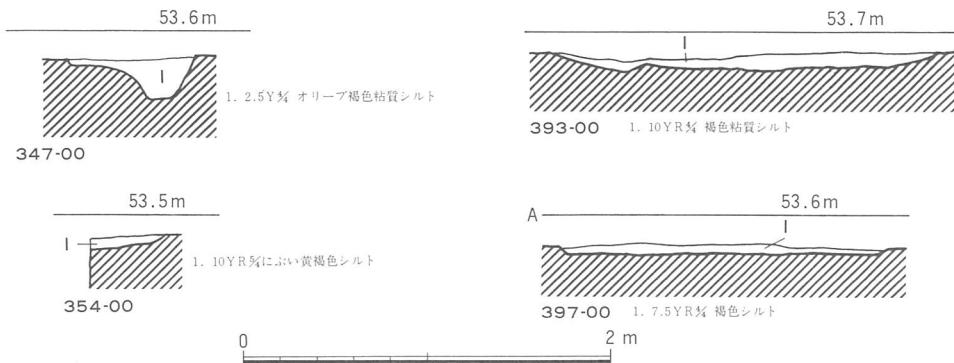
449-OO（第33図：図版21） G11BRに位置する。東西方向にのびる溝状のもので、415-OPに切られる。長軸約2.5m、短軸約1m、深さは約20cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

450-OO（第33図：図版21） G11CQ・CRに位置する。東西方向にのびる溝状のもので、448-OPに切られる。長軸約2.35m、短軸約1m、深さ約10cmで、埋土はにぶい黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

455-OO（第33図：図版22） G11CQに位置する。方形のもので、長辺約90cm、短辺60cm～80cm、深さ約10cmである。埋土は褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。



第31図 289・352・357・360・361・371-00 平・断面図



第32図 347・354・393・397-00 断面図

456-00 (第34図: 図版22) G11CRに位置する。方形を呈するものである。南端部は457-00によって切られる。一辺約1m、深さ約15cmである。埋土はにぶい黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

457-00 (第34図: 図版22) G11CRに位置する。東西方向の溝状を呈する。長軸約1.55m、短軸約55cm、深さ約20cm、埋土は褐色シルト層で、出土遺物は認められない。

460-00 (第34図: 図版22) G11CS・CTに位置する。2m×80cmの不整形なもので、深さ約40cmである。埋土は灰オリーブ色シルト層である。出土遺物は認められない。

463-00 (第34図: 図版22) G11DRに位置する。概ね1.1m×1mの不整形なものである。深さは約35cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

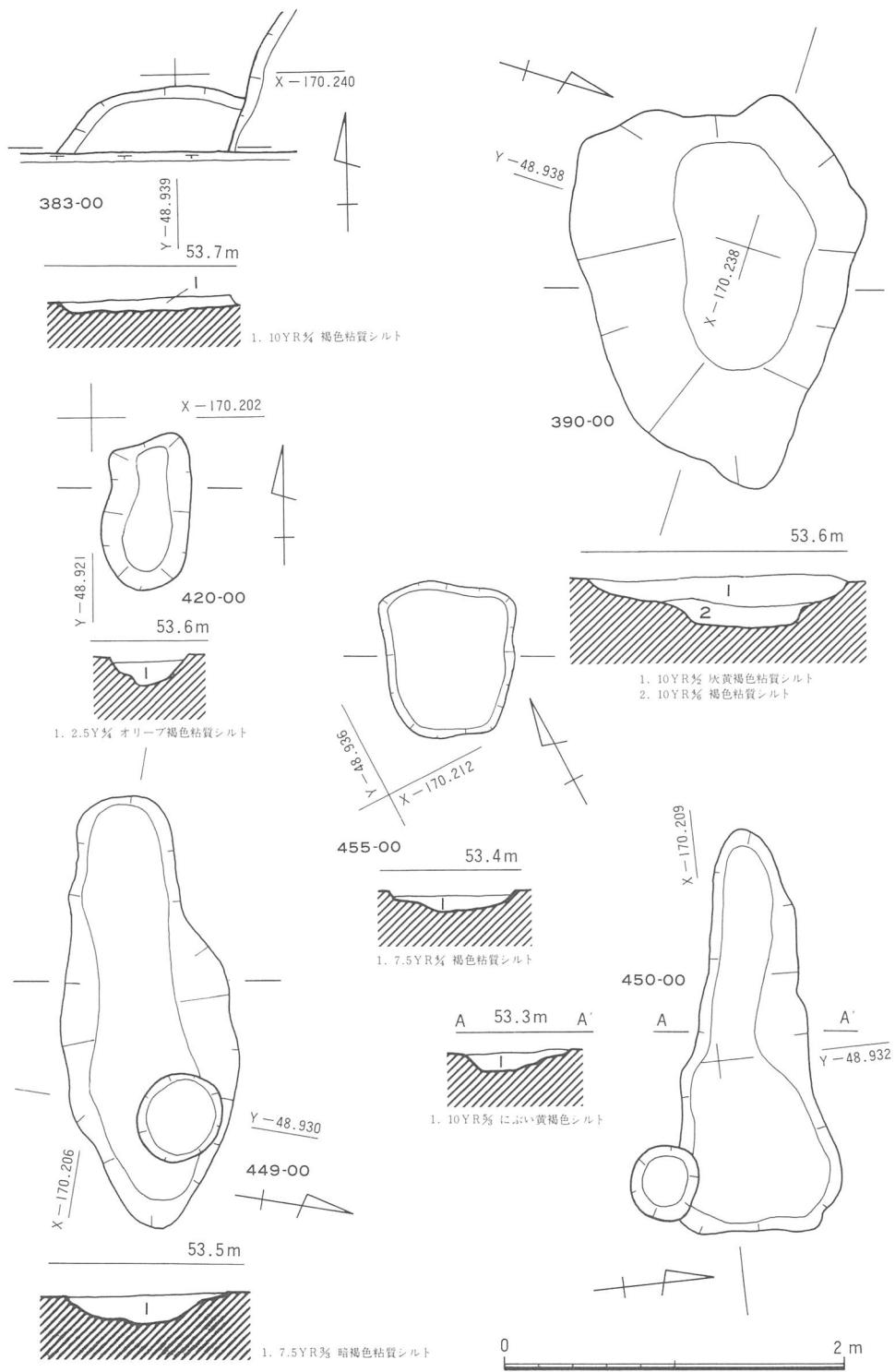
464-00 (第34図: 図版23) G11DRに位置する。溝状のもので、長軸約1.75m、短軸約70cm、深さ約10cmである。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

486-00 (第34図: 図版23) G11DPに位置する。楕円形を呈するもので、長径約85cm、短径約75cm、深さ約20cmである。埋土は黒褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

487-00 (第34図: 図版23) G11DQに位置する。楕円形を呈する。長径約75cm、短径約55cm、深さ約10cmで、埋土は暗褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

488-00 (第34図: 図版23) G11DQに位置する。隅丸方形状のもので、一辺約80cm、深さ約15cmである。埋土は黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

489-00 (第34図: 図版23) G11DQに位置する。488・490-00に切られるが、方形を呈するものと思われる。長軸約1m、短軸約80cm、深さ約15cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。



第33図 383・390・420・449・450・455-00 平・断面図

490-OO (第34図：図版23) G11DQ・EQに位置する。1.3m×90cmの不整形なもので、深さは約20cmである。埋土は灰黄褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

491-OO (第35図：図版24) G11DQ・DRに位置する。概ね1m×70cmの不整形なもので、492・493-OPに切られる。深さは約25cmで、埋土は黒褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

498-OO (第35図：図版24) G11DTに位置する。方形を呈するものと思われるが、東端部は調査区外にのびる。一辺約1.4m、深さ約15cmである。埋土は黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

509-OO (第35図：図版24) G11EQに位置する。長楕円形に近い不整形で、長軸約1.8m、短軸約1m、深さ約25cmである。埋土は黒褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

539-OO (第35図：図版24) G11EQに位置する。溝状のもので長軸約1.55m、短軸約50cm、深さ約5cmである。埋土は褐色砂質シルト層である。出土遺物は認められない。

548-OO (第35図：図版24) G11ES付近に位置する。概ね1.6m×1.6mの不整形なもので、深さは約35cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

561-OO (第37図：図版25) G11FPに位置する。2.3m×90cmの不整形なもので、深さは約20cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

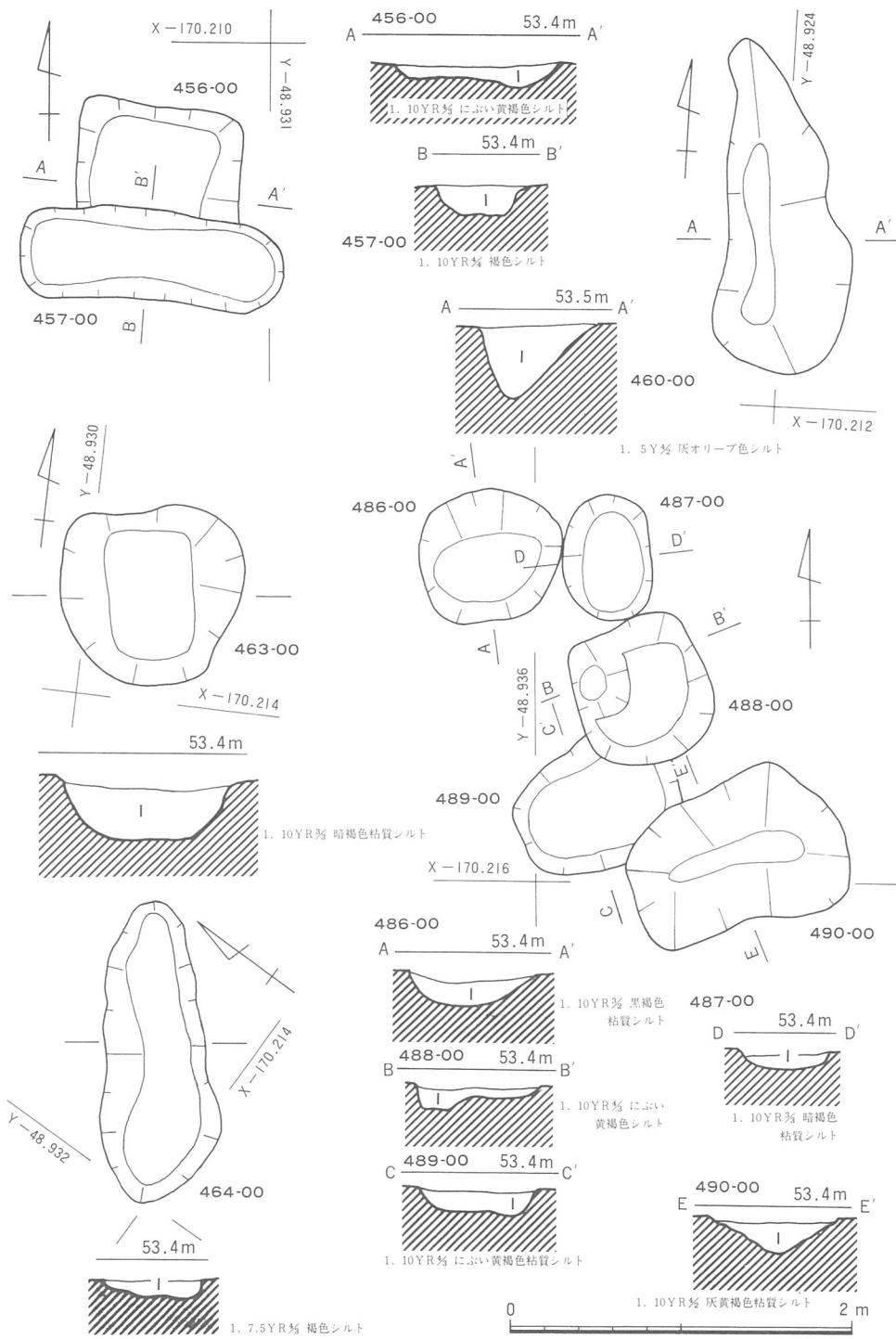
562-OO (第37図：図版25) G11FQ付近に位置する。概ね3.1m×1.1mの不整形なもので、深さは約30cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層で、出土遺物は認められない。

564-OO (第35図：図版25) G11FP付近に位置する。溝状のもので、長軸約1.1m、短軸約45cm、深さ約5cmである。埋土は暗灰黄色砂質シルト層で、出土遺物は認められない。

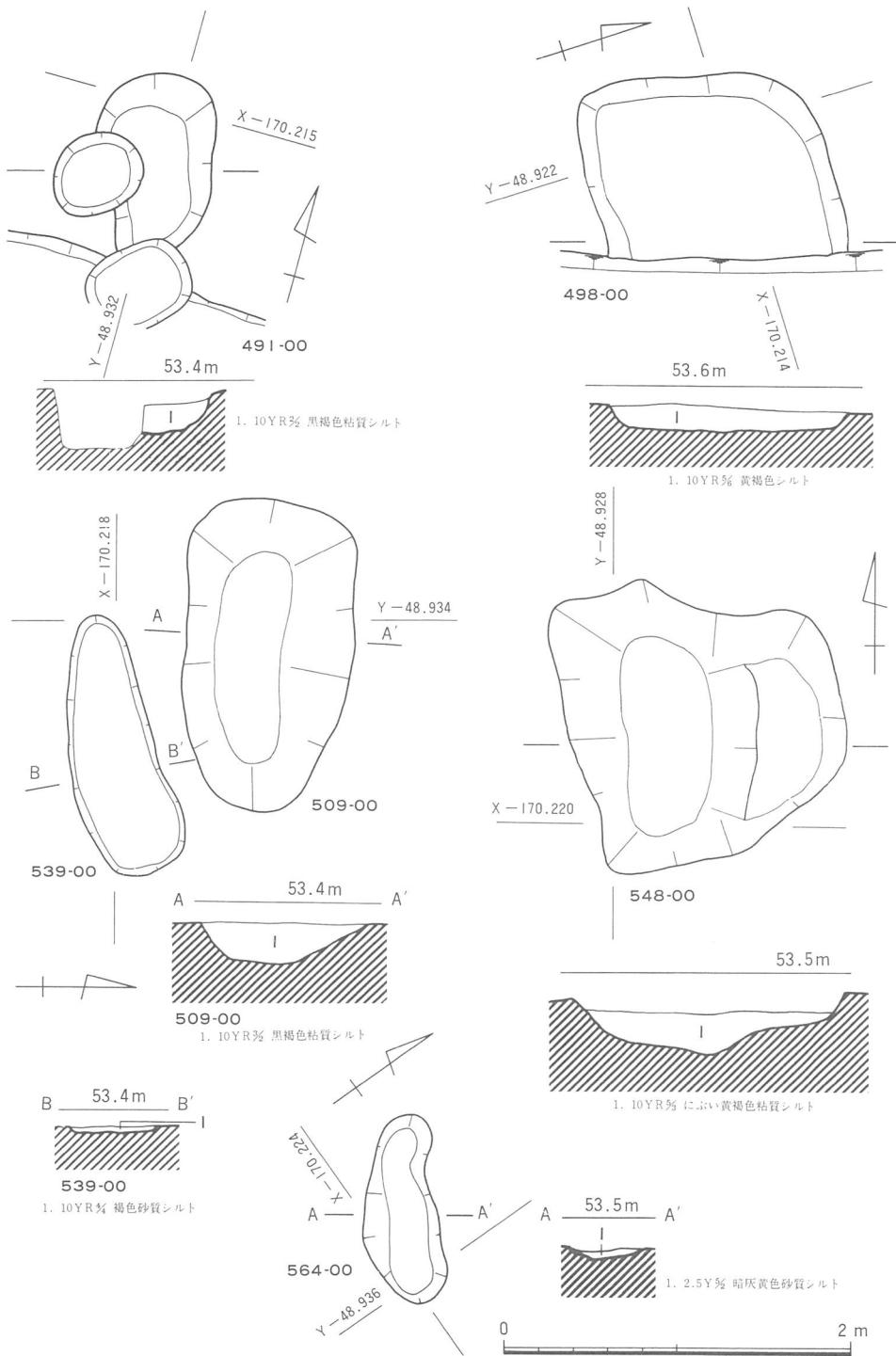
611-OO (第37図：図版25) G11HP・HQに位置する。長方形に近い不整形なものである。長軸約1.3m、短軸約60cm、深さ約15cmである。埋土は黄褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

617-OO (第37図：図版26) G11HRに位置する。長楕円形に近い不整形なものである。長軸約1.4m、短軸約90cm、深さ約20cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

634-OO (第37図：図版26) G11ESに位置する。長楕円形を呈し、506-OPに切られ



第34図 456・457・460・463・464・486～490-00 平・断面図



第35図 491・498・509・539・548・564-00 平・断面図

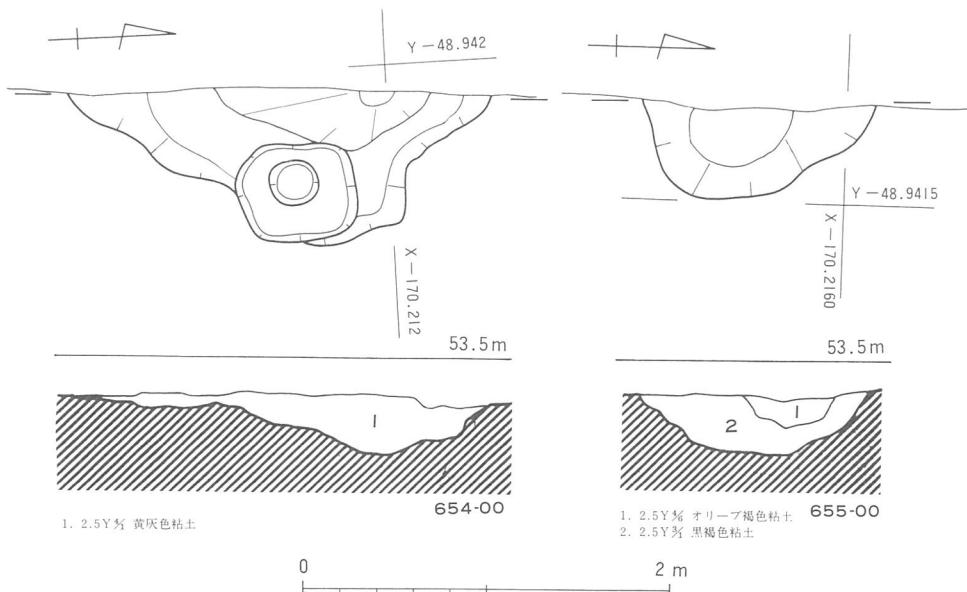
る。長径約1.55m、短径約75cm、深さ約20cmである。埋土は黒褐色粘土層である。出土遺物は認められない。

637-OO (第37図: 図版19) G 06 W Qに位置する。流滴形を呈するものである。363-OOと重複し、切られる。長軸約75cm、短軸約40cm、深さ約20cmである。埋土は暗灰黄色シルト層である。出土遺物は認められない。

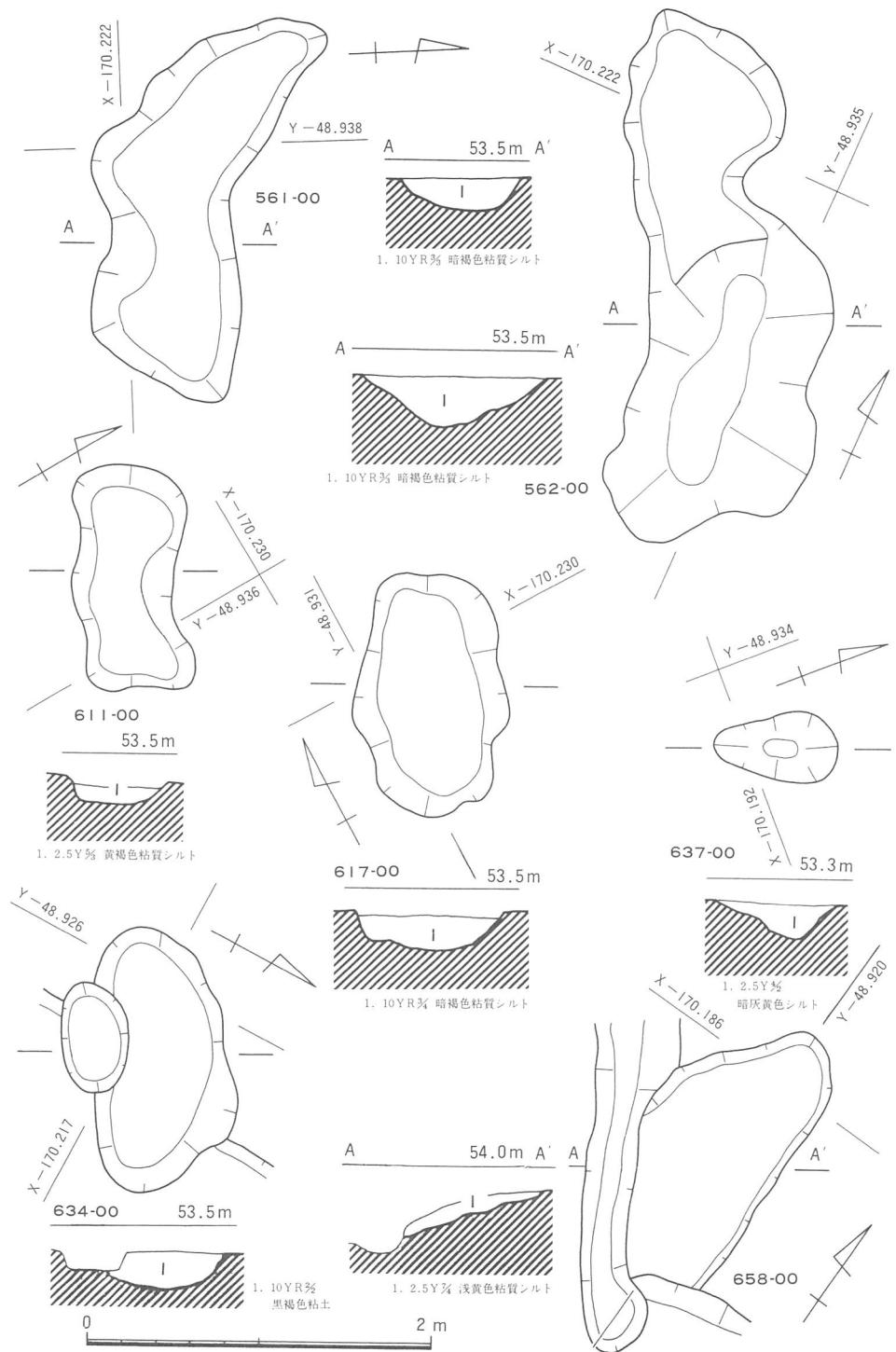
654-OO (第36図: 図版26) G 11 CO・DOに位置する。不整形なものと思われるが、大半は調査区外にのび不明である。622-OBを構成するピットである649-OPに切られる。検出できた部分は概ね1.25m×85cmの大きさで、深さは約35cmである。埋土は黄灰色粘土層である。出土遺物は認められない。

655-OO (第36図: 図版26) G 11 DO・EOに位置する。大半が調査区外にのびると思われるため、平面形は不明である。検出できた部分の大きさは、概ね1.25m×50cmで、深さは約30cmである。埋土は二層に分かれ、上層はオリーブ褐色粘土層、下層は黒褐色粘土層である。出土遺物は認められない。

658-OO (第37図: 図版14) G 06 VT・V Uに位置する。42-OS、362-OOに切られるため、平面形は不明である。検出できた部分は舌状を呈する。長軸約1.8m、短軸約90cm、深さ10cmである。埋土は浅黄色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。



第36図 654・655-OO 平・断面図



第37図 561・562・611・617・634・637・658-00 平・断面図

#### d. 落込み

2-OL (第71図: 図版27) G06TQ・UQ付近に位置する。I区とIII区の間にある地山の段差に沿って、北西から南東方向に長くなる。西肩部は調査区外へと延びている。40-OSはこの北肩の一部を切っており、655-OBを構成するピットはこの埋土の上から掘り込まれている。北西側へ向うほど幅、深さを増し、調査区西壁と接する辺りで最大となる。北肩部が礫層であるのに対し、南肩部側は粘質シルト層を基底としており、底面の凹凸も著しい。長さは11m以上、幅は約10mである。深さは西壁部分で約30cmである。埋土は黄褐色(2.5 Y 5/4) 粘質シルト層である。出土遺物は認められなかったが、本遺構を覆う第6a層ではこの付近に比較的遺存度の良好な土器が集中する傾向が認められる。

### 3. 平安時代

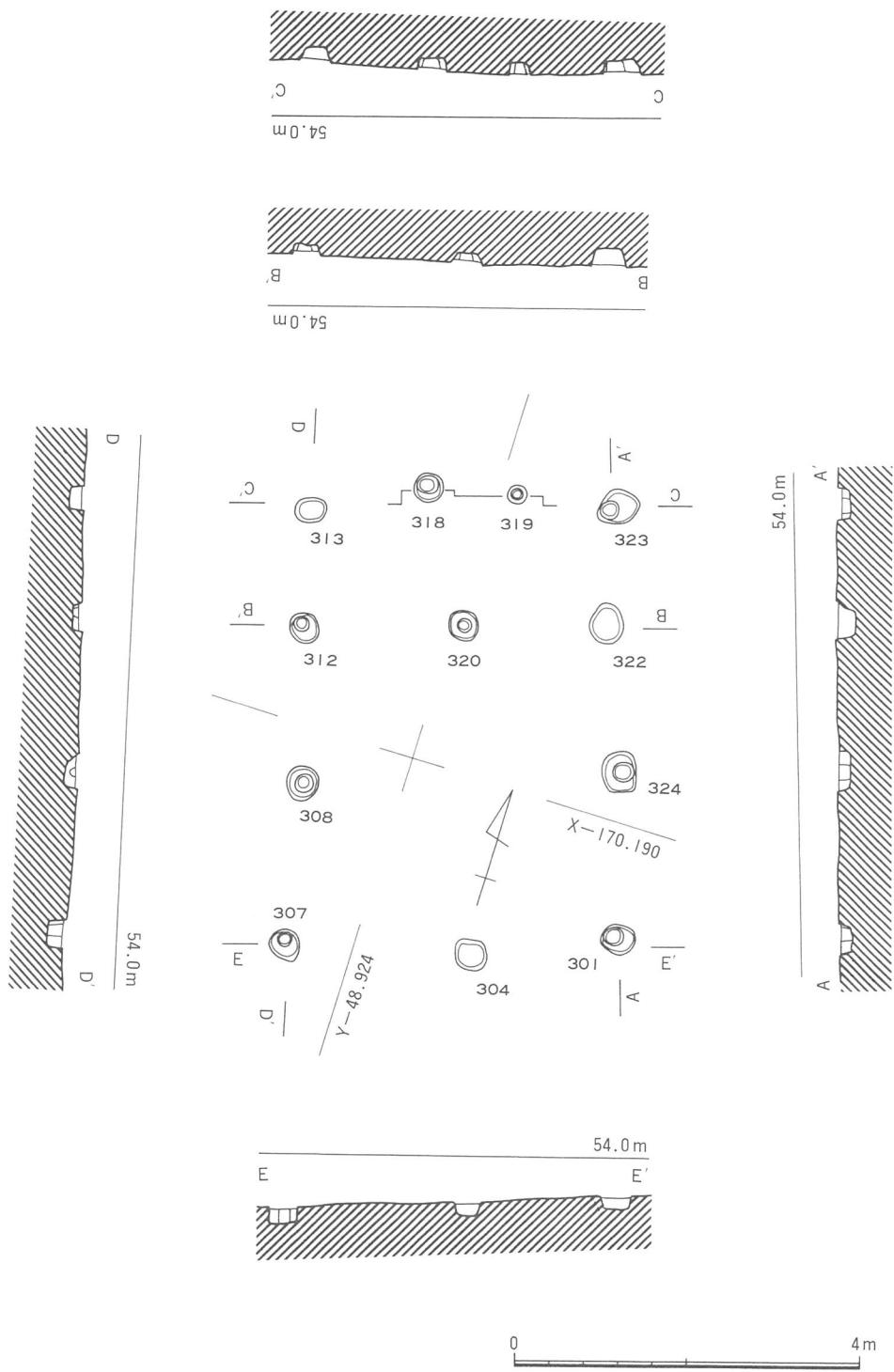
該当する遺構には、掘立柱建物、ピット、井戸、溝、土坑などがあげられる。この内明確に当時代のものとされるのは井戸であるが、他のものについては検出面などから考慮して、第1遺構面において検出されたものについて述べる。

#### a. 掘立柱建物

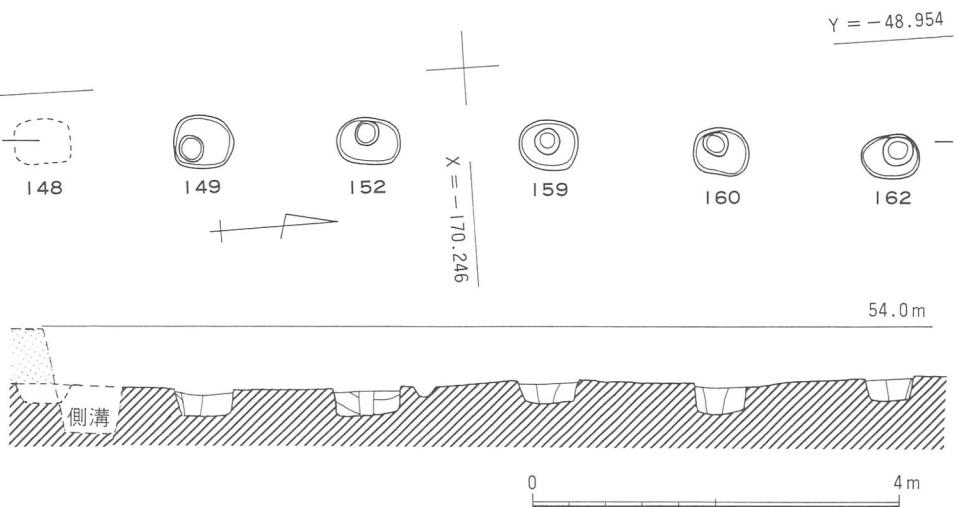
以下の掘立柱建物の柱間寸法や座標北に対する建物の棟角度は、第43図に模式的に示した。なお建物を構成するピット列は東西方向のものは北から順に第1、2、3、……列とし、南北方向のものは西から順にイ、ロ、ハ、……列とする。

341-OB (第38・43図: 図版28) G06WT付近に位置する。第2遺構面において検出したが、建物の方向やピットの規模などから本来第1遺構面の遺構であると思われる。一見3間×2間のものであるが、第1列にはロ列に相当するピットが見あたらず、若干小振りなピットで3間の列になっていること、第1列と第2列の間隔が他に比べて短いこと、第2列に304-OPに対応する320-OPがあることなどから第3列を棟とする2間×2間のもので第1列は庇であると考えたい。桁行は第2列で3.49m、第4列で約3.77m、梁間はイ列、ハ列とも約3.6mである。ピットは直径30cm～40cmの円形を呈するものが多い。出土遺物は僅かに307-OPから土師器の細片が1片認められる。

342-OB (第39・43図: 図版29・33) G11KL付近に位置する。第2遺構面において検出したが、第1遺構面で一部のピットが検出される621・622-OBと建物の方向が近似することなどから本来第1遺構面の遺構であると思われる。桁行に相当すると思われる5間



第38図 341-O B 平・断面図

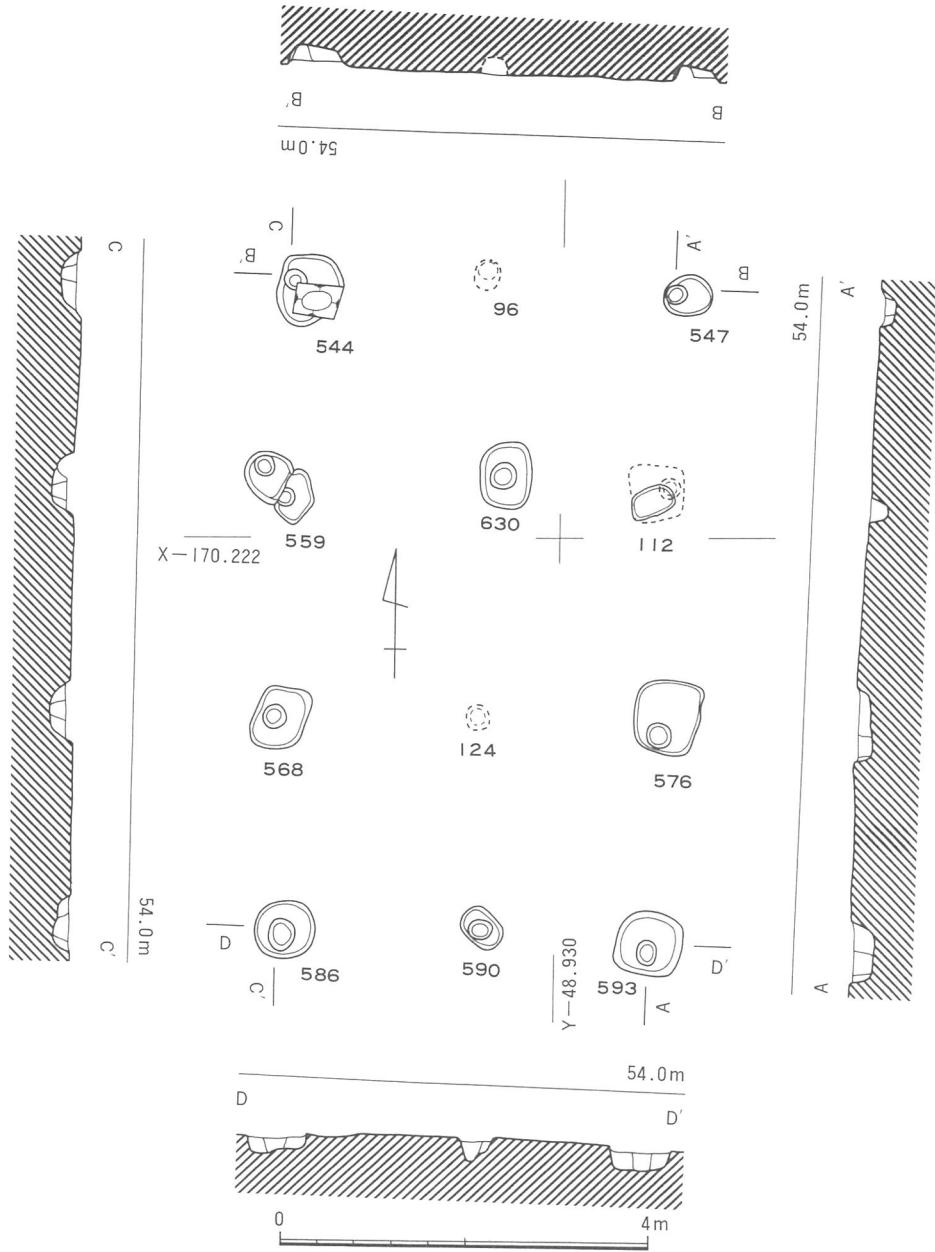


第39図 342-OB 平・断面図

のピット列を検出した。平面で4基、調査区壁面の土層観察で1基である。梁間は東方にこのピット列に相当するものが認められないため、西方の調査区外にのびるものと思われる。確認された桁行は約9.2mである。ピットは65cm×55cm前後の隅丸長方形もしくは楕円形を呈しており、深さは概ね20cm前後である。調査区壁面で観察されたピット以外のものは、いずれも直径25cm～30cmの柱痕が確認された。柱痕は掘方の縁辺部に偏って位置するものが多い。出土遺物は、すべて図示し得なかったが、149-OPから土師器の不明1片、152-OPから土師器皿1片、甕1片、159-OPから土師器皿1片、不明4片、162-OPから土師器不明3片が認められる。

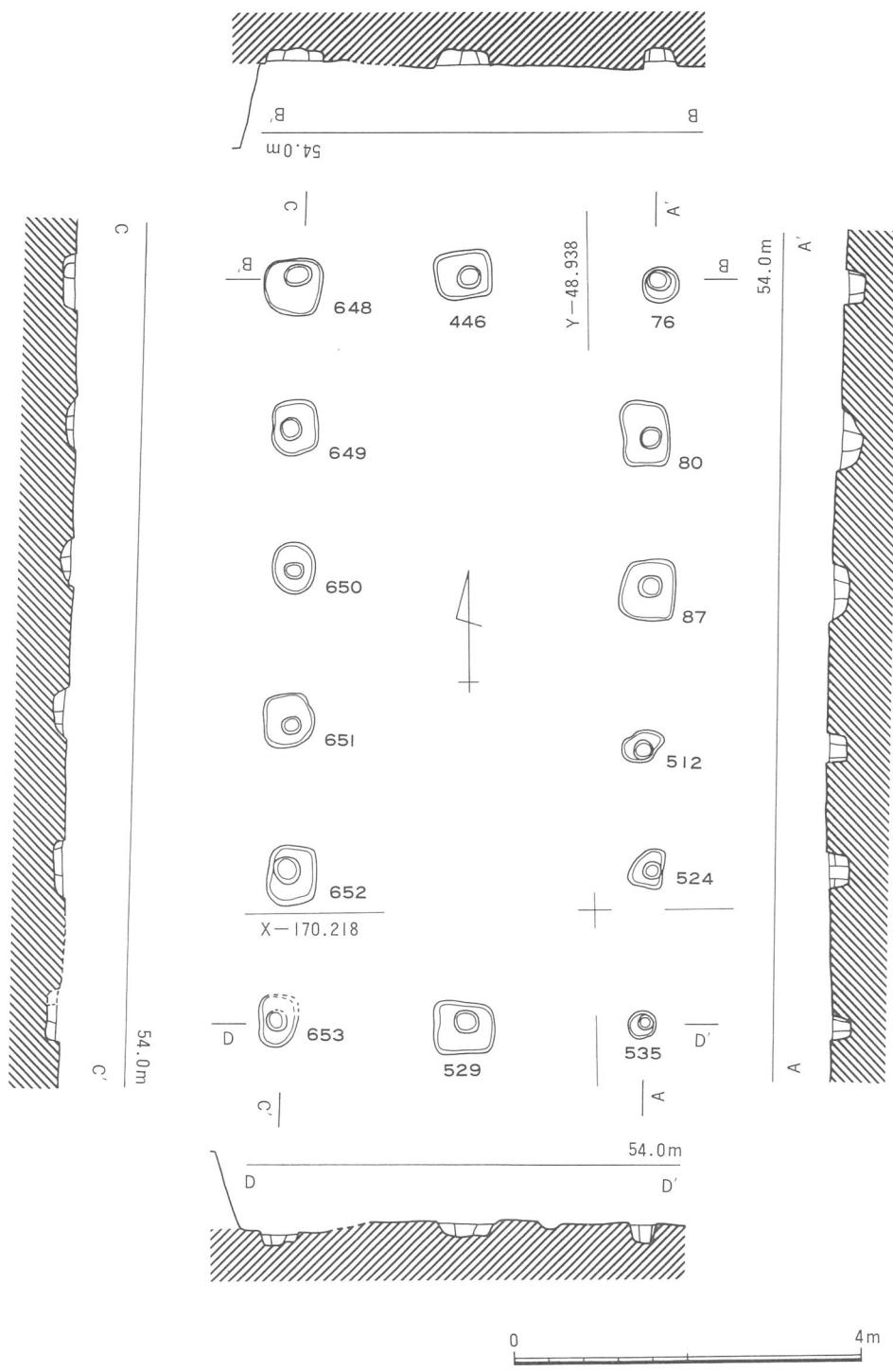
621-OB（第40・43・44図：図版30・65） G11FR付近に位置する。大半のピットは第2遺構面において検出したが、一部のピットは第1遺構面において検出されており、本来は第1遺構面において検出されるべきものであったと思われる。桁行3間、梁間2間の総柱建物で、桁行はイ列、ハ列とも約7m、梁間は第1列で4.29m、第4列で3.95mである。ピットは小さいもので48cm×36cm、大きいもので80cm×72cmの隅丸長方形を呈している。柱痕は直径25cm～30cm前後のものである。出土遺物は、図示し得たのは112-OPから出土した須恵器皿（190）1点のみであるが、他に同ピットから須恵器甕2片、559-OPから須恵器不明1片、568-OPから土師器不明1片、586-OPから須恵器1片、土師器不明2片、593-OPから須恵器甕1片、630-OPから須恵器蓋1片、土師器不明1片が認められる。

622-OB（第41・43・44図：図版31・33・65） G11DP付近に位置する。621-OBと同

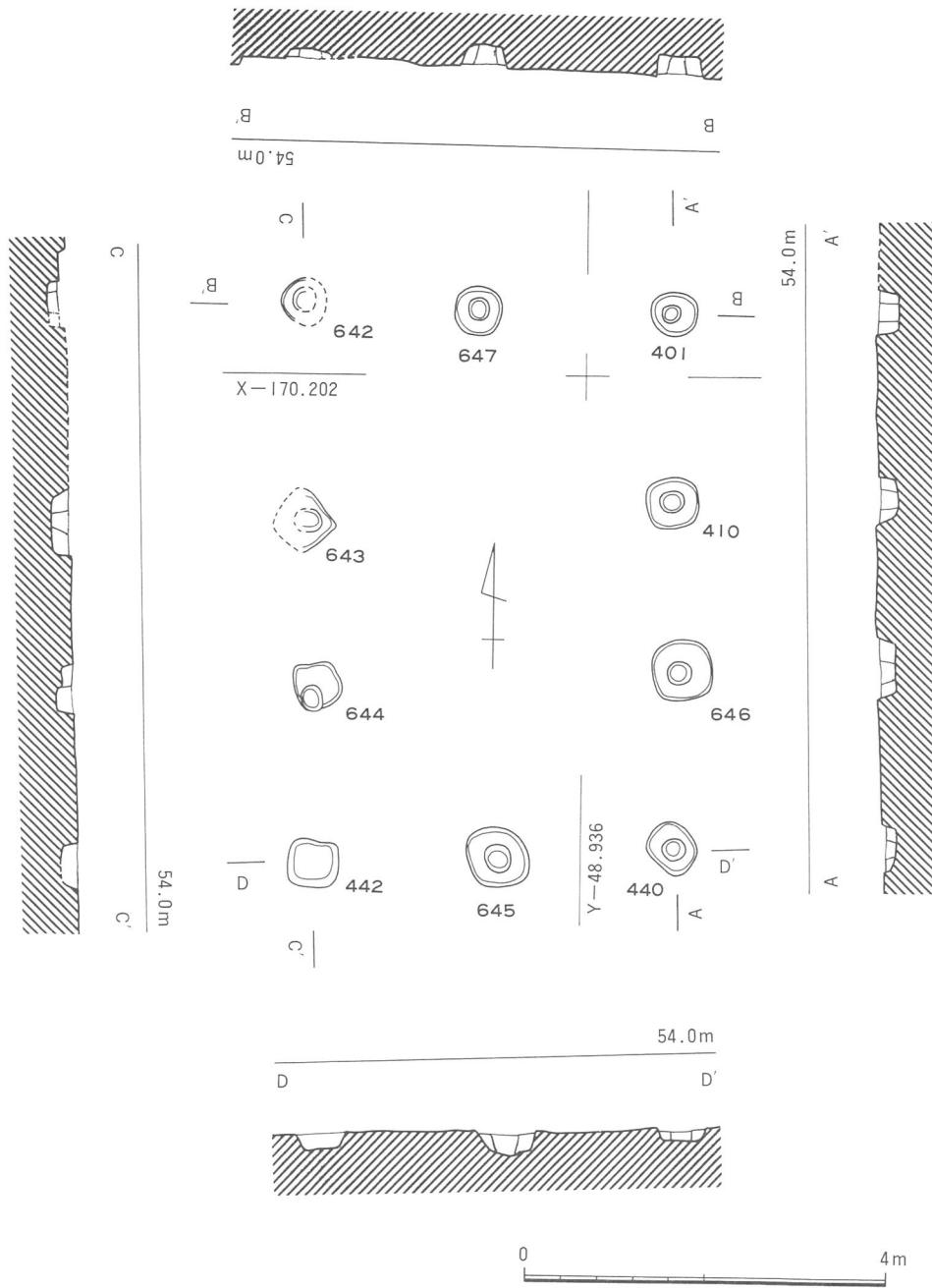


第40図 621-OB 平・断面図

じく大半は第2遺構面において検出したが、一部のピットは第1遺構面において検出されており、本来は第1遺構面において検出されるべきものであったと思われる。桁行5間、梁間2間の建物で、桁行はイ列、ハ列とも約8.5m、梁間は第1列、第6列とも約4.2mである。ピットは概ね60cm×50cm前後の隅丸長方形を呈している。柱痕は直径20cm前後であ

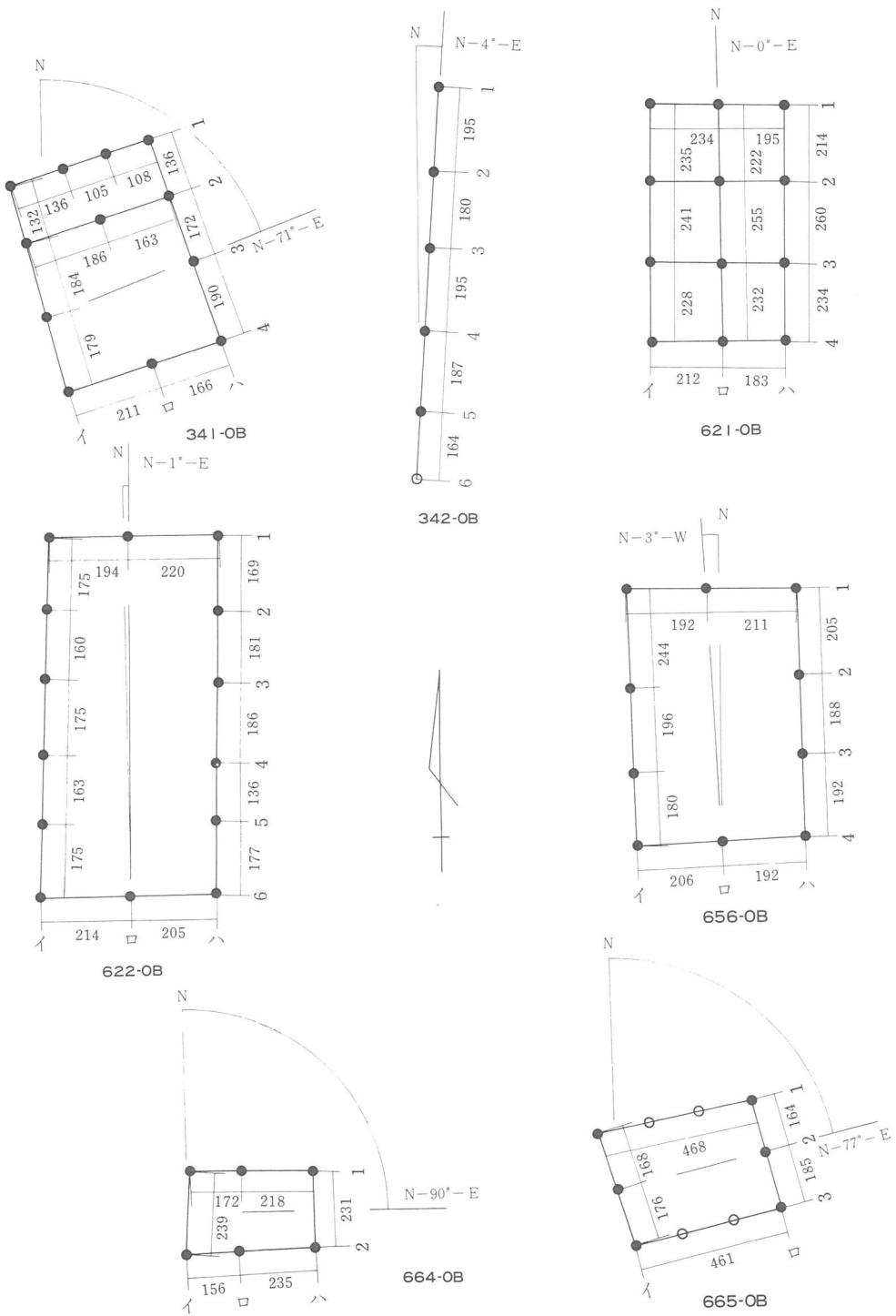


第41図 622-O B 平・断面図



第42図 656-OP 平・断面図

る。出土遺物は、図示し得たのは648-OPから出土した須恵器杯2点(186・187)、鉢1点(189)であるが、その他に同ピットから土師器不明4片、76-OPから土師器甕1片、不明1片、87-OPから土師器不明4片、529-OPから須恵器不明1片、649-OPから出



師器不明 1 片が認められる。

656-OB (第42・43図: 図版32) G11AP付近に位置する。第2遺構面において検出したが、第1遺構面で一部のピットが検出される 621・622-OB と建物の方向が近似することなどから本来第1遺構面の遺構であると思われる。桁行3間、梁間2間の建物である。桁行はイ列で 6.2 m、ハ列で 5.85 m、梁間は第1列、第4列とも約 4 m である。ピットは一辺 50cm ~ 70cm 前後の隅丸方形を呈している。深さは 20cm 前後である。柱痕は 442-OP のみ確認できなかったが、他は直径 20cm 前後の柱痕を確認した。出土遺物は、いずれのピットからも認められなかった。

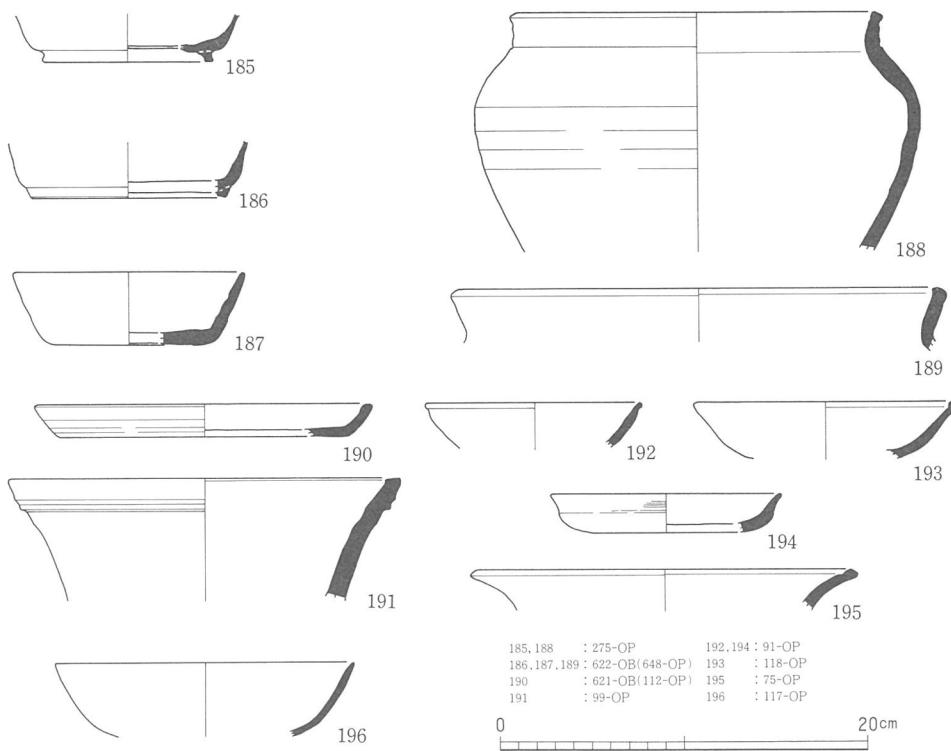
664・665-OB (第43・71図: 図版33) 以上の掘立柱建物の他に図上において二棟の建物を推定することができた。これらは建物としてはピットを欠くところがあるなど、やや不十分であると言わざるを得ないが、可能性としてここに掲げておく。

664-OB は、G11LM・LN に位置する。1間 × 2間のものを推定できる。長軸方向を棟とするなら桁行は第1列、第2列ともに約 3.9 m、梁間は概ねイ列、ロ列とも 2.3 m ~ 2.4 m である。棟方向は 342・621・622-OB とは約 90° 異なり、梁方向がこれらと近似する。建物を構成するピットは 174・182・183・185・265・365-OP である。これらは一辺あるいは直径 50cm 前後の隅丸方形または円形を呈しており、深さは 10cm ~ 20cm である。柱痕は 365-OP 以外はすべて確認されており、直径 20cm 前後である。出土遺物はいずれのピットからも認められない。

665-OP は、G11VS 付近に位置する。二列に 2 間のピット列が並ぶことから建物を推定した。イ列・ロ列間のピットを欠くが、距離的に 2 間 × 3 間のものと思われる。長軸方向を棟とするなら桁行は第1列、第2列とも概ね 4.6 m ~ 4.7 m、梁行は約 3.4 m である。棟方向は 341-OB と近似する。建物を構成するピットは 43・45・334・336~338-OP である。これらは直径 30cm ~ 50cm 程の円形あるいは楕円形を呈しており、深さは 20cm 前後である。柱痕はいずれも確認できなかった。出土遺物はいずれのピットからも認められない。

#### b. ピット (OP) 群 (第44図: 図版34・65)

ピットは、III区の中央部に集中している。直径 30cm 前後の円形のものが多くを占めている。掘方埋土はにぶい黄褐色系のものが多く、シルト質のものがほとんどである。出土遺物としては須恵器甕 (191)、土師器杯 (192・193)、皿 (194)、甕 (195)、黒色土器碗 (196) などが認められる。196は内面にのみ炭素を吸着させる A 類である。

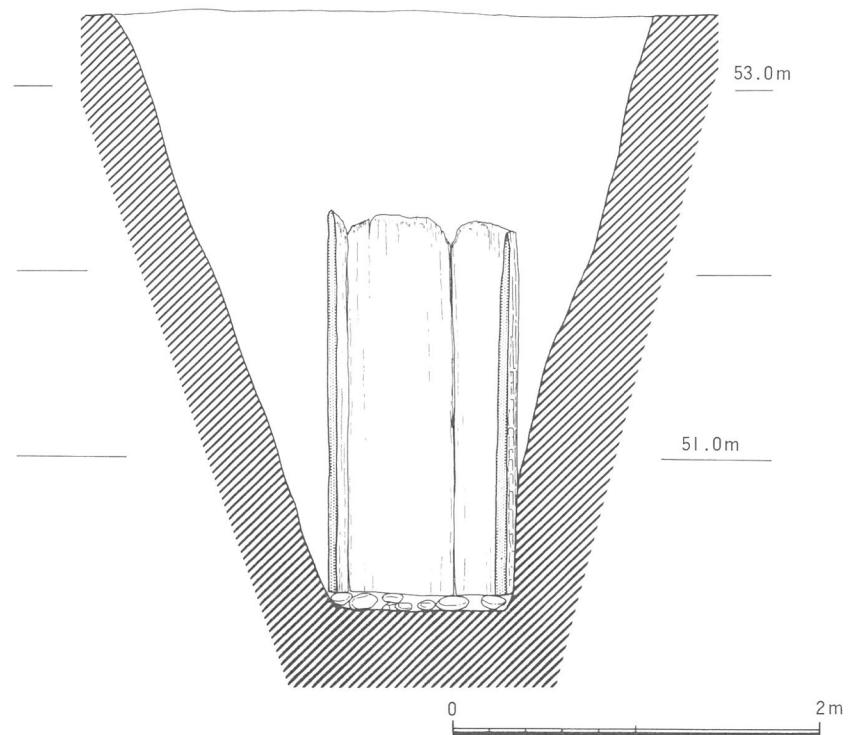
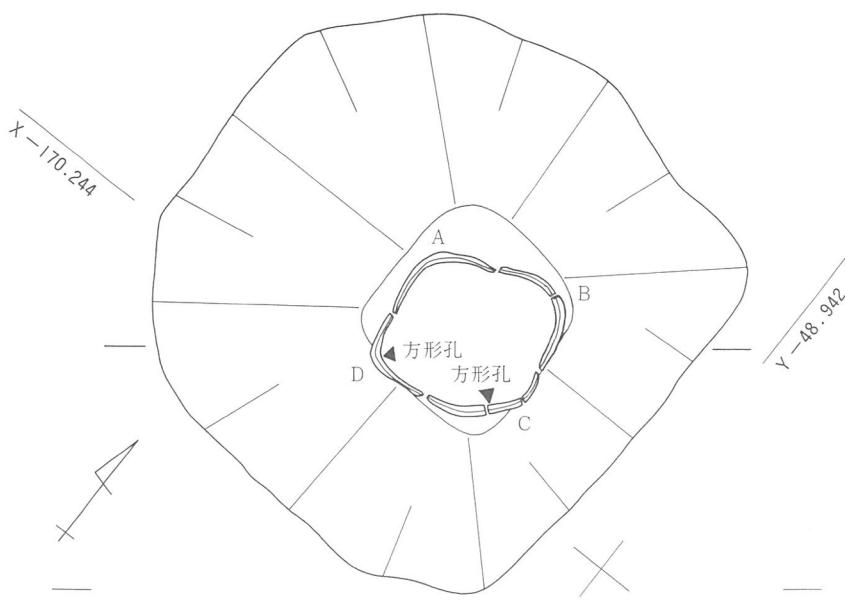


第44図 621・622-OB, その他のピット出土土器

### c. 井戸

267-OW (第45~51・67図: 図版35~37・66~74・78) G11KO付近に位置する。隅丸方形形状の掘方の中に木製の井筒を据えるものである。掘方は一辺約2.7mのもので、深さは約3.2mである。掘方の上端は南北方向を意識して掘られたように思われる。断面の形状は摺鉢状を呈する。井筒は一辺80cm~90cmの隅丸方形形状のものであるが、その据えられた方向は掘方の上端とは若干ずれる。長さは、残存するのは約2mであるが、土層観察や井筒材上端部の遺存状況から更に上方にのびていたことが窺われる。また井筒の基部には15cm前後大の礫を用いている。

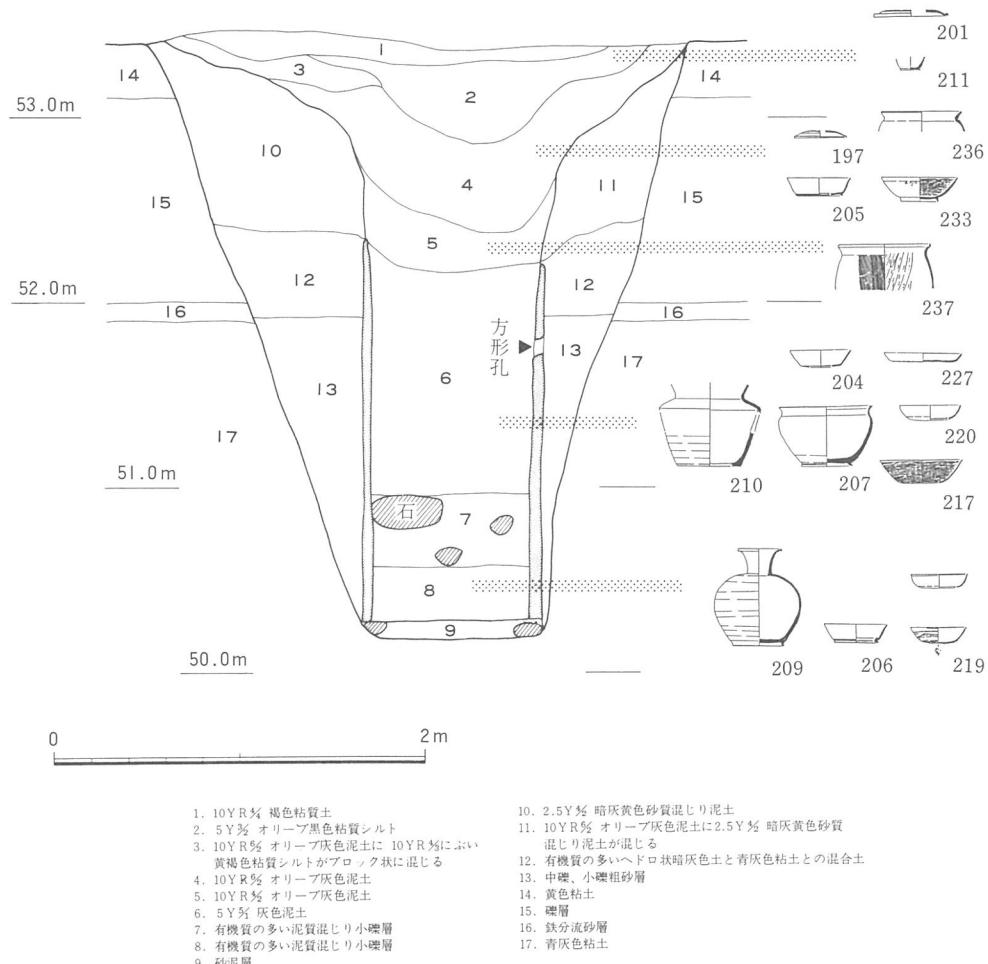
埋土は大きく六層に分けることができる。第1層(1~4)は褐色系あるいはオリーブ色系の泥土層または粘質シルト層、第2層(5・6)は灰色系の泥土層、第3層(7・8)は有機質の多い泥質小礫層、第4層(9)は砂泥層、第5層(10~12)は暗灰黄色、オリーブ灰色、青灰色などの泥土層、第6層(13)は中礫、小礫粗砂層である。これらは堆積状況や土質、遺物の出土状況などから、第1層は井戸が廃棄されて窪地としてその痕跡を



第45図 267-OW 平・立面図

残すようになってから以降のものと思われ、井筒内の堆積である第2層～第4層については、第2層は井戸が廃棄した後のもの、第3層は井戸が使用されていた時期のもの、第4層は井戸が造られた時期のものと考える。第5・6層は井筒の裏込め土と思われる。

井筒材（244～247）は、一木を四分割して内面を刳り抜き、外面を粗く整えたものである。材質はスギ、ヒノキなどの針葉樹と思われる。四分割された井筒材は便宜上、第45図に示すようにA～D材とした。これらはいずれも内外面及び下端部、左右両端部に加工痕を残し、特に外面の加工痕は遺存状況が良く顕著に認められる。上端部は細く痩せ、腐食した状況を示す。C材（246）とD材（247）にはそれぞれ方形の穿孔が一ヶ所ずつ認めら



第46図 267-OW 断面図

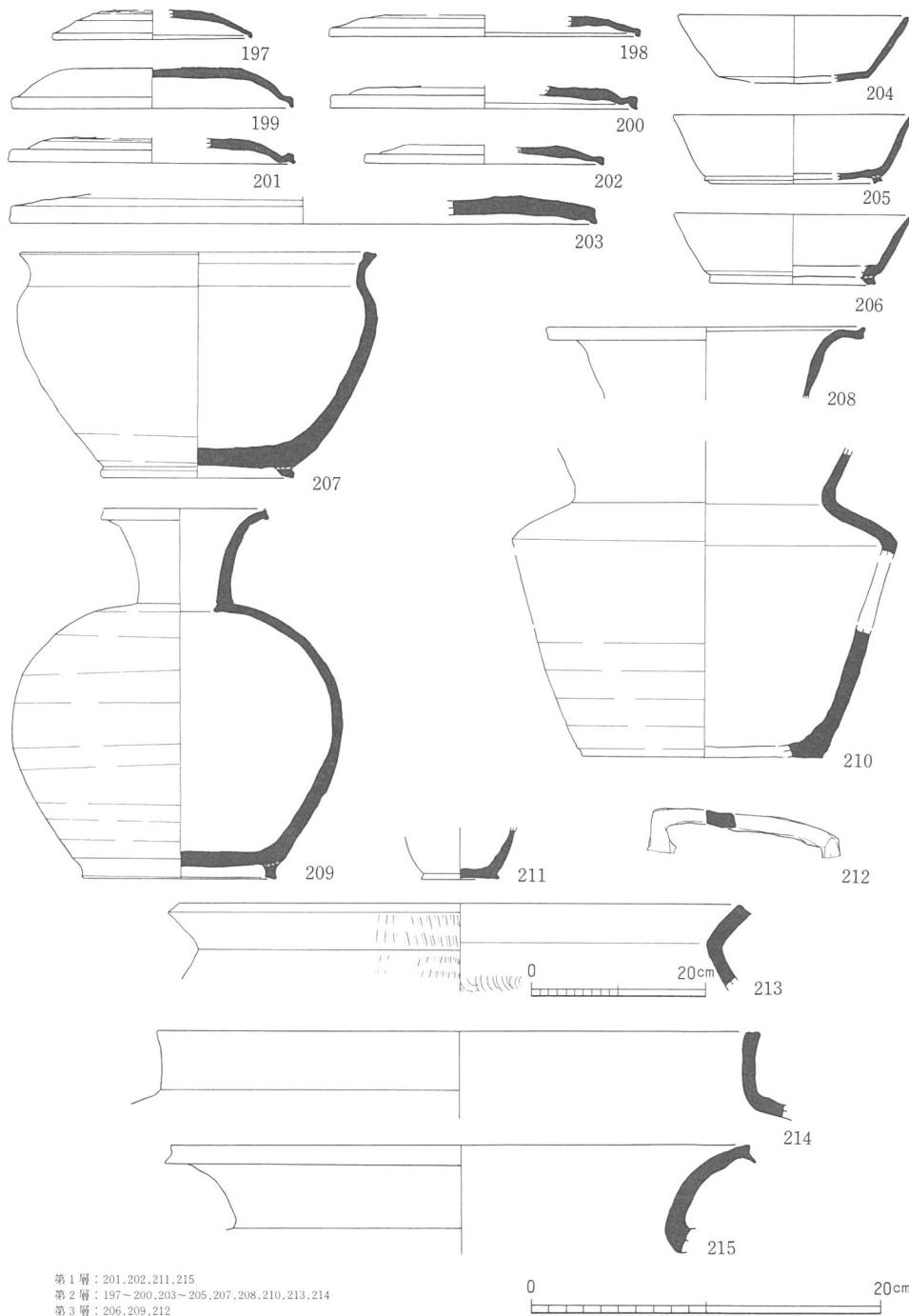
れる。穿孔は概ね一辺10cm～15cmのもので下端部から1.4m～1.5mの所に位置する。またA～D材のすべてのものの両側に直径0.5cm～1cmの穿孔が認められる。いずれも下端部から1.5m前後の所に位置する。これは打ち込まれた状況では確認できなかつたが、鎌(238)の出土が認められることから、四分割された各々の材を相互に繋ぎ止めるために鎌を用いた痕跡と思われる。

この井筒材については方形の穿孔が認められることから当初建築部材の転用材かと思われた。しかし柱材なら地中に埋没している部分あるいは地表面付近の腐食が著しいが、これはそのような痕跡が認められないこと、柱材としては大き過ぎ、且つ表面の調整加工が粗いこと、方形の穿孔がその加工痕から内側から穿たれた可能性が大であること、などを理由にこれは否定される。

出土遺物の大半は第1層～第3層において認められる。

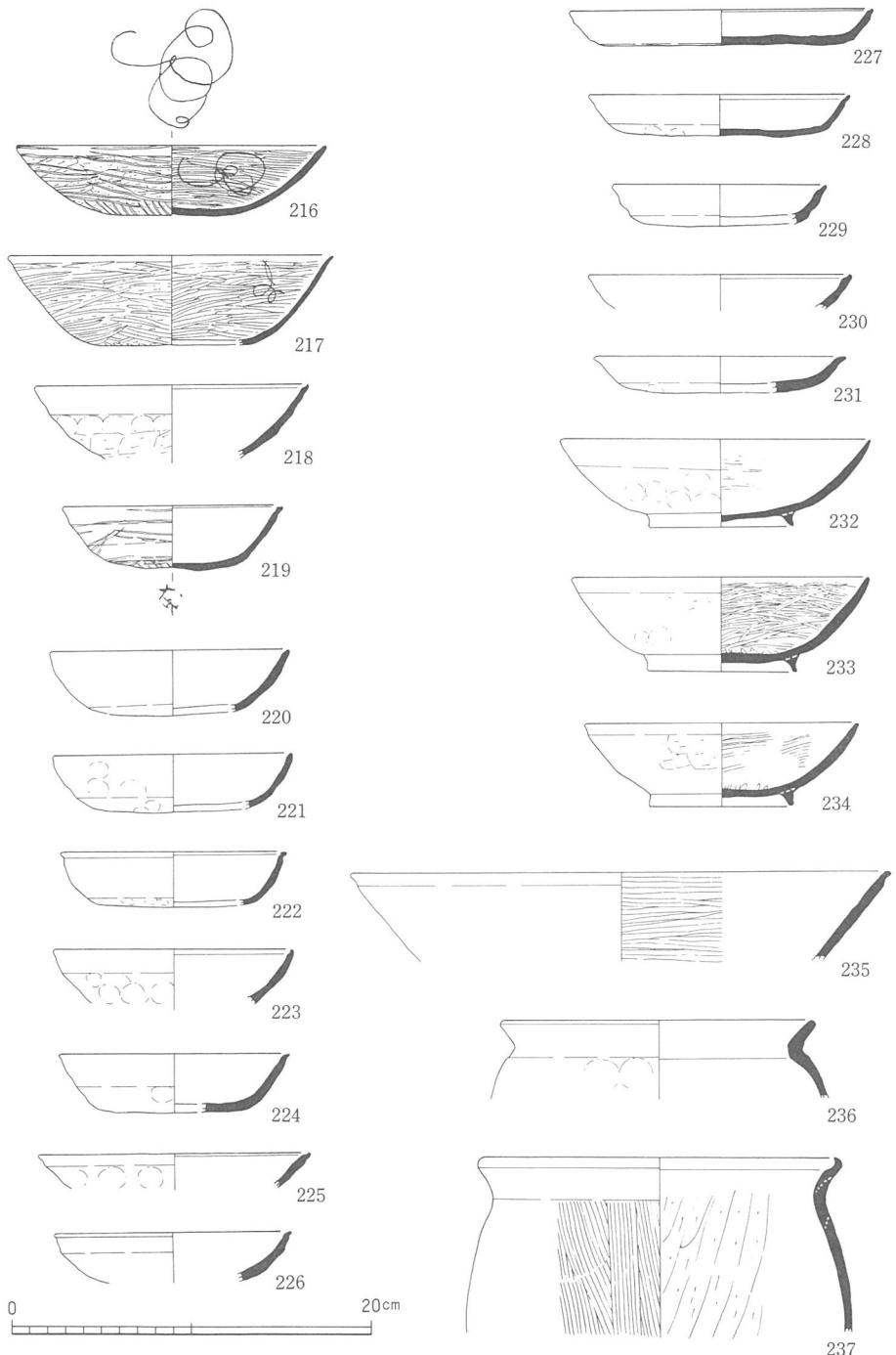
第1層からは須恵器蓋12片(201・202)、杯11片(297)、皿1片、高杯2片、壺3片、鉢1片、瓶子8片(211)、甕20片(215)、土師器杯13片(218・223～226)、皿31片(228～231)、甕20片(236・298)、黒色土器A類の椀(232～234)、鉢(235)等30片、同B類1片の他、製塩土器1片、瓦11片(289)などが認められる。須恵器蓋201・202はいずれもA類で、201は天井部に回転ヘラケズリ調整を認める。杯297はB類である。瓶子211は底部に静止糸切り痕を残すものである。甕215はA類である。土師器杯224・225は外面の剥離、摩耗が著しく調整不明であるが、218はc手法、223・226はf手法によるものである。

第2層からは須恵器蓋6片(197～200・203)、杯3片(204・205)、鉢1点(207)、壺10片(208・210)、甕26片(213・214)、土師器杯10片(220・221)、皿4片(227)、甕8片(237)、黒色土器A類杯6片(216・217)、瓦24片(288・290)の他、木製品(241・243・323)などが認められる。須恵器蓋199・200はA類、197・198はB類、203はC類である。この内197・199・203には天井部に回転ヘラケズリ調整が認められる。なお203は口径33.2cmと杯蓋としては大きく他の容器の蓋と思われる。鉢207はD類である。第2層下部において完形のまま正立した状況で出土した。甕213・214はいずれも口縁部がまっすぐにのびるB類である。土師器杯220・221はf手法によるものである。黒色土器A類の杯216・217はいずれも高台の付かない杯A類に類するものである。内外面に緻密なヘラミガキを施し、内面には連結輪状暗文を認める。c<sub>3</sub>手法によるものである。木製品は曲物の底板(241)と側板(323)、杓子状木製品(243)である。底板241は厚さ0.6cm、直径13.2cm程の板目材で、一部を欠損しているが、四ヶ所に目釘孔が観察できる。側板322は柱目



第1層：201,202,211,215  
 第2層：197～200,203～205,207,208,210,213,214  
 第3層：206,209,212

第47図 267-OW 出土土器 I



第1層：218, 223～226, 228～236  
第2層：216, 217, 220, 221, 227, 237  
第3層：219, 222

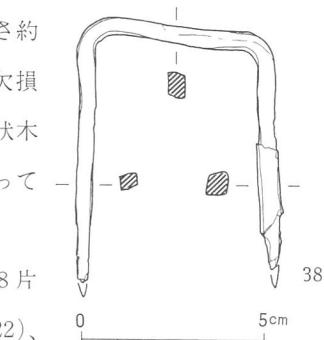
第48図 267-0W 出土土器 2

のものであるが、大部分を欠損しており、曲物の直径、高さなどは不明である。杓子状木製品243は幅約2.58cm～2.80cm、厚さ約0.98cmの板目材を面取りしており、断面形は長円形をなす。欠損部で材の幅が広がり、切込みが入れられていることから杓子状木製品の柄ではないかと考える。基部端は鋸による切断面となっている。

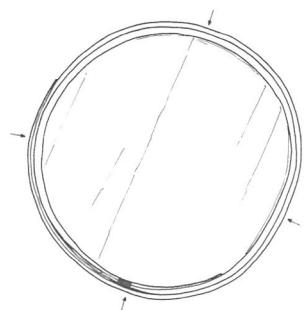
第3層からは須恵器蓋4片、杯2片(206)、鉢1片、壺8片(209)、平瓶1片(212)、甕5片、土師器杯5片(219・222)、甕4片(322)、瓦1片の他、木製品(239・240・242)などが認められる。須恵器杯206はB類である。壺209はL類である。第3

層最下部において正立した状況で出土した。平瓶212は提梁のみが出土した。土師器杯219は須恵器壺209と同様、正立した状況で完形のまま出土した。 $f_3$ 手法によるもので、底部中央付近には墨書きが認められる。墨書きは一字で、「南」と読み取ることができた。222はa手法によるものである。甕322は頸部から体部にかけての破片であるが、体部の一端に墨書きが認められる。墨書きは僅かにその一部が認められるのみで詳細は不明である。木製品は曲物柄杓(239・242)と曲物底板(240)である。柄杓(239・242)は短い柄(242)が杓部(239)に半分入ったまま出土した。杓部239は厚さ0.7cm、直径13.5cm～13.7cmで、板目材の底板に、幅約12.6cmの柾目の側板を巻き、柾目を樺綴じしている。底部外周を幅約1.6cmの樺綴じしたタガで補強した後、四ヶ所の目釘で底板と側板を接合している。シラビキは縦方向には約0.3cm間隔で施されており、上部では斜格子状にも施されている。側板の柾目に約1.2cm×1.6cmの方形の孔をあけ、その対面に直径約0.4cmの円孔をあけ柄孔としているが、方形の孔は側板の上部近くに、円孔は下部に位置しているため、柄が底板に対して角度をもつ構造となっている。柄242は約1.15cm×1.54cmの方柱状の材の先端を細く削っている。基部側から削っていることが「逆目」の状態から確認できる。基部側は刃物で切断されており、この柄杓が投棄されたものであることを物語っている。なお基部側に杓部の側板と接していた部分の痕跡が観察できる。底板240は厚さ0.87cm、直径13.0cm～13.5cmの板目材で、四ヶ所に目釘孔が観察できる。外面に一条の擦過痕がついている。

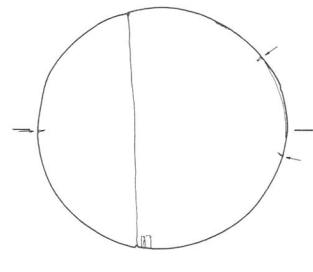
第4層からは須恵器杯1片と壺3片など、第5層からは僅かに土師器の皿1片が認められる。いずれも図示することはできなかった。第6層からは出土遺物は認められない。



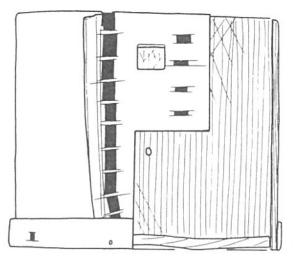
第49図 267-0W 出土  
鉄製品(鎌)



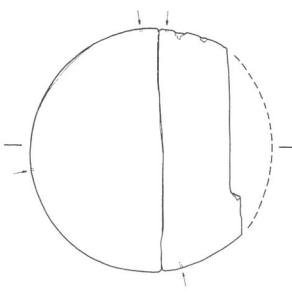
239



240

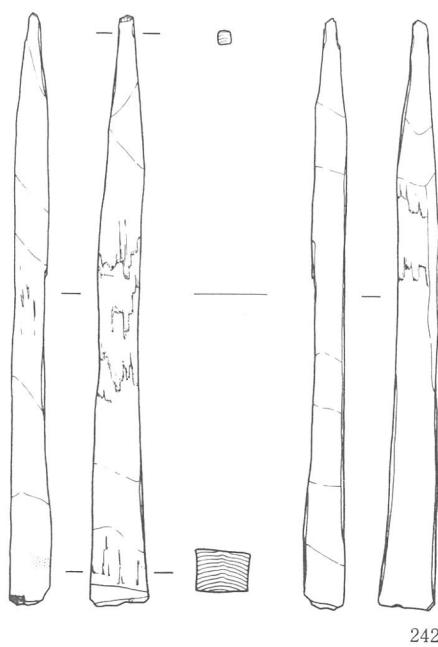


239

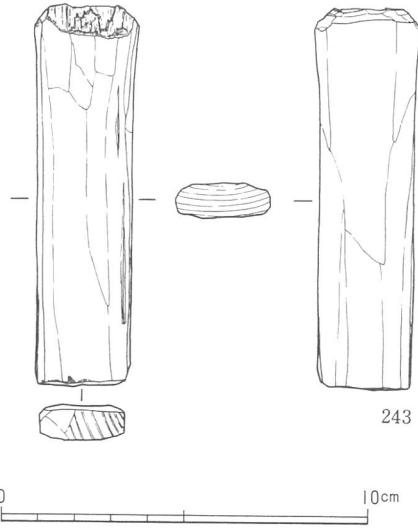


241

第2層：241,243  
第3層：239,240,242



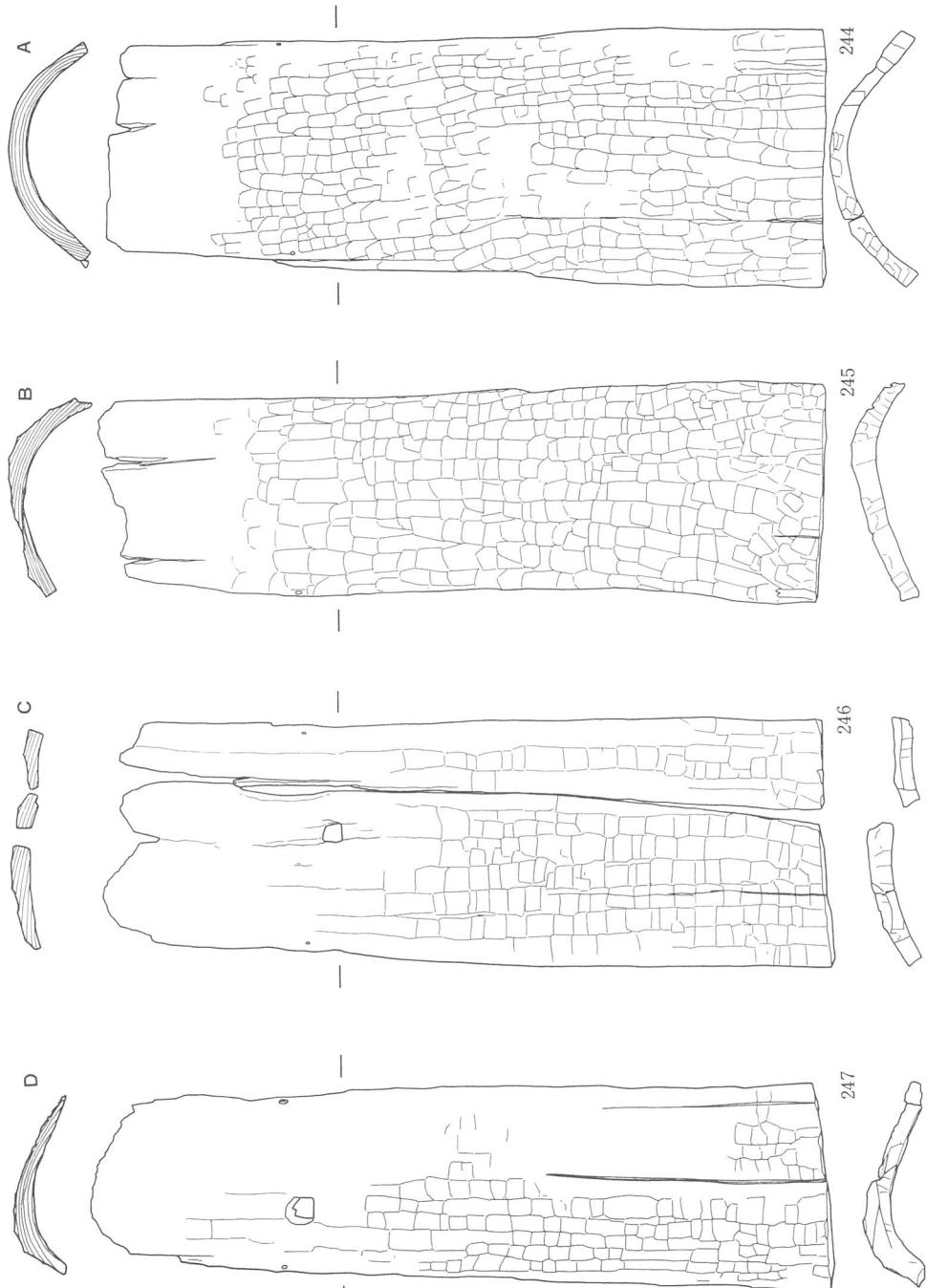
242



243



第50図 267-OW 出土木製品 I



第51図 267-OW 出土木製品 2 (井筒材)

これら各層から出土したものの他に鉄製品として鎌1点（238）が認められる。井筒D材と裏込め土との間で出土した。0.79cm×0.41cmの鉄製の角材を用いたもので、幅5.265cm、長さ7.18cm、重さ16.3gである。先述したように四分割された井筒材を相互につなぎ止めるために使用された物と思われる。

井戸の構造については、掘方が湧水層である礫層を貫いており、更にその下の青灰色粘土層（非湧水層）を約1.7mも穿って井筒を据えていることから、通例に見られるような湧水層中に井筒を据えて水を蓄えるものとは明らかに異なっていると思われる。可能性としては、先述した方形の穿孔の位置が湧水層の位置に近いこと、穿孔の周辺の腐食が他の部分に比べ著しいこと、裏込め土に第6層のように中礫、小礫、粗砂などの水を浸透しやすいものを使用していることなどから、この穿孔を通じて湧水層から水を井筒内に導いていたのではないかということが考えられる。井戸内外の土壤分析を行った結果、第3層に淡水性の珪藻化石に混じって多くの海性の珪藻化石を検出することができた。このことは裏込め土中に海成層の地山である青灰色粘土が混じることから、この裏込め土中の海性の珪藻化石が、井筒内への導水とともに流れ込んできたものと考えられ、この井戸構造についての説に示唆的である。

井戸の時期的な変遷については、井筒内から出土する遺物とその出土層位が物語るものと考えられる。使用され始めたのは、井筒内最下層から完形の須恵器壺、土師器杯が出土しており、それらから概ね9世紀中頃と思われる。その後おそらく207に示す須恵器鉢が出土する付近までは曲物の柄杓などが出土し、ある程度の機能は果たしていたと推測できる。最終的には232・233などに示す黒色土器椀から概ね10世紀中頃には完全に埋没していたか、あるいは窪地程度にその痕跡をとどめていたものと思われる。

#### d. 溝

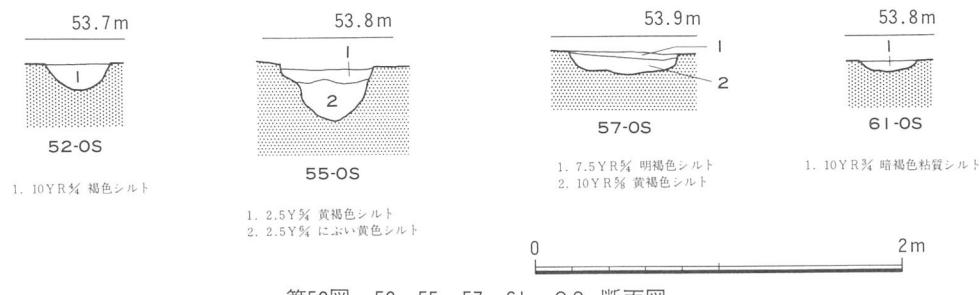
52-OS（第52・53図：図版38） G06YT～G11BPに位置する。検出長は22.0mである。北側で東に60°の傾きをもつ。幅30cm～1.0m、深さ15cm程度である。横断面は「U」字形を呈する。埋土は褐色シルト層である。出土遺物には須恵器甕（259）が認められる。なおこの溝と3.6m間隔で平行するものが南側に二条検出され、何等かの関連が考えられる。

55-OS（第52・53図：図版38） G11BTからD Pに位置する。検出長は23.0mである。幅20cm～90cm、深さ28cm程度である。横断面はU字形に近い。埋土は二層に分かれ、上層

が黄褐色シルト層、下層がにぶい黄色シルト層である。出土遺物には須恵器蓋（257）、杯（258）がある他、土師器皿や布目瓦が認められる。52-OSとは7.2mの間隔をおいて平行する。

57-OS（第52図：図版38） G11AS・ATに位置する。検出長6.0mである。幅50cm～70cm、深さ12cm程度である。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は二層にわかれている。上層は明褐色シルト層、下層は黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。52-OSとは3.6mの間隔をおいて平行する。

61-OS（第52図：図版38） G11GPに位置する。検出長2.0mである。北部でN15°Eの傾きをもつ。幅30cm、深さ4cm程度である。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質シルト層である。土師器細片が1片出土している。



第52図 52・55・57・61-OS 断面図



第53図 52・55-OS 出土土器

#### e. 土坑

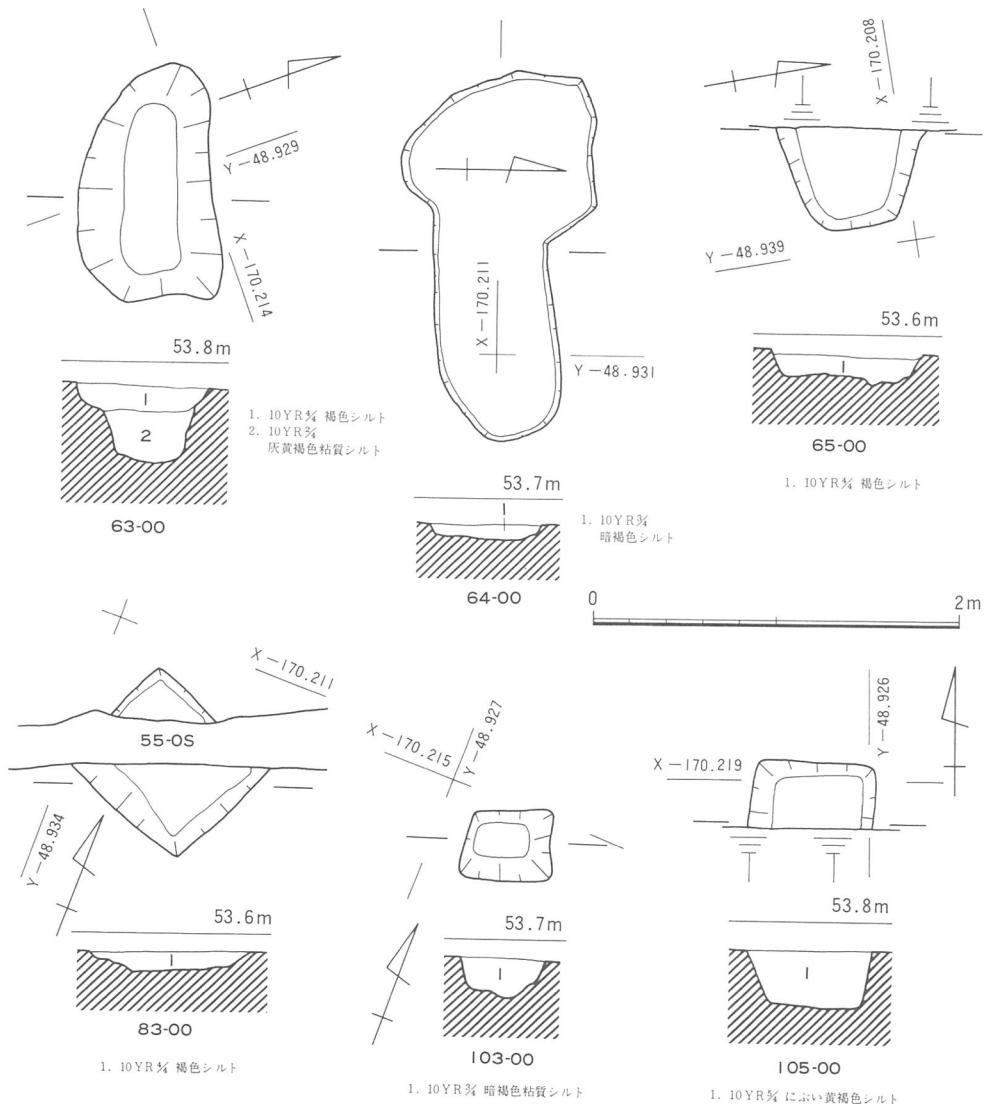
63-OO（第54図：図版39） G11DRに位置する。北西から南東方向に長い不整形なプランをもち、長さ1.24m、幅72cmである。底面は平坦で、比較的幅も広い。深さは約40cmである。埋土は二層に分かれており、上層が褐色シルト層、下層が灰黃褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

64-OO（第54図：図版39） G11CQ・CRに位置する。III区第1遺構面で検出した。55-OSを切り込んで東西方向に長いプランとなる。長さは約2.0m、最大幅は1.04mである。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色シルト層である。出土遺物は認められな

い。

65-00 (第54図: 図版39) G11CPに位置する。西肩部が側溝によって切られているためその全容は不明だが、南北82cm、東西56cm以上という大きさである。底面は多少凹凸があるが、全体として浅い皿状となる。深さは約15cmである。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

83-00 (第54図: 図版39) G11CQに位置する。中央を55-OSが横断するが、方形プランであることがわかる。長さは82cm、幅は72cmである。底面は平坦で広く、浅い皿状に



第54図 63～65・83・103・105-00 平・断面図

なり、深さは10cm程度である。埋土は褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

103-OO (第54図: 図版40) G11DSに位置する。長さ46cm、幅38cmで東西にやや長くなる方形プランを呈する。横断面形は楕状に掘り凹んでいる。深さは約20cmである。埋土は暗褐色粘質シルト層である。出土遺物は認められない。

105-OO (第54図: 図版40) G11ESに位置する。南肩部を側溝に切られるが、方形プランをもつものと思われる。東西の長さは70cm、南北の幅は36cm以上である。底面は平坦である。深さは30cm程度である。埋土はにふい黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

119-OO (第55図: 図版41) G11FQに位置する。直径80cm程度の円形のプランをもつ。断面形は浅い皿状を呈し、深さは約9cmである。埋土は暗褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

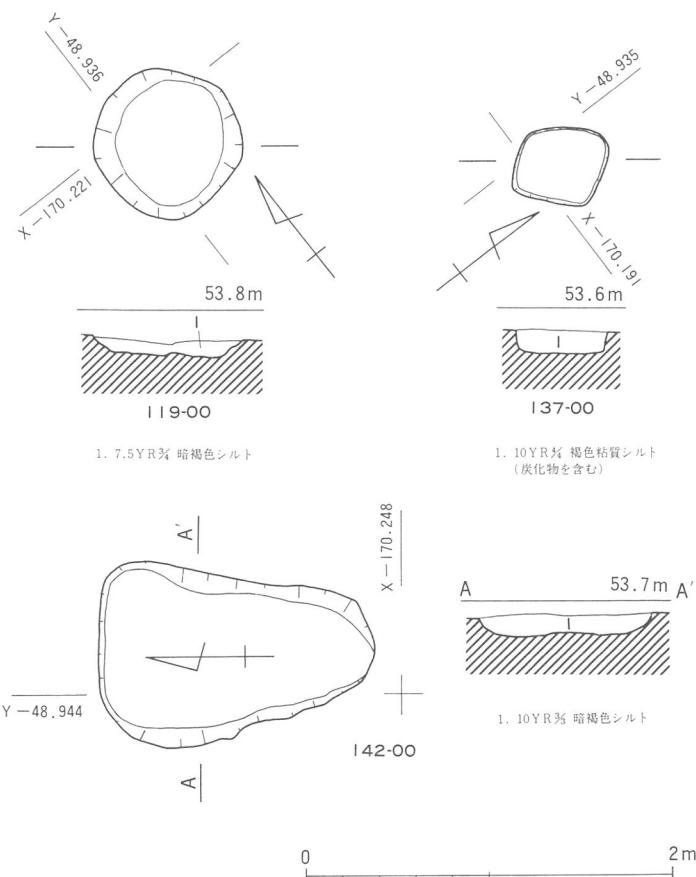
137-OO (第55図: 図版41) G06WQに位置する。長さ50cm、幅42cmで、南西から北東方向に若干長い方形プランをもつ。底面は平坦で、浅い皿状の断面形をとる。深さは12cm程度である。埋土は褐色粘質シルト層で、炭化物を含む。出土遺物には須恵器、土師器の細片が数点認められる。

142-OO (第55・56図

: 図版41・75・79)

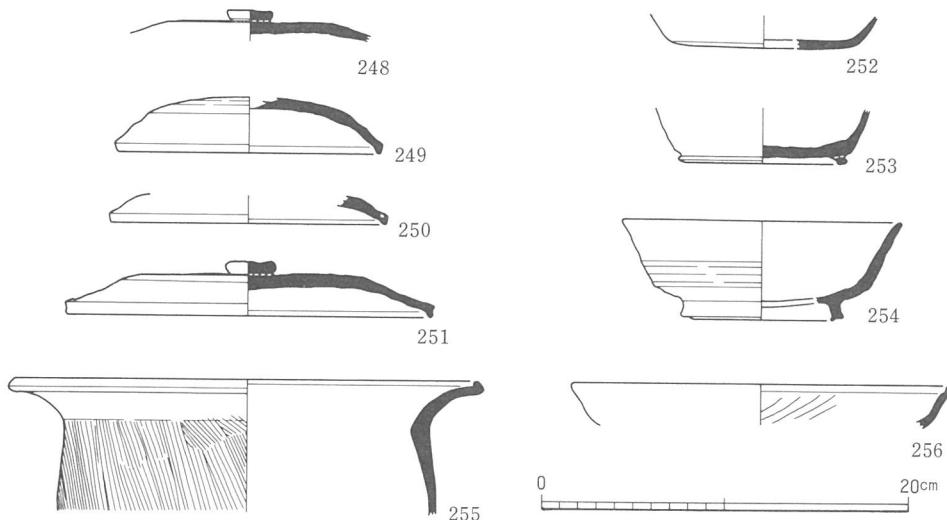
G11LOに位置する。

平面形は、南北方向に長く、北に向って幅の



第55図 119・137・142-OO 平・断面図

広がるバチ形である。その南北の長さは1.5m、東西の最大幅は1.0mである。横断面は浅い皿状を呈し、深さは約10cmである。埋土は暗褐色シルト層である。出土遺物には須恵器蓋（248～251）、杯（252～254）、土師器甕（255）、皿（256）、製塙土器（314・315）が認められる。須恵器蓋はいずれも天井部がふくらみをもつ形態をとり、249・250はC類、251はB類である。254はF類である。256は口縁部内面に放射状暗文を施している。これらのものは、時期的には34-OSと近いものと思われるが、遺構の検出面から言うと34-OSよりも下る可能性が考えられる。

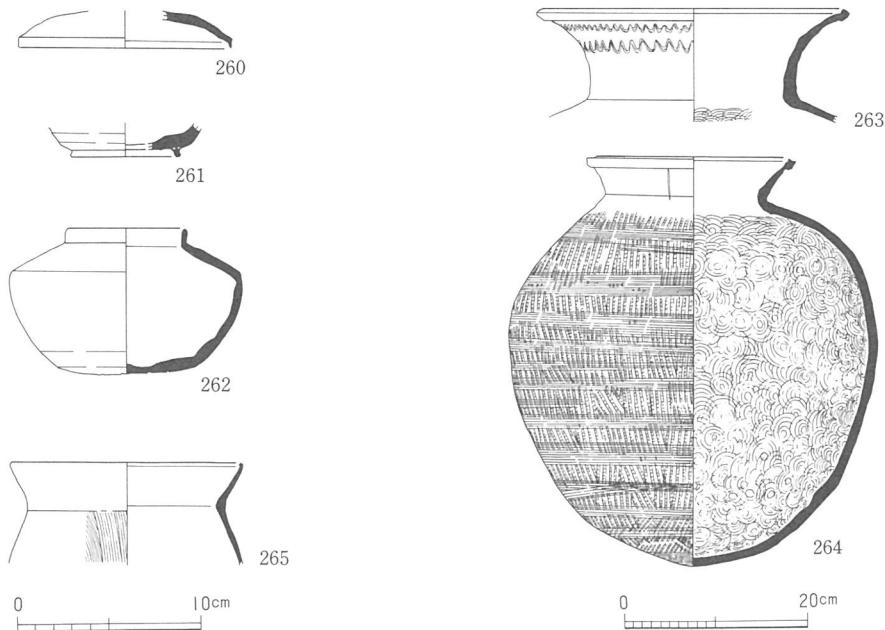


第56図 142-00 出土土器

#### f. 不明遺構

133-0X（第57・70図：図版42・76） G11BT付近に位置する。第1遺構面において検出した。平面形は不整形な上、縁辺部は不明瞭で、明確な肩部を有しない。しかしながら比較的遺存度の良好な土器を出土することから、遺構と言うよりも包含層的な堆積土層と思われる。土層は、黄橙色（10YR 7/8）粗砂、細砂混じり粘質シルト層で、土層の広がる範囲は、東方は調査区外にのびるが、南北7.5m、東西4m以上にわたる。層厚は10cm～20cmである。なお55-0Sの東端部はこの土層に覆われている。出土遺物は、須恵器蓋（260）、杯（261）、短頸壺（262）、甕（263・264）、土師器甕（265）などが認められる。この内260・261は破片でしかなかったが、262は完形で遺存し、264は接合復元後、ほぼ完形の状態となった。265も口縁部から体部上半しか遺存していなかつたが、現形のまま出

土した。須恵器蓋、杯などは、8世紀以降のものと思われるが、比較的遺存度の良い須恵器短頸壺、甕、土師器甕などは、6世紀末ないしは7世紀初頭頃のものと思われる。こういった状況や検出面における他の遺構との関係から考えると、この土層は二次堆積土層と思われ、検出位置が東方丘陵裾に接することから、本来丘陵上にあったものが流れ落ちてきたものではないかと推測できる。



第57図 133-OX 出土土器

#### 4. 鎌倉・室町時代

該当する遺構は、溝、石列、土坑などがあげられる。第1遺構面で検出されるものと第2遺構面で検出されるものがあり、当該期の中においても各遺構に時期差があるものと思われる。なお第2遺構面において検出されるものはII区にのみに限られる。いずれも水田に伴うものと思われる。

##### a. 溝

30-O-S (第58図: 図版43) G11RJに位置する。II区第2遺構面で、長さ4mにわたって検出された。9-OOを切り、北西から南東方向に掘られる。最大幅44cm、深さ6cmで

ある。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が灰色シルト層、下層が灰白色シルト層である。出土遺物としては須恵器と土師器の細片が僅かに認められる。

**31-OS** (第63図：図版43) G11SIに位置する。II区第2遺構面で検出した。29-OOを切り、北西から南東方向に掘られる。30-OSとはほぼ平行する。最大幅60cm、深さ4cmであるが、所々浅くなり途切れる部分もある。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色シルト層である。出土遺物は認められない。

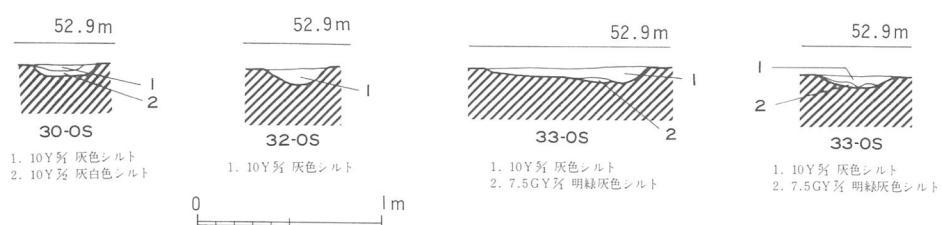
**32-OS** (第58図：図版43) G11UHに位置する。II区第2遺構面で約5.5mにわたり検出した。最大幅36cm、深さは8cmである。正南北方向のものである。横断面形は「U」字形を呈する。埋土は灰色シルト層である。出土遺物は認められない。

**33-OS** (第58図：図版43) G11THに位置する。32-OSと同様にII区南端辺にあり、第2遺構面の遺構である。正東西方向の溝で、西端を32-OSと接する。西端で幅は最大となり86cmである。深さは10cm程度である。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が灰色シルト層、下層が明緑灰色シルト層となる。出土遺物としては須恵器の破片が数片認められる。

**56-OS** (第61・70図：図版44・77) G06VSに位置する。III区第1遺構面で長さ4.2mにわたって検出した。54-OSと平行する南北方向のものである。幅30cm、深さ7cm程度の小溝である。埋土は黄褐色(2.5Y5/4)シルト層である。出土遺物には瓦器椀(275・277)などが認められる。

**59-OS** (第70図：図版44) G11DQ~IQに位置する。III区第1遺構面で検出した。これも54-OSとは平行する位置関係にあり、60-OSとは直交している。最大幅18cm、深さ約5cmの小溝であるが、21.4mにわたって検出した。埋土は褐色(10YR4/6)シルト層である。出土遺物は須恵器蓋の破片が1片認められる。

**60-OS** (第59図：図版44) G11HO~IRに位置する。III区第1遺構面で、長さ11mに



第58図 30・32・33-OS 断面図

わたって検出した。最大幅は1.9m、深さは40cm程度で、正東西方向のものである。横断面形は、中央部で「V」字形に深くなっている。埋土は三層に分かれ、上層から褐色粘質シルト層、にぶい黄褐色粘質シルト層、褐色粘質シルト層となる。出土遺物には須恵器や土師器が数片あるのみである。

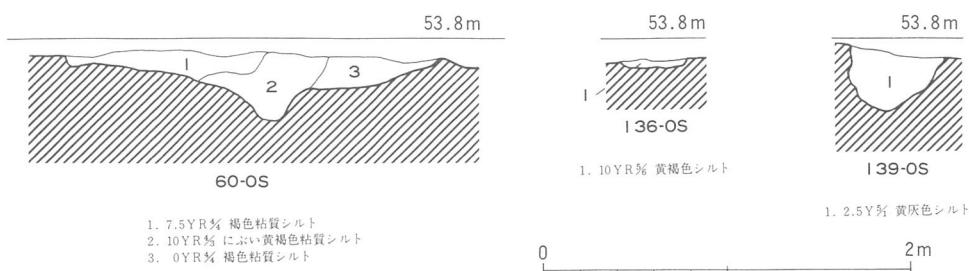
136-OS (第59図: 図版44) G11LNに位置する。III区第1遺構面で検出された。60-OSとはほぼ平行し、139-OSに対しては直行方向となる。長さ1.7m、幅50cm、深さ5cm程度である。横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄褐色シルト層である。出土遺物は認められない。

139-OS (第59図: 図版44) G11KM~OMに位置する。III区第1遺構面で約17.3mにわたって検出した。136-OSと接する辺りで浅くなり途切れているが、最大幅90cm、深さ30cmである。横断面形は「V」字形を呈する。埋土は黄灰色シルト層である。遺物には須恵器や土師器の細片がある。

140-OS (第70図) G11NNに位置する。III区第1遺構面で検出されたものである。ほぼ東西方向に走る二条の小溝である。幅20cm~40cm、深さ約5cmである。埋土は黄褐色(10YR5/6)シルト層である。出土遺物は認められない。

6-OS (第72図: 図版45) G11UHに位置する。II区第1遺構面で長さ6.5mにわたって検出した。正南北方向のものである。幅30cm、深さ5cmで、横断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト層である。出土遺物には須恵器、土師器、瓦器が含まれるが、いずれも細片である。

8-OS (第72図) G11PJに位置する。II区第1遺構面で検出したが、断面観察から第5b層の上面から掘り込まれていることがわかった。肩の一部が検出されただけで、規模は不明である。土坑の可能性も考えられる。埋土は灰白色(10Y5/2)砂礫混じり粘土層である。出土遺物は認められない。

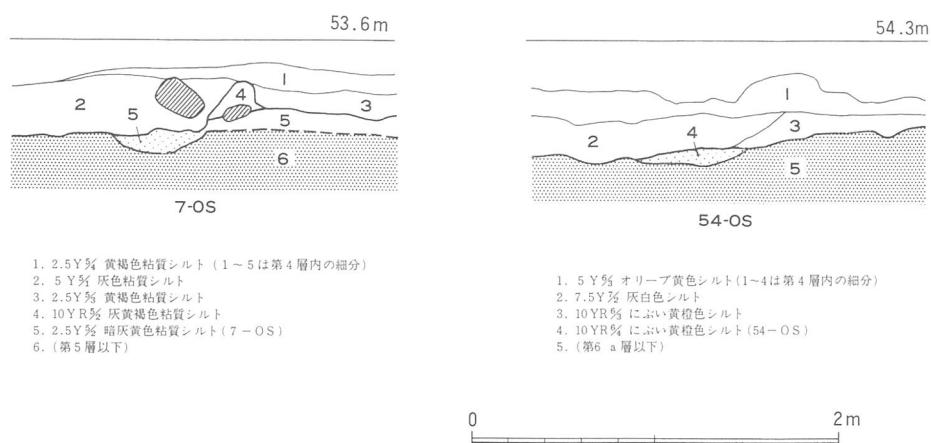


第59図 60・136・139-OS断面図

### b. 石列

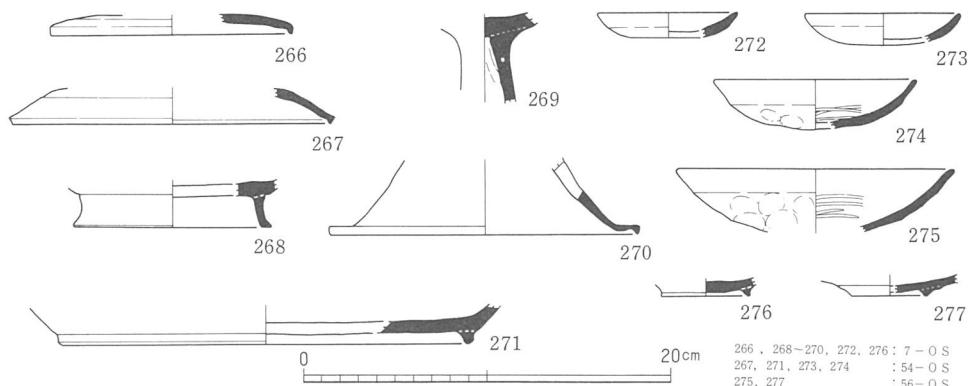
7-OS (第60・61図：図版45・77) G11THに位置する。II区第1遺構面で長さ10.5mにわたって検出した。南北方向のもので、6-OSの東側60cmに平行して位置する。本来は概ね人頭大の河原石を直線的に並べたものと思われるが、検出状況では完全に整列するものではなく、所々抜け落ち、また乱れている。石列の下は最大幅70cm、深さ13cmの溝状の窪みとなっている。横断面形は浅い皿状を呈し、埋土は暗灰黄色粘質シルト層である。これは元々溝があつて埋没後、その上に石列を設けたものか、裏込め土の一部が残存しているものは明確ではない。なおこの付近の土層観察から、後世においてもこの石列上を踏襲して畦畔がつくられていた様子が窺われる。出土遺物には、須恵器蓋(266)、杯(268)、高杯(269・270)、土師器皿(272)、瓦器碗(276)がある。276は断面三角形の退化した高台をもつ。見込みには粗い斜格子状の暗文がある。

54-OS (第60・61・68図：図版44・45・77・80) G06VS～G11DSに位置する。III区第1遺構面に検出したものである。ほぼ南北方向のものであるが、I区とIII区の間の微高地部分では、それを避けて西へ曲折しているようである。本来は7-OSと同様に人頭大の河原石を直線的に並べたものと思われるが、検出状況では所々抜け落ちており、南半部はほとんど遺存しない。また最南端部では拳大の石が集積する状況である。石列の下にはこれも7-OSと同様に溝状の窪みが認められる。最大幅は1.0m、深さは10cm程度である。横断面形は浅い皿状を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト層である。やはり石列構築前にあった溝であるのか、裏込め土の一部が残存するものは明確ではない。こういった石列は



第60図 7・54-OS 断面図

おそらく田畠を造成した時にその段差の縁辺部に置いたものと推測できる。出土遺物は須恵器蓋(267)、杯(271)、瓦器皿(273)、椀(274)などが認められる。274は口径11.1cm、内面の螺旋状暗文も粗く数周巡らせるだけである。なお石列中には292のような石臼も含まれていた。292は粉挽き臼の下臼で、主溝は8分画に6溝を刻んでいる。直径28.0cm～29.0cm、高さ6.5cmである。和泉砂岩を素材としている。



第61図 7・54・56-OS 出土土器

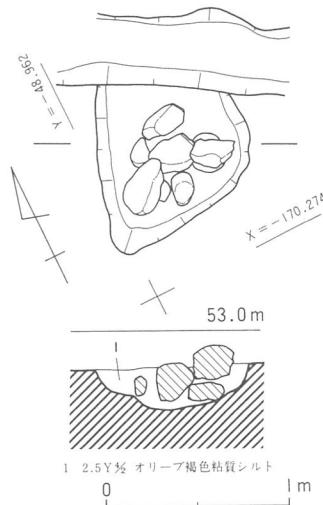
### c. 土坑

5-OO (第64図: 図版46・49) G 06 SWに位置する。

第3層を除去した後、地山面で検出した。長辺104cm、短辺90cmの長方形を呈する。深さは5cm程度である。埋土は黒色シルト層で、焼けた痕跡は認められないが、炭化物を多く含んでいる。出土遺物は認められない。

9-OO (第62図: 図版47) G 11 SJに位置する。II区第2遺構面で検出した。遺構の北肩部が30-OSに切られるため、全容は不明であるが、長軸90cm以上、短軸84cmである。内部に10cm～30cm大の河原石や角礫をつめている。横断面形は「U」字形を呈する。埋土はオリーブ褐色粘質シルト層である。出土遺物には須恵器甕の破片が1片のみ認められる。

10-OO (第63図: 図版47) G 11 SJに位置する。II区第2遺構面で検出したものである。



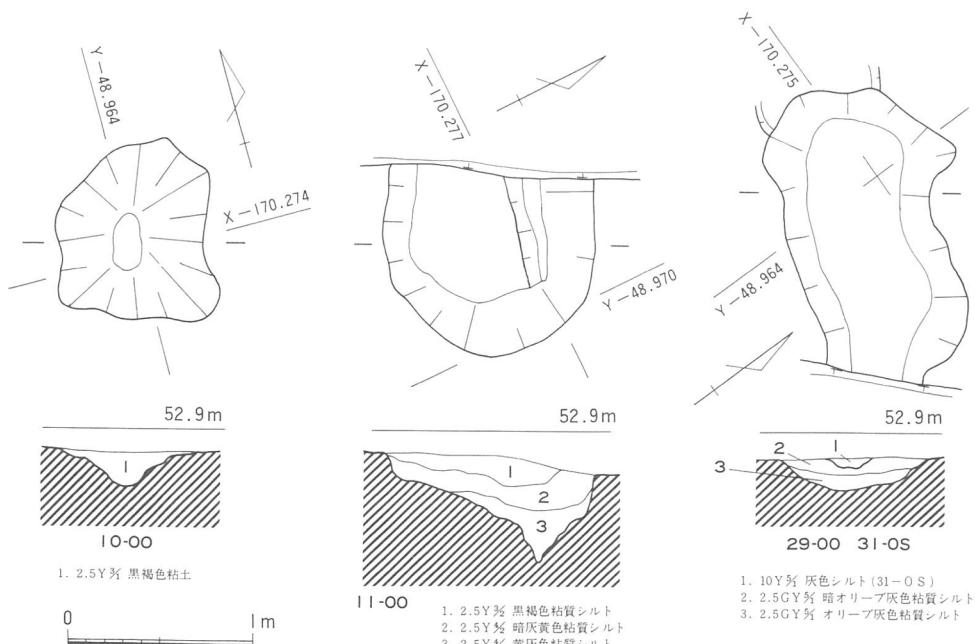
第62図 9-00 平・断面図

五角形状のプランをもち、長軸1.0m、短軸80cmである。横断面形は「V」字形を呈し、深さは18cmである。埋土は黒褐色粘土層である。出土遺物は認められない。

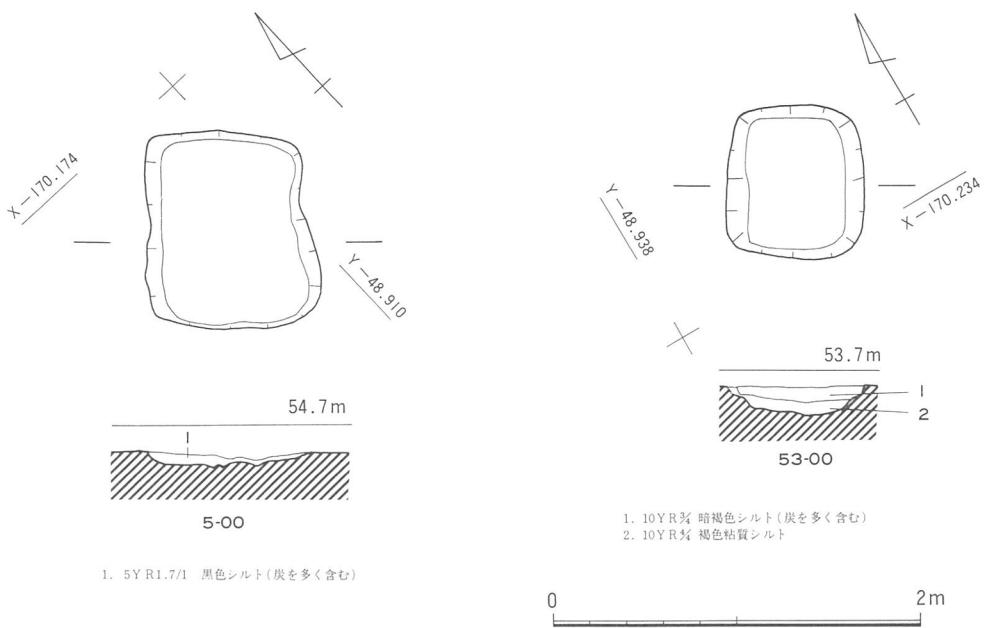
11-00 (第63図: 図版47) G11THに位置する。II区第2遺構面で検出したものである。西肩部が側溝に切られているため全体の形状は不明である。検出された部分は半円形を呈し、直径1.16mである。最深部は幅の狭い溝状の窪みとなり、その深さは60cm余りである。埋土は三層に分かれ、上層から黒褐色粘質シルト層、暗灰黄色粘質シルト層、黄灰色粘質シルト層となっている。出土遺物は認められない。

29-00 (第63図: 図版47) G11SJに位置する。II区第2遺構面で検出した。一部側溝によって切られる上、31-00によって切られる。北西から南東方向に長い不整形なプランをもち、長軸1.5m以上、短軸約1.0m、深さ約18cmである。横断面形は椀状を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が暗オリーブ灰色粘質シルト層、下層がオリーブ灰色粘質シルト層である。出土遺物としては須恵器、土師器が数片認められるのみである。

53-00 (第64図: 図版46) G11IPに位置する。III区第1遺構面で検出した。長辺82cm、短辺75cmの方形のもので、深さは14cmである。埋土は二層に分かれ、上層が暗褐色シルト層で炭化物を多く含み、下層が褐色粘質シルト層である。なお肩部には一部赤褐色に焼けた痕跡が認められる。出土遺物は認められない。



第63図 10・11・29-00平断面図、31-0S断面図



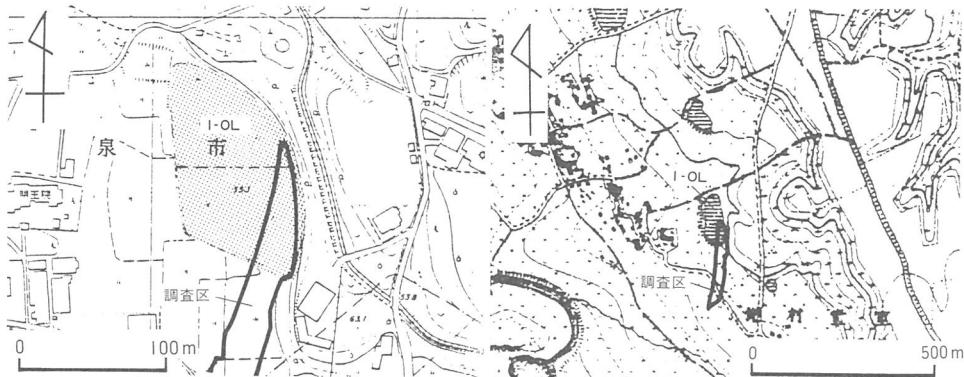
第64図 5・53-00 平・断面図

### 5. 江戸時代以降（第65・69・71図：図版49）

該当する遺構は、池（1-OL）、溝（3・4・14・24・25・28・40・41・46-OS）、土坑（26・27・44・48-OO）などがあげられる。これらの大半はI区に位置する。

池（1-OL）についてはその東肩と南方の一部を検出した。I区全体が池の一部である。調査開始時には、池は既に埋め立てられており、農地または荒地、住宅用地となっていたが、明治18年（1885年）に大日本帝国陸地測量部が作成した地図によってその存在を確認することができる。池は平面扇形をしたもので、南北約150m、東西約80mの規模である。池は調査区の北方から東方に湾状に巡る丘陵端部とI区、III区間の微高地を利用して、西方に土手を築いて構築されたものであろう。現在I区とIII区の間にある里道や西方に南北に走る畦道などはその土手の名残と思われる。池の埋土は、第III章第1節において包含層として先述している第2層、第3a層、第3b層である。出土遺物や土層の状況などから、第2層は極めて新しい時期のもので、池を埋め立てたときの整地土層と思われ、第3a、3b層が本来の池の堆積土層と考えられる。なお第3a層と第3b層は、前者が湿地における堆積の状況を示すのに対し、後者は攪乱土層的な様相を示していること、また前者は南端部にまでその広がりが及ばず、池の肩を形成するように終ること、逆に後者は池の南端部にしか

認められないこと、などから池は、ある時期に本来あった池の南端部を一部埋めて縮小していることが窺われる。なお3-OSはこの1-OLに伴う導水溝と思われる。出土遺物については先項に委ねる。



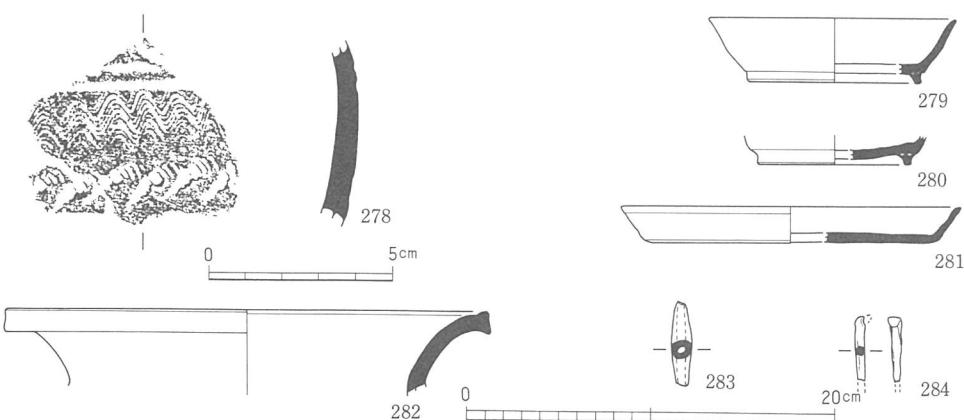
第65図 I-OL範囲推定図(左)と明治18年測量の地図(右)

## 6. その他の出土遺物 (第66・67・68: 図版76~78・80)

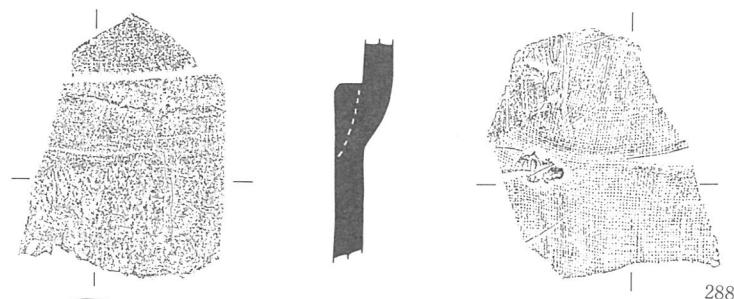
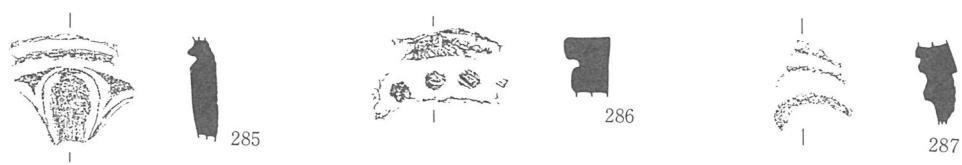
包含層や遺構から出土した遺物の他に、現地表面上において採取されたものやトレンチの掘削中に層位を確定し得ず採取したものがある。以下にこれらのものについて述べる。

これらのものは弥生土器 (278)、須恵器 (279~282・299・300・324)、土師器、須恵系土器、土師系土器、瓦器、国産陶磁器、白磁 (325)、製塩土器、土錘 (283)、瓦 (287)、鉄釘 (284)、石鎌 (291) など多種多彩であるが、遺存状況が良好なものや特に注意を引くものを選び掲載した。

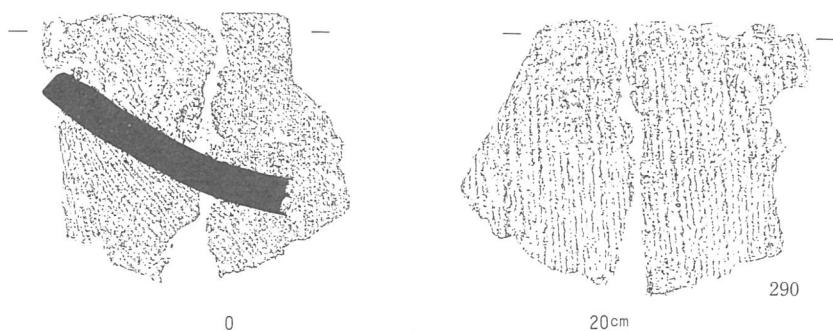
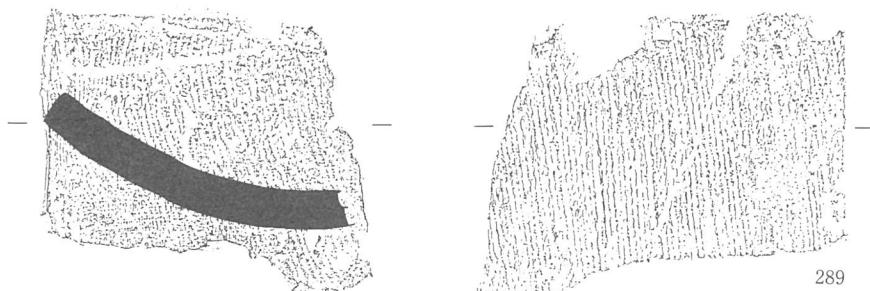
278は弥生土器壺の体部片と思われる。279・280・299は須恵器杯である。279・280はB



第66図 その他の出土土器・鉄製品

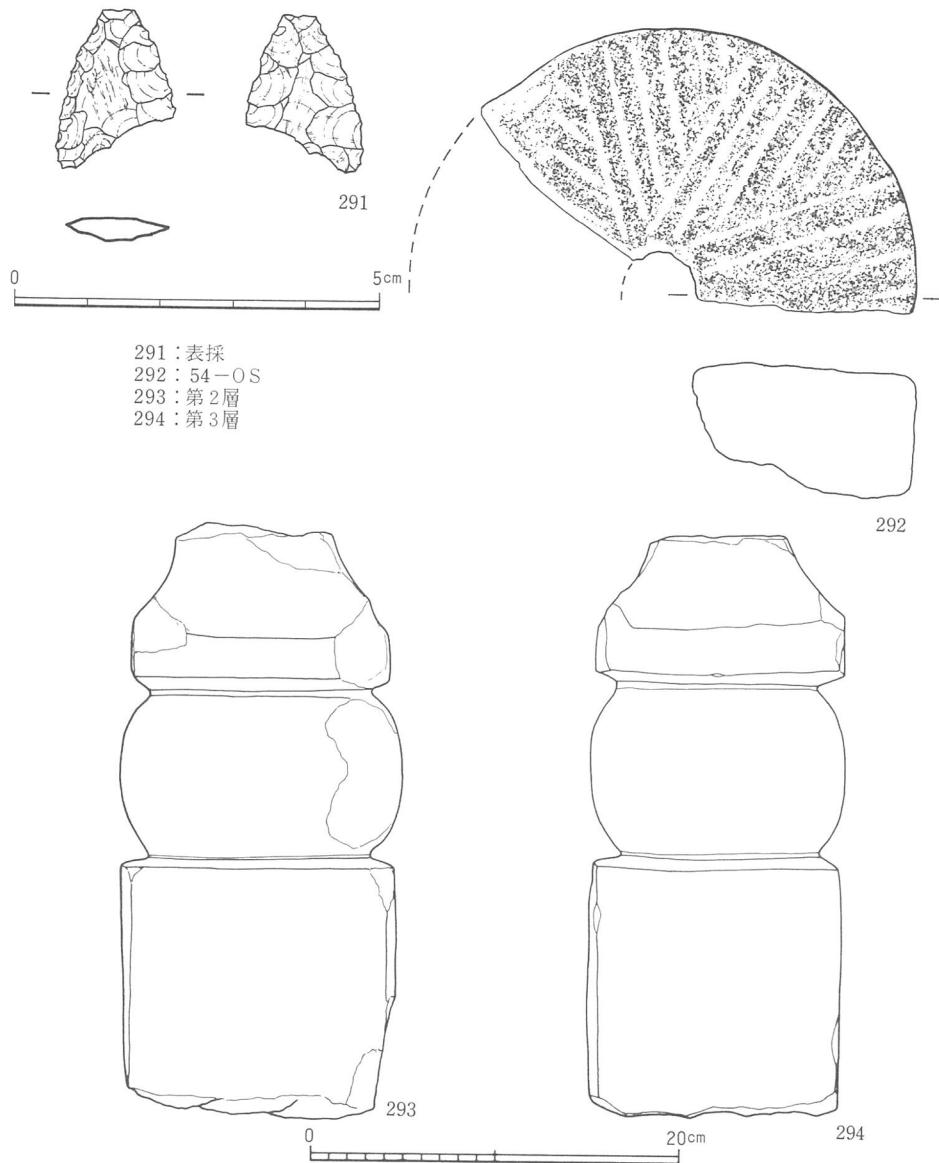


285・286：第4層  
287：表採  
288・290：267-OW(第2層)  
289：267-OW(第1層)



0 20cm

第67図 出土瓦



第68図 出土石製品

類、299はH類である。281は須恵器皿である。300は須恵器長頸壺の頸部、282は須恵器甕の口縁部である。324に示す須恵器片は器種は不明であるが、断片的に墨書が認められる。また325に示す白磁碗底部にも墨書が認められる。283は土師質の土錘である。287は巴紋軒丸瓦の一部と思われる。284は頭部と先端部を欠損しているが鉄釘である。291はサヌカイト製の凹基無茎石鏃である。先端と逆刺の一端を欠く。片面中央素材剝離面を残す。長さ2.14cm、厚さ0.325cm、重量1.14gである。縄文時代の所産とみられる。